顕孝寺遺跡 1

― 顕孝寺遺跡第１次調査の報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1409集

2021

福岡市教育委員会

ken kou ji

顕孝寺遺跡 1

— 顕孝寺遺跡第１次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1409集

遺跡略号　KKG-1
調査番号　1537

2021

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では今から約2,200年前の弥生時代中期初頭の墓に副葬された６本の銅剣や銅矛が発掘されました。この成果から、水上交通の要所であった本調査地点に有力なリーダーのもと、先進文化や技術をいち早く受け入れた集落が栄えていたことが判りました。さらに、６世紀前半に築造された前方後円墳が発見され、新羅土器も出土したことから史上有名な「磐井の乱」との関連が注目されるところです。

本書はこうした調査成果を収めたもので、多様な開発でやむなく消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで辰巳開発株式会社をはじめ関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

令和３年３月25日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が平成27年度に宅地造成事業に伴い、福岡市東区多々良１丁目740番、739番、722番、735番、734番３、748番、746番、747番、749番、750番、661番３、744番、745番１、745番２地内で実施した顕孝寺遺跡第１次調査報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3．調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他、池田祐司、井上繭子、木下博文、朝岡俊也、藤野雅基、坂口剛毅が作成した。
4．本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5．本書に掲載した遺物実測図の青銅製利器は宮井善朗が作成し、浄書を菅波正人、本田浩二郎が行い、Fig.87～91の石器は萩原博文、荒牧が作成し、浄書は萩原、杉山富雄が行った。その他の遺物実測は荒牧が主に行い、遺物浄書は岩隈拓人が行った。
6．本文はp-93、94を杉山が執筆した他は荒牧が執筆した。
7．本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡　例

1．本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2．掲載した遺物の番号は土器は通し番号とし、その他は図版（Fig.）別に１から付した。
3．遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、貯蔵穴をSU、甕棺墓をST土坑をSK、溝をSD、柱穴をSP、性格不明のものをSXとした。
4．遺構番号は調査において全遺構に通し番号を付していき、１区を１～200番台、２区を300番台、３区を500番台とした。本書では調査時と同じ遺構略号と番号を用いている。

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
1．調査に至る経過…… 1
2．調査の組織…… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
1．地形…… 2
2．弥生時代の周辺遺跡…… 2
3．古墳時代の周辺遺跡…… 2
Ⅲ　遺構と遺物 …… 2
1．調査の経過と調査区設定…… 2
2．本書の構成…… 4
3．遺構と遺物説明…… 4
（1）1区弥生時代の遺構と遺物…… 4
（2）1区古墳時代の遺構と遺物……50
（3）1区中世の遺構と遺物……59
（4）2区の遺構と遺物……60
（5）3区の遺構と遺物……64
（6）第1次調査出土打製石器及び関連資料……89
Ⅳ　おわりに …… 95
1．遺構の時期的変遷……95
2．甕棺墓群について……96
3．弥生前期末～中期前半の土器について……97

挿図目次

Fig.1　顕孝寺遺跡の位置図（1/25,000） …… 3
Fig.2　周辺前方後円墳の分布（1/50,000） …… 3
Fig.3　顕孝寺遺跡の旧地形（昭和初期作成　1/8,000） …… 3
Fig.4　顕孝寺遺跡第1次の調査範囲（1/1,000）… 4
Fig.5　第1区遺構全体図（1/200）…… 5
Fig.6　第1区弥生時代遺構分布図（1/200）…… 6
Fig.7　貯蔵穴A-1、2、3群実測図（1/40） …… 7
Fig.8　貯蔵穴A-4、5群実測図（1/40）…… 8
Fig.9　貯蔵穴A-6、7群実測図（1/40）…… 9
Fig.10　貯蔵穴A-8、9、B-1～3群実測図（1/40）…10
Fig.11　貯蔵穴C-1群実測図（1/40） ……11
Fig.12　貯蔵穴C-2、3群実測図（1/40）……12
Fig.13　SU06、07出土遺物実測図（1/3） ……14
Fig.14　SU08出土土器実測図（1/3） ……15
Fig.15　SU09出土土器実測図（1/3） ……16
Fig.16　SU17、18、22出土土器実測図（1/3） ……17
Fig.17　SU23、26出土土器実測図（1/3） ……18
Fig.18　SU27出土土器実測図（1/3） ……19
Fig.19　SU28、39出土土器実測図（1/3） ……20
Fig.20　SU40、41、42、46、48出土土器実測図（1/3）21
Fig.21　SU50出土土器実測図（1/3） ……22
Fig.22　SU58、63出土土器実測図（1/3） ……23
Fig.23　SU65、66出土土器実測図（1/3） ……24
Fig.24　SK70、SU96出土土器実測図（1/3）……25
Fig.25　SU100出土土器実測図（1/3）……26
Fig.26　1区出土石器実測図（1/1、1/2、1/3）……27
Fig.27　SX01、13、SK70実測図（1/40）……28
Fig.28　甕棺墓配置図（1/80） ……29
Fig.29　甕棺墓ST19実測図（1/30）……30
Fig.30　ST19甕棺実測図（1/10）……31
Fig.31　甕棺墓ST20、21実測図1（1/30）……32
Fig.32　甕棺墓ST20、21実測図2（1/15、1/30）…33
Fig.33　ST20、21甕棺実測図（1/10）……34
Fig.34　ST21出土銅剣実測図（2/3） ……35
Fig.35　ST20、ST21内出土石剣切先実測図（1/2）35
Fig.36　ST21出土銅矛実測図（2/3） ……36
Fig.37　甕棺墓ST59実測図（1/30）……37
Fig.38　ST59甕棺実測図（1/10）……38
Fig.39　ST59出土銅矛実測図（2/3） ……40
Fig.40　甕棺墓ST47、60実測図（1/30）……41
Fig.41　ST47、60甕棺実測図（1/10）……42
Fig.42　ST60出土銅剣実測図（2/3） ……43
Fig.43　甕棺墓ST106実測図（1/30） ……44

Fig.44　ST106甕棺実測図（1/10）……45
Fig.45　甕棺墓ST107実測図（1/30）……46
Fig.46　ST107甕棺実測図（1/10）……47
Fig.47　ST107出土銅剣実測図（2/3）……48
Fig.48　ST107出土銅矛実測図（2/3）……49
Fig.49　顕孝寺１号墳周溝実測図（1/400）……51
Fig.50　顕孝寺１号墳遺構配置図（1/200）……52
Fig.51　顕孝寺１号墳墳丘土層断面図（1/50）……53
Fig.52　顕孝寺１号墳周溝土層断面図（1/40）……53
Fig.53　周溝内祭祀遺構SX33実測図（1/10）……54
Fig.54　SX33出土土器（須恵器坏、高坏）実測図（1/3）……55
Fig.55　SX33出土土器（土師器高坏）実測図（1/3）……56
Fig.56　SX33出土土器（土師器高坏、坏、坩）実測図（1/3）……57
Fig.57　周溝内出土土器実測図（1/3）……58
Fig.58　SX54実測図（1/60）……59
Fig.59　SK16、11実測図（1/20）・出土遺物実測図（1/4、1/3）……60
Fig.60　第２区遺構配置図（1/100）……61
Fig.61　第２区遺構出土土器実測図（1/3）……62
Fig.62　第２区遺構出土石器実測図（1/2・1/3）…63
Fig.63　第３区遺構配置図（1/150）……65
Fig.64　SC502出土土器実測図１（甕　1/3）……67
Fig.65　SC502出土土器実測図２（甕　1/3）……68
Fig.66　SC502出土土器実測図３（甕　1/3）……69
Fig.67　SC502出土土器実測図４（甕　1/3）……70
Fig.68　SC502出土土器実測図５（甕　1/3）……71
Fig.69　SC502出土土器実測図６（甕　1/3）……72
Fig.70　SC502出土土器実測図７（甕　1/3）……73
Fig.71　SC502出土土器実測図８（甕、甕蓋　1/3）74
Fig.72　SC502出土土器実測図９（甕底部　1/3）…75
Fig.73　SC502出土土器実測図10（甕底部　1/3）…76
Fig.74　SC502出土土器実測図11（壷、高坏　1/3）77
Fig.75　SC502出土土器実測図12（鉢　1/3）……78
Fig.76　SC502出土土器実測図13（鉢　1/3）……79
Fig.77　SC502出土土器実測図14（壷、鉢等の底部）80
Fig.78　SC503、501出土土器実測図（1/3）……81
Fig.79　SC510、512出土土器実測図（1/3）……82
Fig.80　SC513、514出土土器実測図（1/3）……83
Fig.81　SC515、516出土土器実測図（1/3）……84
Fig.82　SC522出土土器実測図（1/3）……85
Fig.83　SC524出土土器実測図（1/3）……86
Fig.84　SC529、539、564出土土器実測図（1/3）…87
Fig.85　第３区出土紡錘車（1/3）……88
Fig.86　第３区出土石器、土錘実測図（1/2、1/3）…88
Fig.87　出土石器実測図１……89
Fig.88　出土石器実測図２……90
Fig.89　出土石器実測図３……91
Fig.90　出土石器実測図４……92
Fig.91　出土石器実測図５……93
Fig.92　甕棺墓群分類配置図（1/80）……96
Fig.93　朱と青銅製利器配置図（1/30）……97
Fig.94　甕棺一覧図（1/30）……97
Fig.95　出土土器分類図１（甕　1/6）…… 100
Fig.96　出土土器分類図２（壷　1/6）…… 101
Fig.97　出土土器分類図３（鉢　1/6）…… 102

表

Tab.1　貯蔵穴一覧表……13
Tab.2　弥生時代各区遺構の消長……95

カラー写真目次

ph.1　顕孝寺１次調査全景…… 103
ph.2　甕棺出土青銅製利器…… 103
ph.3　ST19甕棺埋置状況（縦断面土層）…… 104
ph.4　ST20、21甕棺埋置状況 …… 104
ph.5　ST20内下顎骨と石剣切先出土状況 …… 104
ph.6　ST21銅矛出土状況（棺外目張り粘土内） 104
ph.7　ST21銅矛、銅剣出土状況 …… 104
ph.8　ST59人骨、銅矛出土状況 …… 104
ph.9　ST60銅剣出土状況 …… 104
ph.10　ST107銅矛、銅剣出土状況…… 104
ph.11　ST107銅剣茎付着絹糸痕有機物（拡大）… 105
ph.12　ST59銅矛袋部内木柄と巻かれた紐状繊維 105
ph.13　３区SC502遺物出土状況…… 105
ph.14　３区SC502検出状況…… 105
ph.15　１区SU23遺物出土状況 …… 105
ph.16　１区SU17土層 …… 105
Ph.17　３区SC502埋土内貝層SX580検出状況 … 106
Ph.18　２区全景…… 106
Ph.19　顕孝寺１号墳後円部墳丘最下の焼土、炭層（SX52）…… 106
Ph.20　周溝SD05内SX33祭祀遺物出土状況…… 106
Ph.21　周溝SD10内出土新羅土器224…… 106

白黒写真目次

ph.1　１区出土石器……25
ph.2　ST21出土銅剣 ……35
ph.3　ST21出土銅矛 ……36
ph.4　ST59出土銅矛 ……40
ph.5　ST60出土銅剣 ……43
ph.6　ST107出土銅剣……48
ph.7　ST107出土銅矛……49

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市東区多々良１丁目740番,739番、722番、735番、734番３、748番、746番、747番、749番、750番、661番３、744番、745番１、745番２地内における宅地造成事業に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成25年７月10日付で受理した。これを受けて文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である顕孝寺遺跡に位置していることから踏査を同年７月23日、試掘調査を同年９月10日に実施した。試掘調査では遺構が確認され、遺構の保全等に関して申請者と協議を行うことになった。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから遺構が分布すると推定される範囲を中心に発掘調査を実施することで合意し、辰巳開発株式会社を委託者、福岡市長を受託者として平成28年１月４日に埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。この契約に従い発掘調査を同年１月25日から７月21日まで実施し、資料整理を平成29年度に行い、契約変更後、令和２年度に報告書作成を行うことになった。

2.調査の組織

平成27年度の発掘調査、令和２年度の報告書作成を以下の組織体制で行った。

【調査主体】　福岡市教育委員会

【調査総括】　経済観光文化局　文化財部埋蔵文化財課　課長　常松　幹雄（平成27年度）
文化財活用部埋蔵文化財課　課長　菅波　正人（令和２年度）
調査第２係長　榎本　義嗣（平成27年度）
調査第２係長　藏冨士　寛（令和２年度）

【庶務】　埋蔵文化財審査課管理係　横田　忍（平成27年度）
文化財活用課管理調整係　松原加奈枝（令和２年度）

【事前審査】　埋蔵文化財審査課事前審査係長　佐藤　一郎（平成27年度）
埋蔵文化財課事前審査係長　本田浩二郎（令和２年度）
主任文化財主事　池田　祐司（平成27年度）
田上勇一郎（令和２年度）
文化財主事　森本　幹彦（平成27年度）
山本　晃平（令和２年度）

調査基本情報一覧

遺跡名	顕孝寺遺跡	調査次数	１次	調査略号	KKG-1
調査番号	1537	分布地図福番号	019	遺跡番号	0076
申請地面積	4,070㎡	調査対象面積	1,500㎡	調査面積	1,500㎡
調査期間	平成28(2016)年１月25日～平成28年７月21日			事前審査番号	25-2-402
調査地	福岡市東区多々良１丁目661-3　ほか				

Ⅱ　位置と環境

1．地形

顕孝寺遺跡は博多湾に注ぐ多々良川に沿った丘陵に位置する。遺跡名の顕孝寺は戦国時代に博多を含む筑前を治めていた大友宗麟が対外貿易の拠点としていた寺名に由来する。それからも解されるように本遺跡は玄海灘に通じた河口に位置し、対外交易の拠点としての条件をそなえている。

現状では造成による改変が進行し、地形を読み取ることが困難となっているが、調査地点と周辺のみが辛うじて丘陵地形を残している。

2．弥生時代の周辺遺跡（Fig.1）

弥生早期～前期は本遺跡から多々良川を遡った低地に立地した江辻遺跡、蒲田遺跡に集落が形成されている。当時は近くの多々良川下流域まで海が入り込んでいたと考えられる。前期末になり本遺跡を含む丘陵地帯に集落が進出してくるようになる。開発により一帯の丘陵部の遺跡がほとんど失われているが、造成時に中広形銅剣鋳型、中細形銅戈鋳型、広形銅戈鋳型、銅釧鋳型が出土していることから中期以降には青銅器生産をおこなっていた拠点集落が形成されていたと考えられる。現状から地形を読み取ることはできないが、旧地形図（Fig.3）から一帯の丘陵が八つ手状に延び、尾根が複雑に絡みあっていたことがわかる。居住域はその頂部を中心に形成されていたのであろう。

3．古墳時代の周辺遺跡（Fig.2）

八つ手状に派生した丘陵には多くの群集墳が立地していた可能性があるが、大半が失われたと考えられる。本調査において前方後円墳１基が発見され、近辺の丘陵斜面でも２基の古墳知られていたがすでに消滅している。

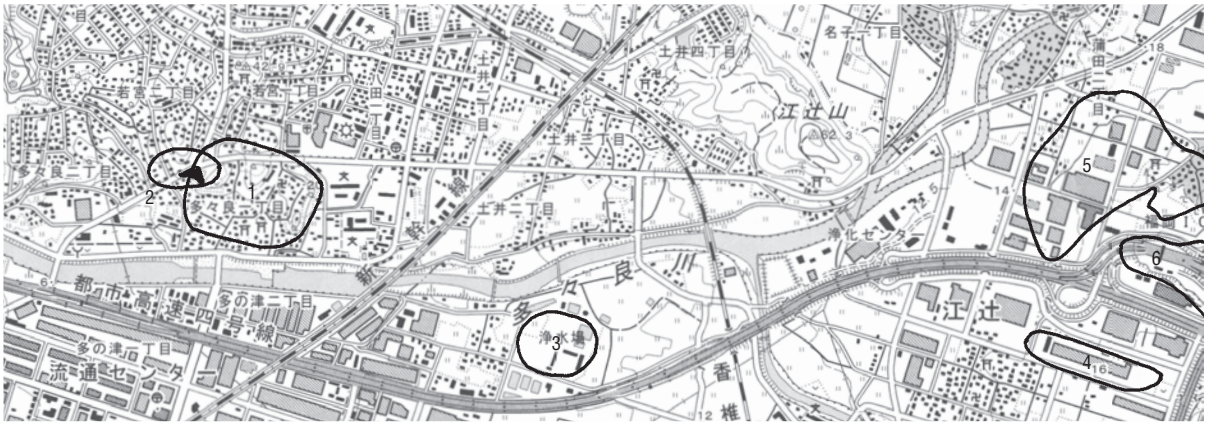
付近の博多湾沿岸には大陸との対外交渉とも関連し、重要拠点に首長の古墳が立地している。すでに宅地造成によって失われた香住ヶ丘古墳や多々良川河口に築造した前方後円墳の名島古墳からは三角縁神獣鏡が出土した。上流に遡った蒲田、江辻周辺では三角縁神獣鏡と盤龍鏡が出土した前方後円墳の天神森古墳や同じく前期の全長48mを測る前方後円墳の戸原大塚古墳が立地している。

後期は磐井の乱前後の統治に関連して古墳が注目される。鶴見塚古墳は顕孝寺遺跡から近い南東約2.3kmに位置している。糟屋屯倉を継承している可能性が高い糟屋評衙に比定された阿恵遺跡に近接する。江戸時代編纂の「筑前国続風土記拾遺」から全長80m級の前方後円墳であることや主体部の横穴石室に石屋形といわれる特徴的な石棺が置かれていた可能性が指摘されている。こうした点は那津官家に比定されている比恵８次、72次調査地点に近接して築造された全長75mの前方後円墳の剣塚古墳と共通するところが多く、大和朝廷が支配拠点として設置したミヤケの統治者と古墳の被葬者との関連が注目される。

Ⅲ　遺構と遺物

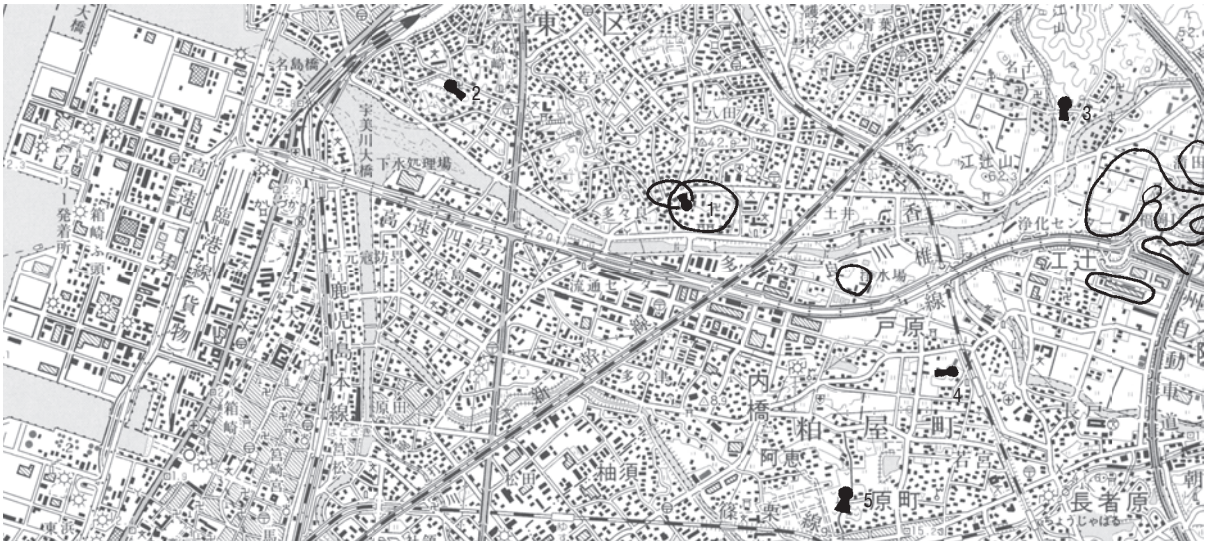
1．調査の経過と調査区設定（Fig.4）

調査は試掘成果をもとに遺構の分布を確認しながら調査区を設定していった。先ず、削平され平坦となった丘陵頂部の１区から着手した。１区では遺構が全面に広がったことから予定地より拡張することになり、調査に全期間を費やすことになった。従って１区の調査を継続しながら、丘陵斜面の２



1. 顕孝寺遺跡（黒塗りは１次調査地点）　2. 多々良古墳群　3. 戸原麦尾遺跡　4. 江辻遺跡　5. 蒲田部木原遺跡　6. かけ塚遺跡

Fig. 1　顕孝寺遺跡の位置図（1/25,000）



1. 顕孝寺１号墳　2. 名島１号墳　3. 天神森古墳　4. 戸原大塚古墳　5. 鶴見塚古墳

Fig. 2　周辺前方後円墳の分布（1/50,000）

Fig. 3　顕孝寺遺跡の旧地形（昭和初期作成 1/8,000）　破線は顕孝寺遺跡の範囲　太線内は1次調査区

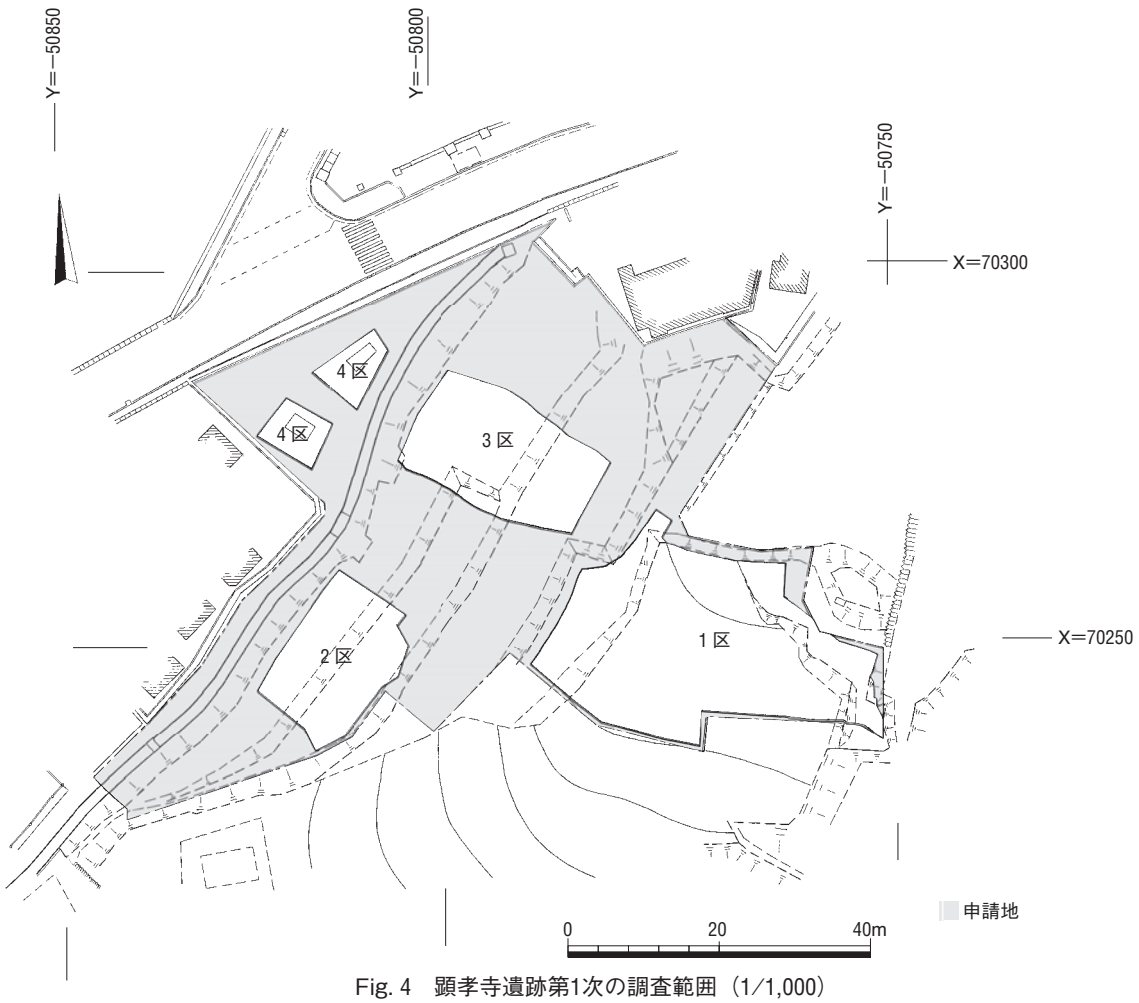


Fig. 4　顕孝寺遺跡第1次の調査範囲（1/1,000）

区、３区の弥生時代の住居跡群を併行しながら調査した。４区は丘陵裾のグライ化した粘土が厚く堆積する沖積地である。この区域では試掘トレンチを入れたが、遺構は検出されなかった。

２．本書の構成

概要については本書末尾の抄録にあるので本文では割愛する。各遺構、遺物の説明は１～３区の区ごとに時代順で行う。最後に、本調査全体から出土した旧石器から弥生時代の打製石器を掲載、説明する。なお、遺構番号は調査において１区が１～200番台、２区が300番台、３区が500番台としたものを、そのまま使用する。

３．遺構と遺物説明

（１）１区弥生時代の遺構と遺物

a．貯蔵穴

前方後円墳の後円部が位置する北東端の頂部を囲むように総数48基が検出された。

（分布）

丘陵頂部付近で密集して検出された貯蔵穴群をＡ群、下った地点で帯状に検出された貯蔵穴群をＣ群とし、Ａ群とＣ群の間に散在して単独的に検出された貯蔵穴をＢ群とする。各群の検出面の標高はＡ群が16.76～17.56m、Ｂ群が16.41～16.72m、Ｃ群が16.0～16.50mを測る。

Ａ群の北東端に位置したSU02、15、48より北側では現代の造成のみならず古墳築造時の地山成形による削平が著しく、貯蔵穴がみられない。北西部のSU44、45の北、東側では古墳の墳丘盛土下から検出される。Ａ群の南側はほぼコンターに沿って明瞭に限られ、丘陵頂部を中心に弧状に巡ることが判る。なお、東端のSU22より南東側で検出されていないのは甕棺墓と古墳周溝によって消滅して

Fig. 5　第1区遺構全体図（1/200）

Fig. 6　第1区弥生時代遺構分布図（1/200）

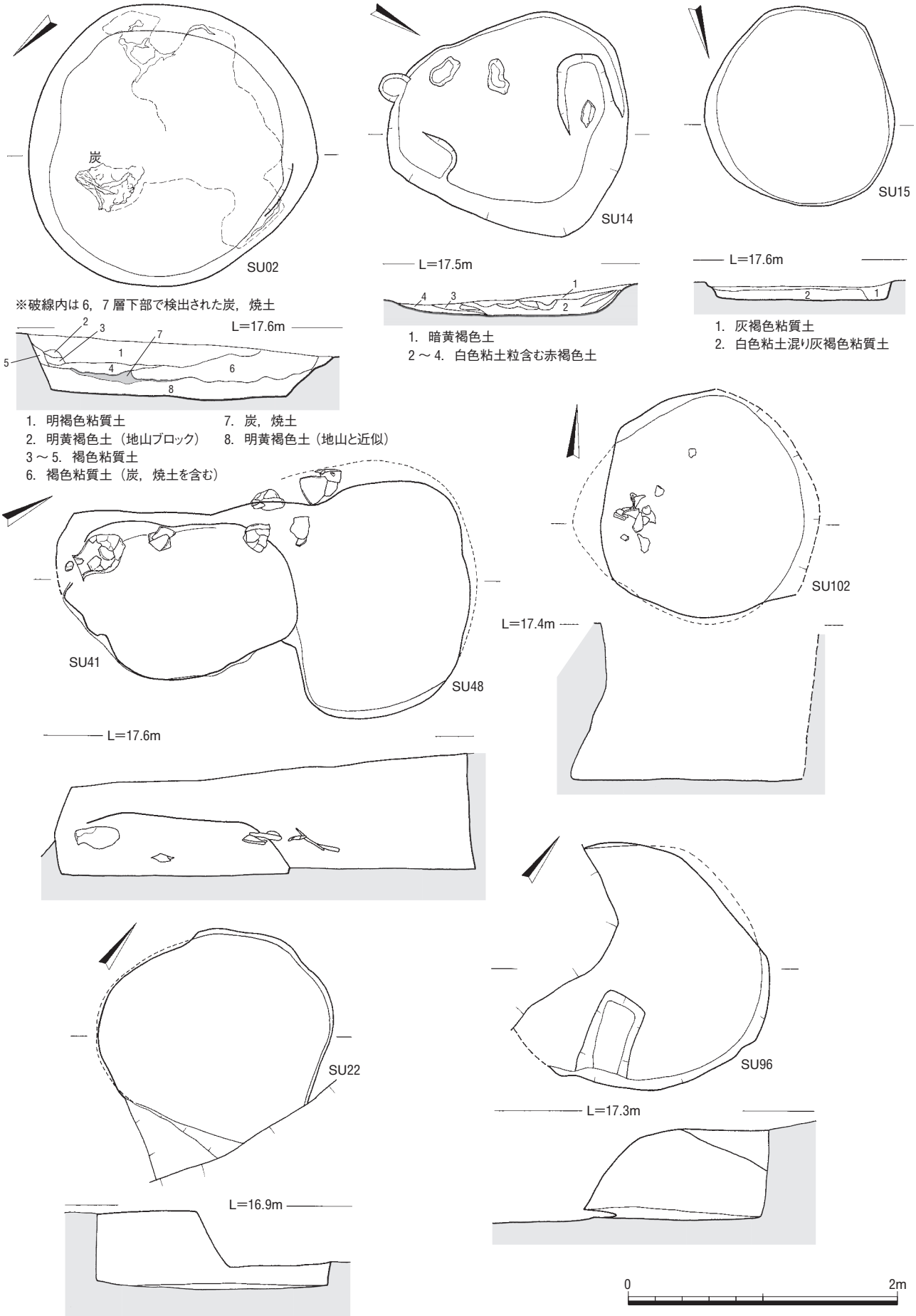


Fig. 7　貯蔵穴A-1、2、3群実測図（1/40）

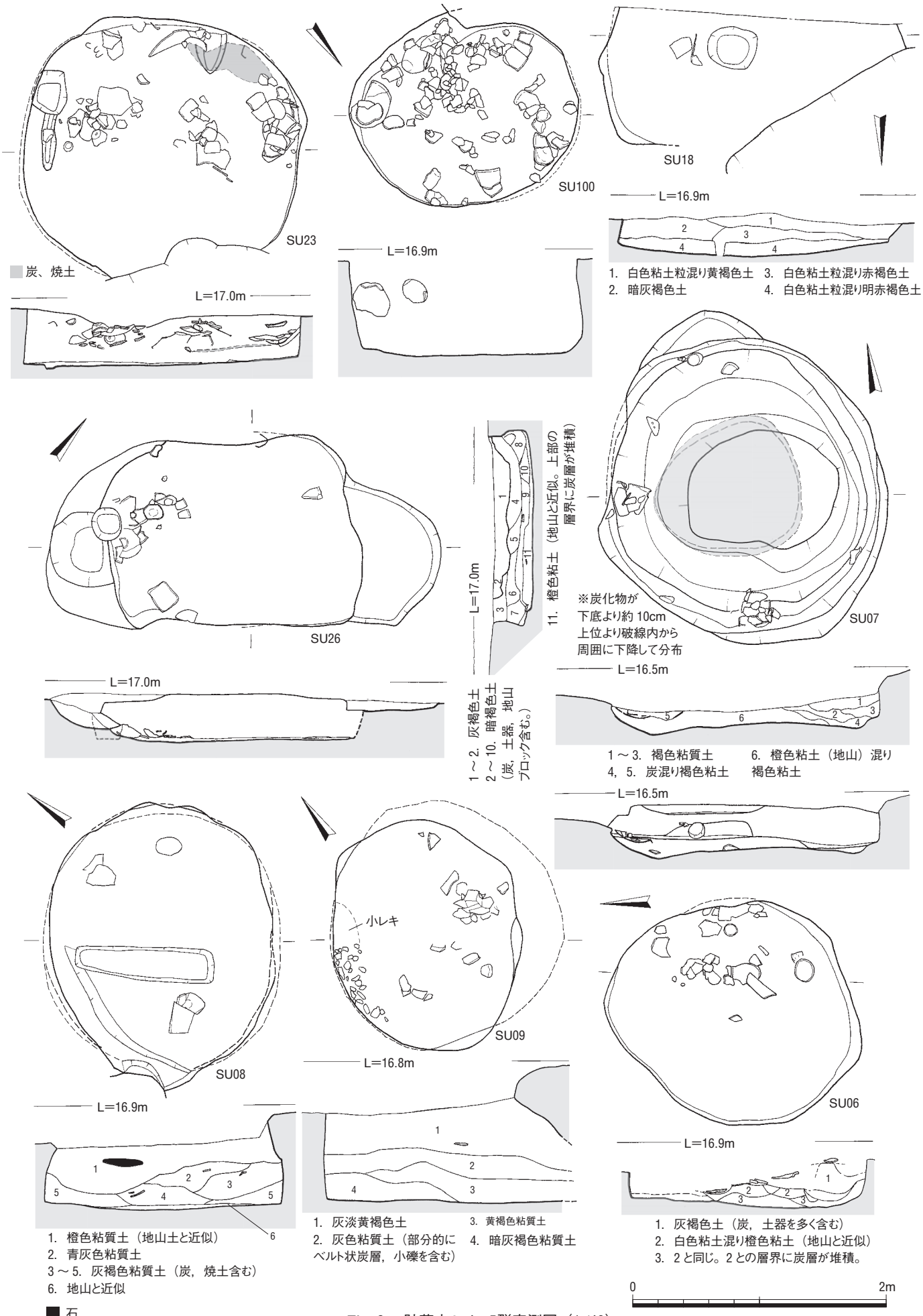


Fig. 8　貯蔵穴A-4、5群実測図（1/40）

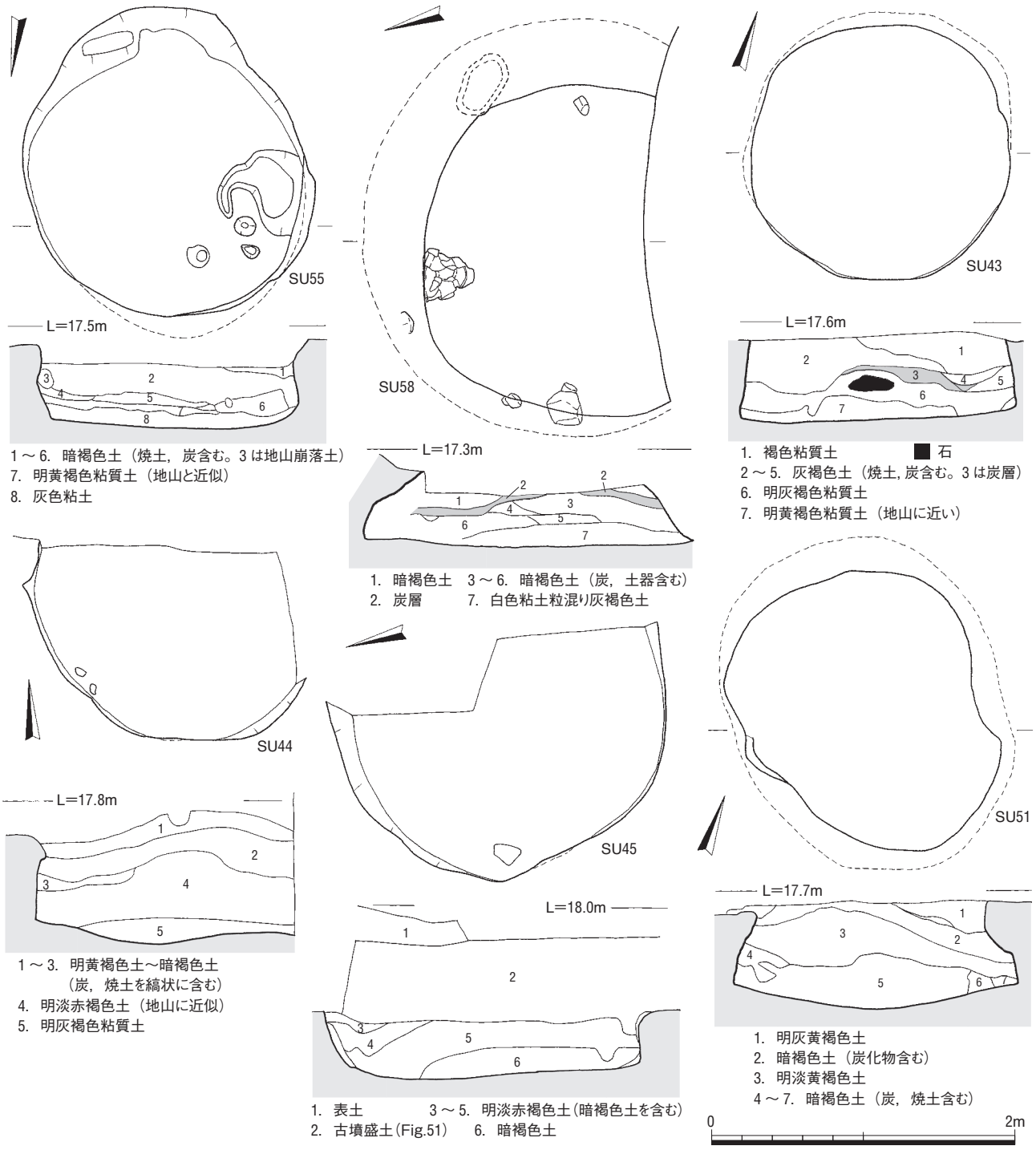


Fig. 9　貯蔵穴A-6、7群実測図（1/40）

いることによる。また、尾根線際となる西端のSU99付近では疎らとなっている。

C群はA群同様にほぼコンターに沿って配列されているがFig.3の地形図から読み取れる調査区東側の南西方向に派生する尾根中心線に近付くにつれてA群と接近している。反対方向の西側では尾根線際の急斜面となっていき、A群同様に疎らとなる。

さらに下底レベル、形状、分布状況などからA群は7、B群は3、C群は4類に細分したが、明確には分かれない。特に、A-6群は細分が難しいが、総数48基の各グループの基数を示すと以下のように（　）内の基数に分かれ、概ね3、4基程度が近接している傾向はうかがえる。

なお、A群は細分したA-1～4群13基、A-5～6群15基、およびA-7群2基の配置が比較的明瞭に分かれることからa、b、cの小分類をいれる。

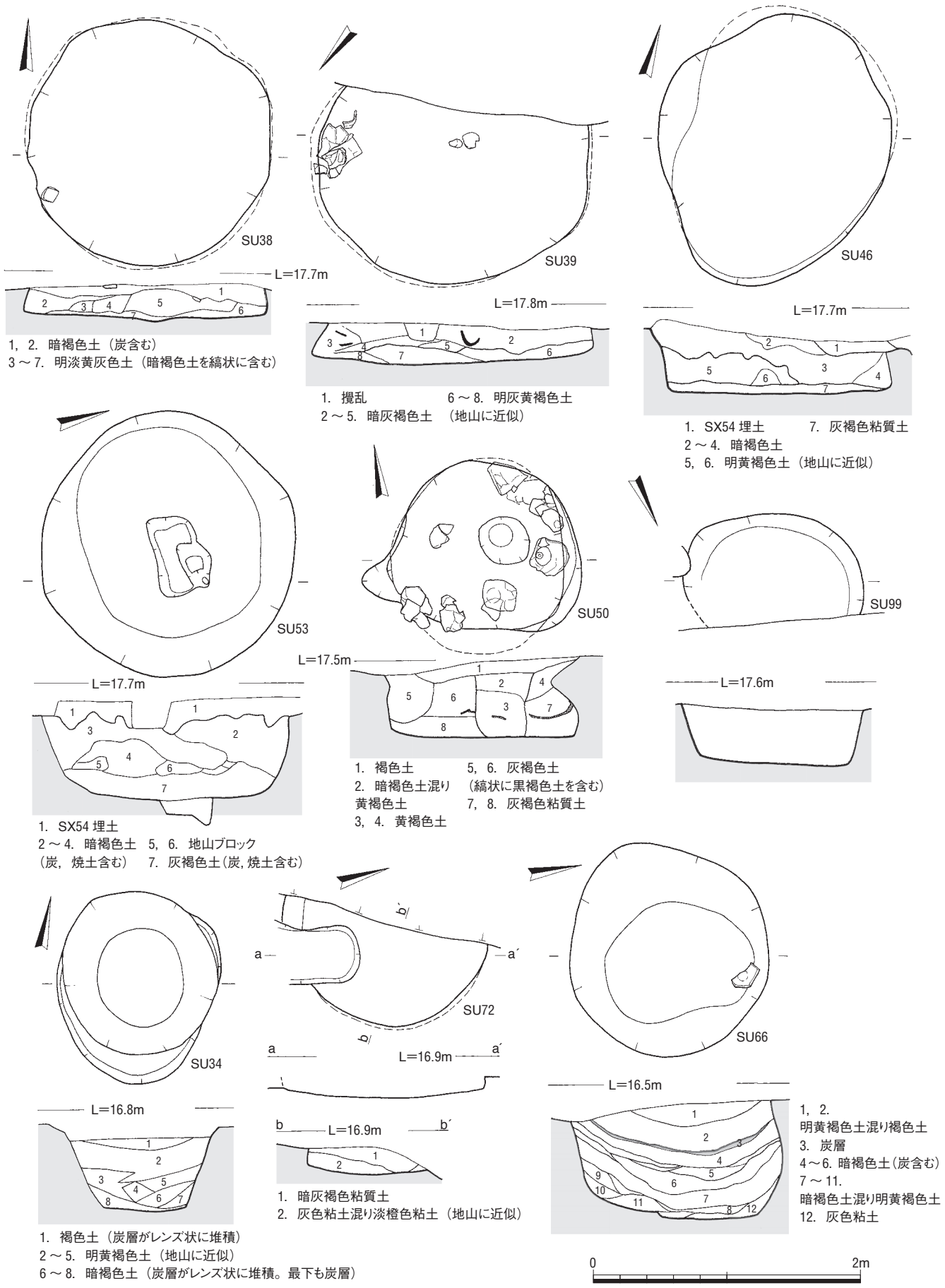
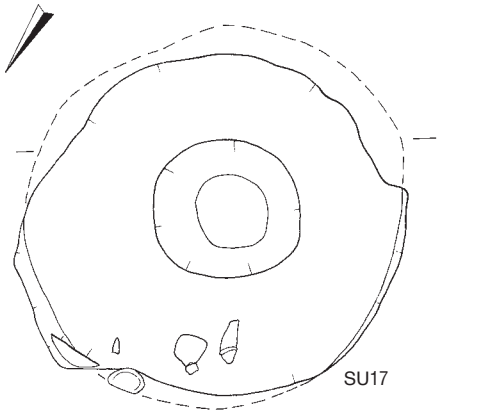
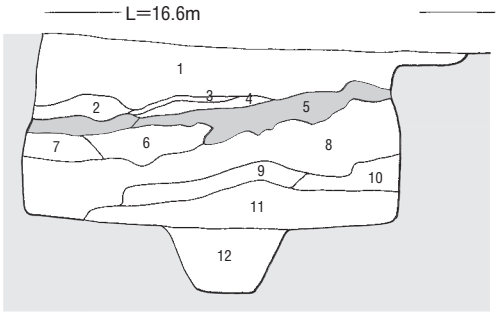
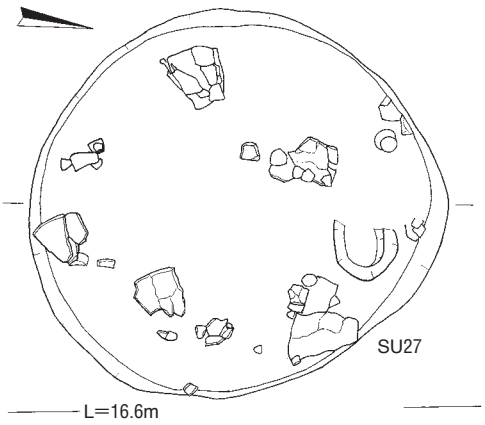


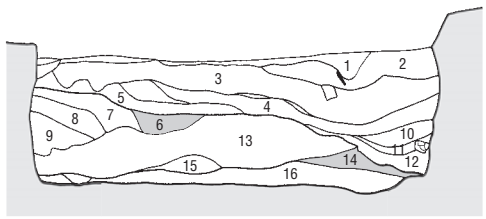
Fig. 10　貯蔵穴A-8、9、B-1 ～ 3群実測図（1/40）



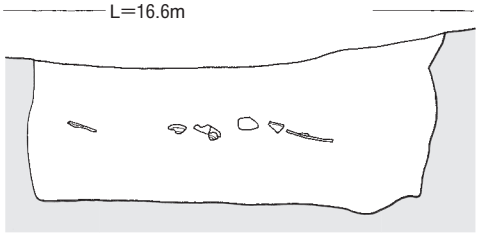


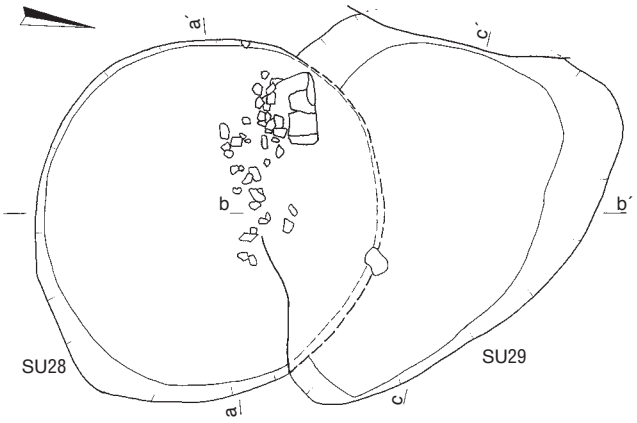
1 ～ 4. 暗褐色土を縞状に含む明黄褐色土
5. 炭，焼土層
6 ～ 10. 暗褐色土を縞状に含む明黄褐色土（炭粒を多く含む）
11，12. 褐色粘質土

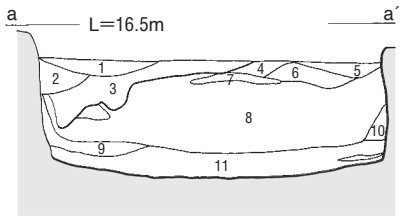




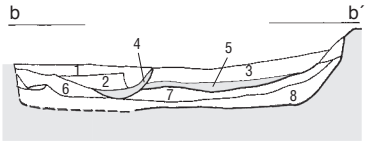
1 ～ 14. 暗褐色土（炭，焼土多く含む。
炭層がうねった縞状に堆積。地山ブロック含む）
15，16. 灰褐色粘質土



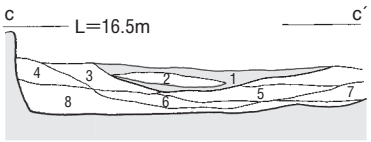




SU28 a—a´
1 ～ 7. 灰黄褐色土
8. 灰褐色土混り明黄赤褐色土（炭含む）
9 ～ 11. 白色粘土粒混り赤褐色土（地山に近似）

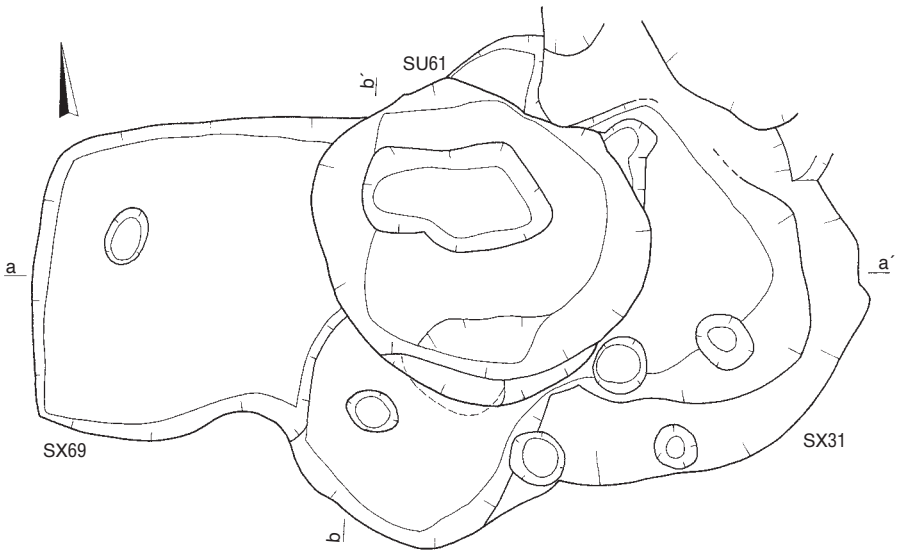


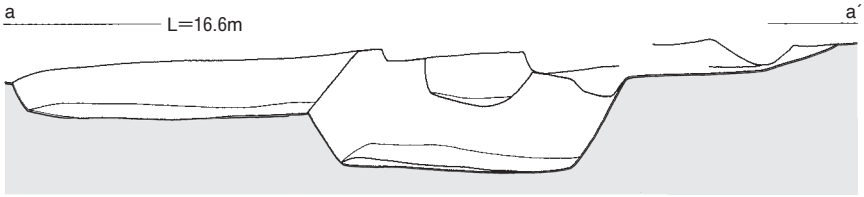
SU29 b—b´
1 ～ 3. 炭混り灰黄～赤褐色土
4，5. 縞状の炭層（小礫，土器出土）
6，7. 炭化物混り灰褐色粘質土
8. 白色粘土粒混り赤褐色土（地山に近似）

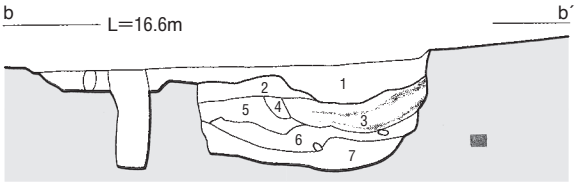


c—c´
1. 縞状の炭層～灰黄褐色土
2 ～ 7. 明灰黄褐色
8. 白色粘土粒混り赤褐色土（地山に近似）

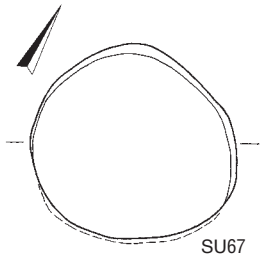
Fig. 11　貯蔵穴C-1群実測図（1/40）

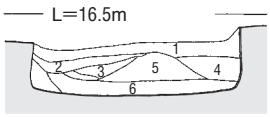




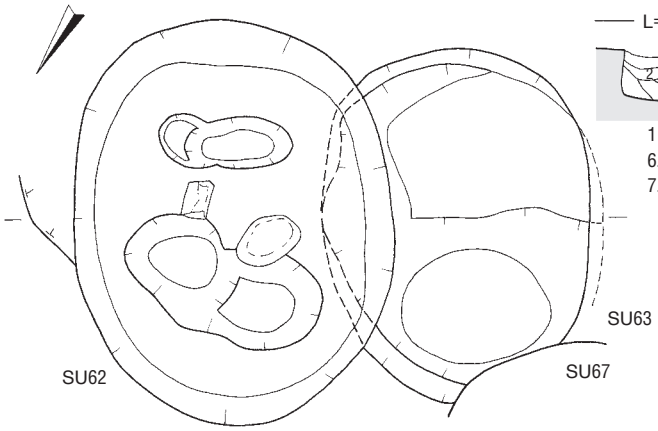


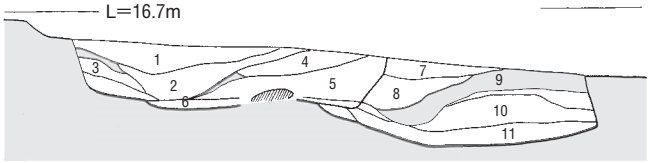
1，2．灰白色，黄褐色粘土混り暗褐色土（SX69 埋土）
3 ～ 5．縞状の炭層混り暗褐色土
6．褐色粘質土
7．明灰白色粘土混り灰黄～赤褐色土（地山に近似）





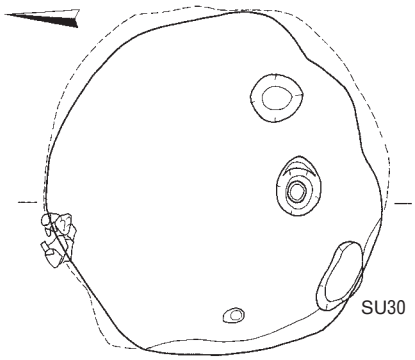
1 ～ 5．明灰黄褐色土
6．灰色粘質土
7．灰褐色土

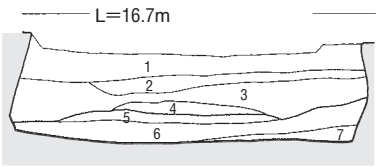




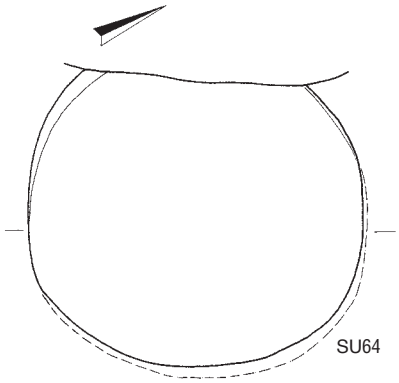
SU62
1 ～ 4．明灰黄褐色～灰褐色
5．灰褐色粘質土
6．青灰褐色粘質土

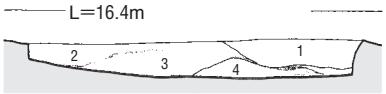
SU63
7，8．明黄灰色土
9．褐色土（焼土，炭を含む）
10．明灰黄色粘質土
11．青灰色粘土



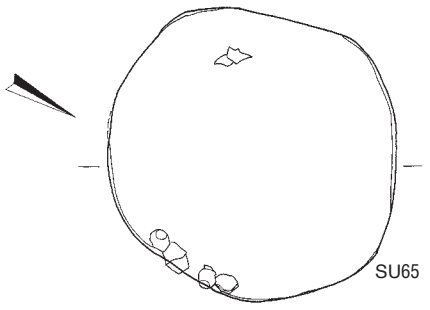


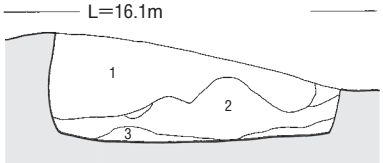
1 ～ 3．黄褐色土（炭化物含む）
4 ～ 6．灰白色粘土混り黄褐色，橙色粘質土（地山に近似）
7．灰色粘土





1，2．灰白色粘土混り橙色粘土（地山が崩れた土）
3．炭層（山形の帯状に堆積）
4．明黄色粘土





1．橙色粘土混り暗褐色土（炭含む）
2．橙色粘質土（地山に近似）
3．明橙粘質土

Fig. 12　貯蔵穴C-2、3群実測図（1/40）

（各グループの基数）

A-a-1群（3＋1？）、A-a-2群（3）、A-a-3群（3）、A-a-4群（4）、A-b-5群（4）、A-b-6群（11）、A-c-7群（2）、B-1群（1）、B-2群（1）、B-3群（1）、C-1群（4）、C-2群（4）、C-3群（3）、C-4群（2）

（形状）

小型のA-7群のSU99、B-1群のSU34、C-3群のSU67を除けば検出された貯蔵穴は上端径123～243cm、下端径110～225cmの円形プランを呈し、大半の壁がオーバーハングしたフラスコ状の形状である。深さは14cm（SU15）～116cm（SU102）を測り、A-a-1群付近は下底レベルが他の貯蔵穴より高い標高17m以上を測り、上端からの深さが極端に浅いことから高所の地形が深く削平されたと

遺構名	グループ名	上端短径	上端長径	下底短径	下底長径	深さ(cm)	下底レベル	概　要	時期	Fig.
SU02	A-a-1	205	215	170	183	40	17.05	最下に地山の明黄褐色粘質土と近似した土層堆積。その上部に焼土，炭層堆積。一部炭化物が集中した部分あり。		7
SU14	A-a-1	168	180	137	150	23	17.12	削平された斜面上で台形。焼土少量含む。		7
SU15	A-a-1	142	145	126	143	14	17.3	正円形に近い。焼土，炭なし。SU01を切る。		7
SU48	A-a-2	133	173	137	185	85	16.63	隅丸方形プラン。SU41と切り合う。	IIc	7
SU102	A-a-2	160	166？	166	170	116	16.25	拡張部で検出。		7
SU41	A-a-2	125	175	110	172	79	16.56	上部を周溝で切られている。	IIb	7
SU22	A-a-3	169	173	154	173	55	16.29	ST20，21に切られる。焼土を多く含む。	IIc	7
SU96	A-a-3	177	227？	178		66	16.5	周溝に切られる。	須玖I	7
SU101	A-a-3							周溝下底で検出。形状不明。		8
SU18	A-a-4		240		215	24	16.41	ST19に切られる。大半が調査区外。下層に炭化物を粒状に多く含む。	IIc？	8
SU23	A-a-4	212	215	209	216	43	16.46	ST19に切られる。焼土，炭を多く含む。下底から浮いて土器多数出土	IIb	8
SU26	A-a-4	140	200	140	197	30	16.54	最下に地山に近似した土層が堆積。その上部層界に炭層。	IIb	8
SU100	A-a-4	142	178	155	172	73	16.05	下底から20～30cm上から土器が多量に出土。	IIb	8
SU06	A-b-5	174	203	168	192	36	16.39	最下に地山と近似した炭化物を含む層が堆積。その上層から土器出土。	城ノ越	8
SU07	A-b-5	228	243	168	170	40	16.01	中央部に炭層が堆積。下底中央が盛り上がる堆積。周囲から土器出土。	IIc	8
SU08	A-b-5	176	222	186	210	72	16.08	焼土，炭は少ない。下底に溝あり。　上面から土器	IIb	8
SU09	A-b-5	145	187	182	196	68	15.7	下底から40cm上で小礫出土。2層は炭を含み土器が出土。	IIc	8
SU38	A-b-6	182	184	186	187	25	17.34	最下に地山に近似した土層が山形に堆積。		10
SU39	A-b-6	202	205	212		26	17.38	SX54に切られる。最下に地山に近似した土層。	IIc	10
SU43	A-b-6	166	170	176	177	56	16.97	最下底に地山に近似した土層が堆積。その上部レベルで円形平石出土。		9
SU44	A-b-6	198？		198？		84	16.89	最下に地山に近似した土層が厚く堆積。その上層に焼土，炭層が堆積。		9
SU45	A-b-6	223		202		38	16.97	上部に古墳盛土堆積。下層40cm地山に近似した土層。		9
SU46	A-b-6	175	207	149	205	51	16.85	SX54に切られる。最下にグライ化した灰色粘土。その上層に地山に近似した土層堆積。	IIc	10
SU51	A-b-6	151	193	180	225	70	16.93	山形の堆積。最下に炭，焼土を含む暗褐色土。		9
SU53	A-b-6	185	196	123	155	55	16.87	SX54に切られる。焼土，炭を含む暗褐色土が堆積。最下はグライ化。		10
SU55	A-b-6	192	204	183	190	47	16.84	最下に灰色粘土堆積。		9
SU58	A-b-6	217		273		56	16.64	台形状に堆積。最下に明色の灰褐色土が堆積し，上部層界に炭層が堆積。	IIc	9
SU86	A-b-6							周溝で切られ，形状不明		
SU50	A-c-7	125	141	139	146	59	16.94	最下に地山と近似した明黄褐色土，灰褐色土が堆積。その上層から土器多数出土。	IIb	10
SU99	A-c-7		135		112	42		半分は調査区外。		10
SU34	B-1	123	143	65	74	60	16.03	レンズ状堆積。最下炭層		10
SU66	B-3	150	165	85	112	86	15.5	暗褐色土がレンズ状に堆積。最下は灰色粘土。	IIb	10
SU72	B-2	155		140		15	16.6	攪乱に切られ半分消滅。		10
SU17	C-1	180	243	194	207	97	15.81	下底中央にピット。炭層が細かく縞状に堆積。	城ノ越	11
SU27	C-1	190	215	165	204	76	15.58	下底近くまで焼土，炭多量に含む暗褐色土が堆積。土器多数出土。	IIc	11
SU28	C-1	184	187	175	178	76	15.69	SU29を切る。上層から甕1個体と小礫出土。		11
SU29	C-1	177	220	125	190	42	16.05	SU28に切られる。		11
SU30	C-2	176	183	191	193	56	16.01	最下に地山に近似した土層堆積。		11
SU31	C-2	200		130		17	16.33	円形プラン。		
SU61	C-2	155	182	120	137	52	15.8	最下に地山に近似した土層堆積。中間層に縞状の炭層堆積。		12
SU69	C-2	168		150		30	16.11	方形に近いプラン。SU61と切り合う。		12
SU62	C-3	170	212	142	175	33	16.23	SU63を切る。下底に平石設置。レンズ状の堆積.		12
SU63	C-3	140	187	143	167	44	15.95	SU62に切られる。最下に青灰色粘土堆積。	IIb	12
SU67	C-3	102	108	100	101	32	16.08	灰黄褐色土の水平に近い堆積。		12
SU64	C-4	175	184	173	181	20	16.05	最下に地山に近似した土層堆積。その上層に炭層が山形に堆積。		12
SU65	C-4	149	160	147	160	55	15.8	中央部に厚く地山に近似した土層堆積。	IIb	12

Tab. 1　貯蔵穴一覧表

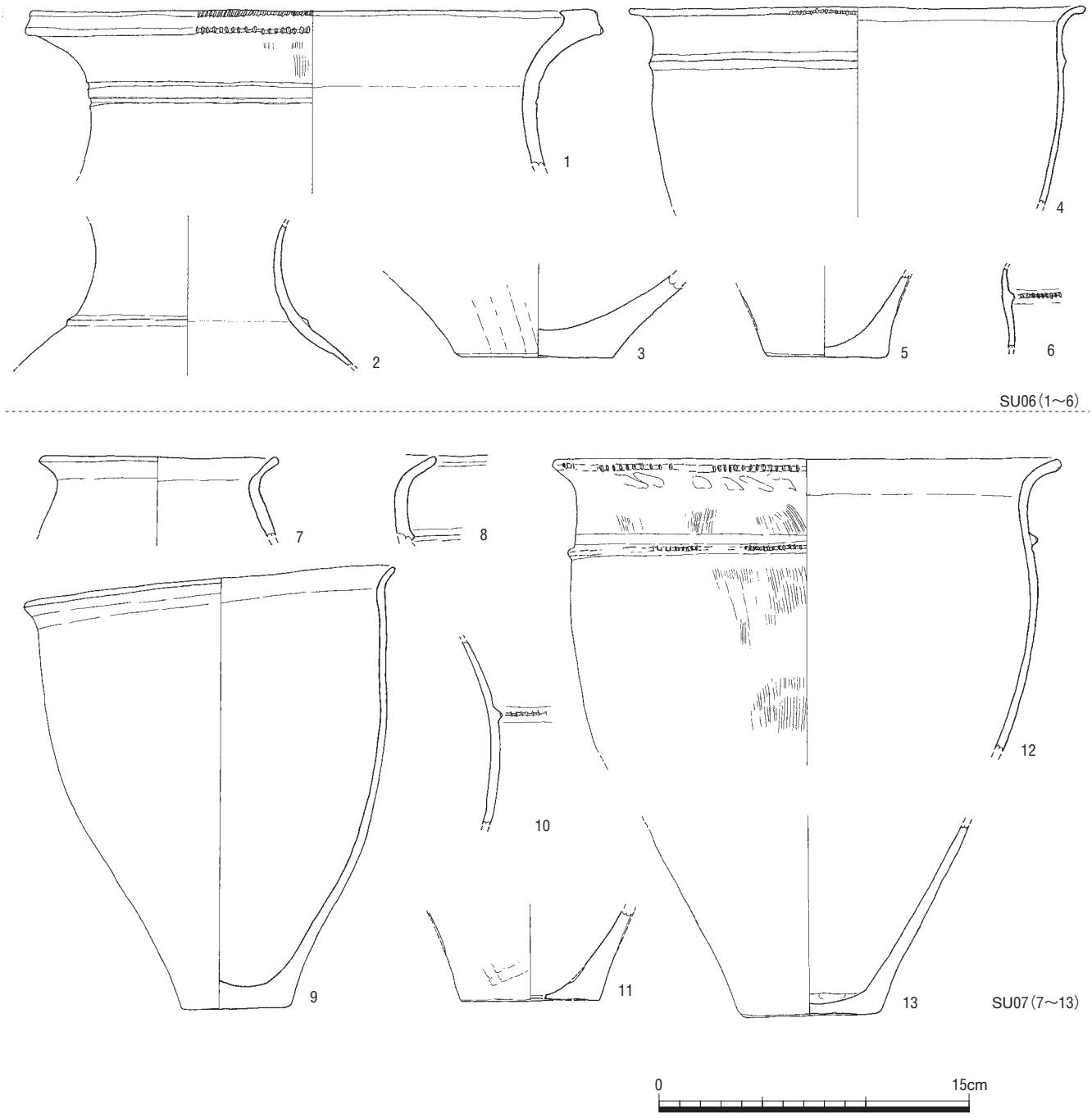


Fig. 13　SU06、07出土遺物実測図(1/3)

みられる。

B-1群のSU34は形状、規模から貯蔵穴とは異なる可能性がある。C-1、C-2、C-3群は同様に3基が切り合った形状を呈しグループ単位で改築が行われた可能性を示す。

(土層堆積と遺物出土状況)

SU34、62、66の堆積でレンズ状の堆積が認められた他は水平に近い堆積で、壁の崩落や短期に埋まったことを示す。多く見られる土層は最下に薄く灰色のグライ化した粘土が堆積する。その上の下底中央部に地山に近似した明黄褐色土が堆積する。この層は地山のブロックではなく、砕けた土である。遺物はほとんど含まない。防湿効果を意図した人為的な成因も考えられるが確かではない。さらにこ

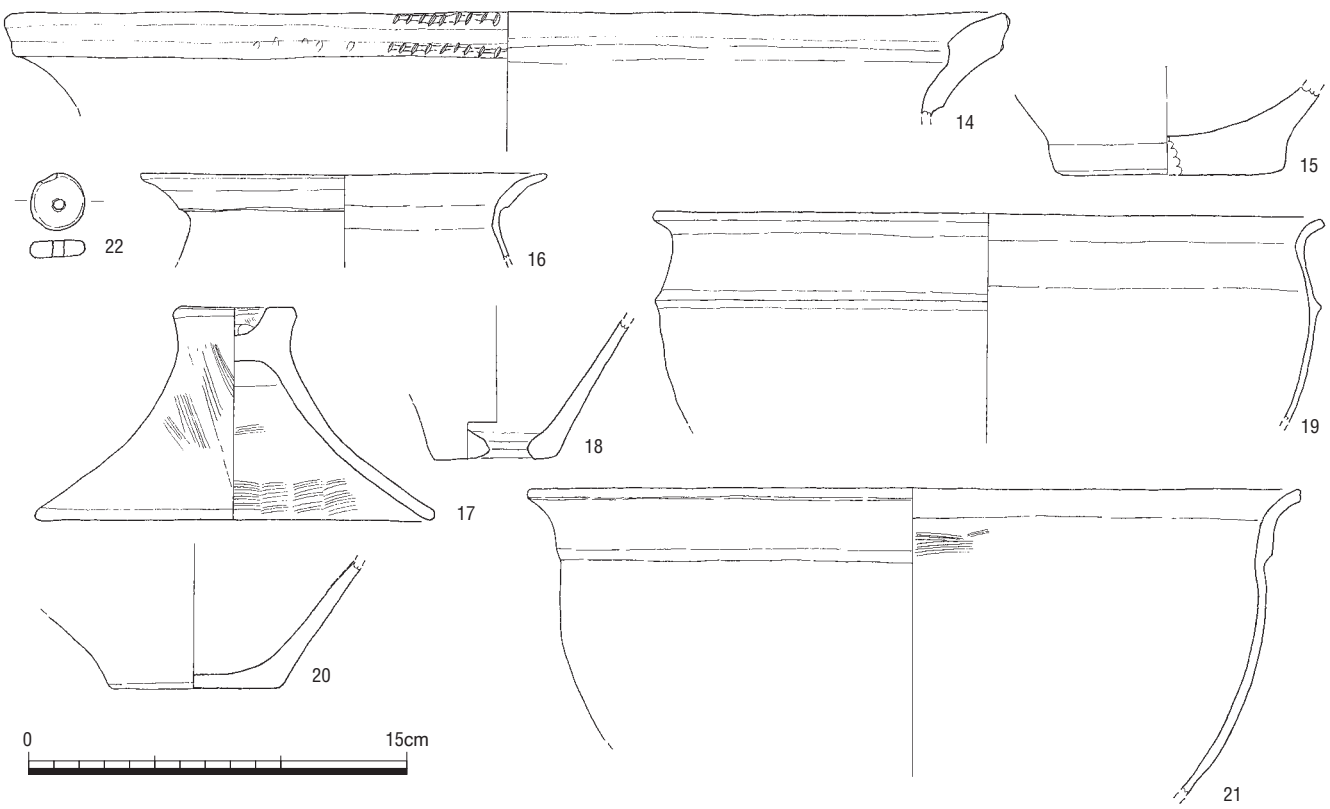


Fig. 14　SU08出土土器実測図(1/3)

の上層に炭化物層の黒色土が帯状、互層となって堆積する。その形状は下層との層界に沿って中央部が高く周囲に低い山形状となる。この層には焼土、炭が多く含まれ遺物が多く出土する。従って遺物は下底から浮いた状態で出土する。SU02、26、09、38、43、44、45、51、58ではこのような状況が認められる。

埋土に焼土を含む貯蔵穴はA-1～6群とC-1群にかけて集中的に検出された。特にA-4、5群、C-1群では焼土や炭に混じって完形に近い土器が多く出土した。上屋構造が火災した可能性も考えられる。壁が焼けた痕跡は認められなかった。

SU09の下底には溝、SU53、50の下底中央部にはピットが検出された。SU43の下底中央部の明黄褐色土上に平石が置かれ、SU09、29の下底から約40cm浮いたレベルからは小礫が出土した。

(出土土器と時期)

出土土器実測図Fig.13～25は遺構番号の昇順に掲載している。以下のb.各器種分類と概要の項で用いた型式分類はｐ－66に拠るもので一部抜粋し記す。略編年図をｐ100～102に掲載した。

ａ．時期

貯蔵穴から出土した土器は3区の竪穴住居跡から出土した土器とほぼ同時期の弥生前期後半～中期初頭(板付Ⅱb～城ノ越式)を主とし、SU96出土遺物にみられる中期前半(須玖Ⅰ式期)に近い時期までが含まれる。出土遺物の大半は板付Ⅱc期までに収まり、「亀の甲式」甕はSU27出土の74にみられるくらいで少数である。これに対し、3区竪穴住居跡出土の「亀の甲式」の系譜の甕は体部が張り、刻みが施されたものを含め比較的多く出土するなど違いがある。全体的に3区竪穴住居跡出土土器が城ノ越式まで降る土器が多いのに対し、貯蔵穴出土土器のなかで城ノ越式まで降るのはSU06出土の壺1、SU28上層出土の壺83、さらに降った須玖Ⅰ式のSU96出土136～141くらいである。

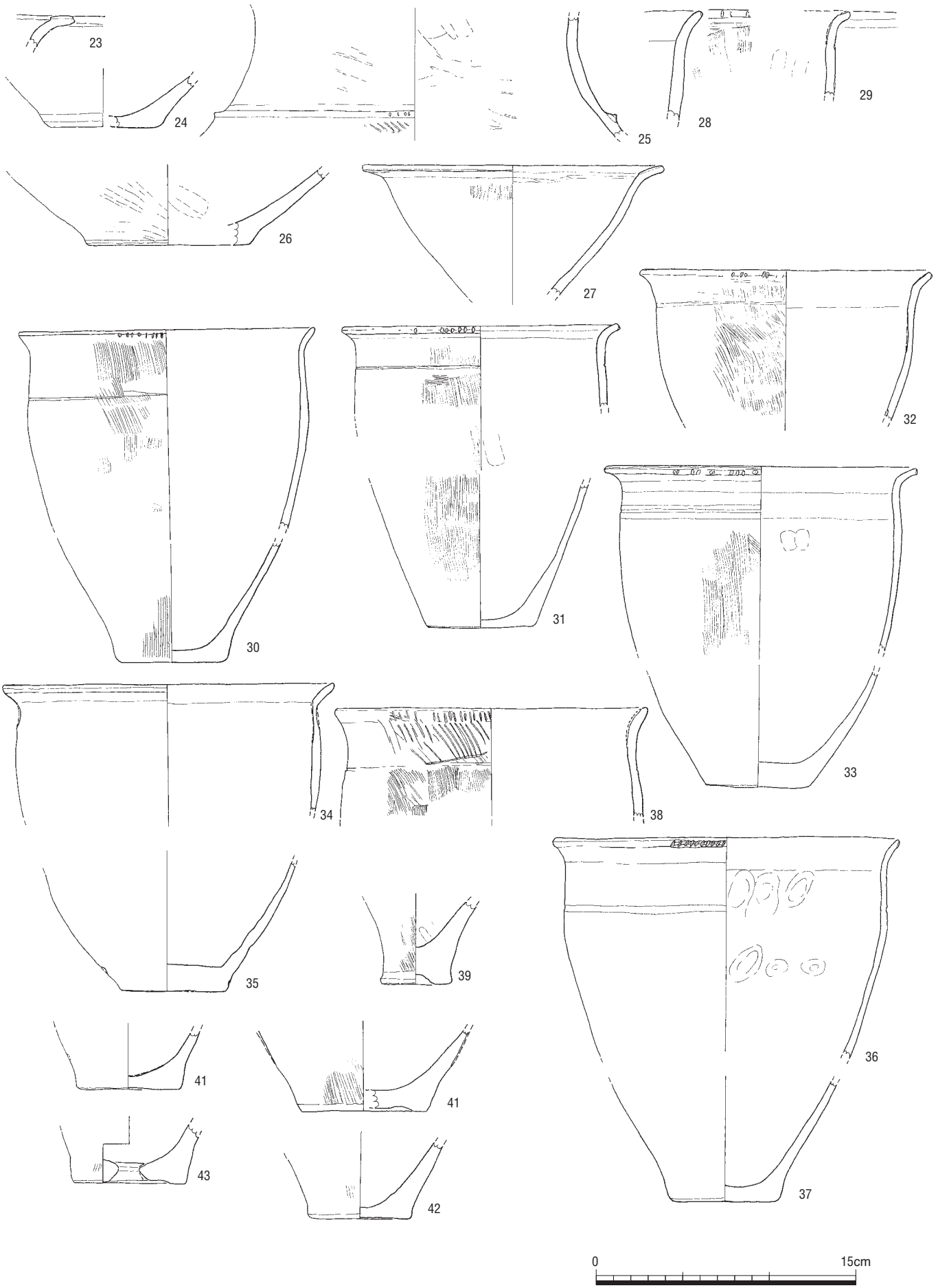


Fig. 15　SU09出土土器実測図(1/3)

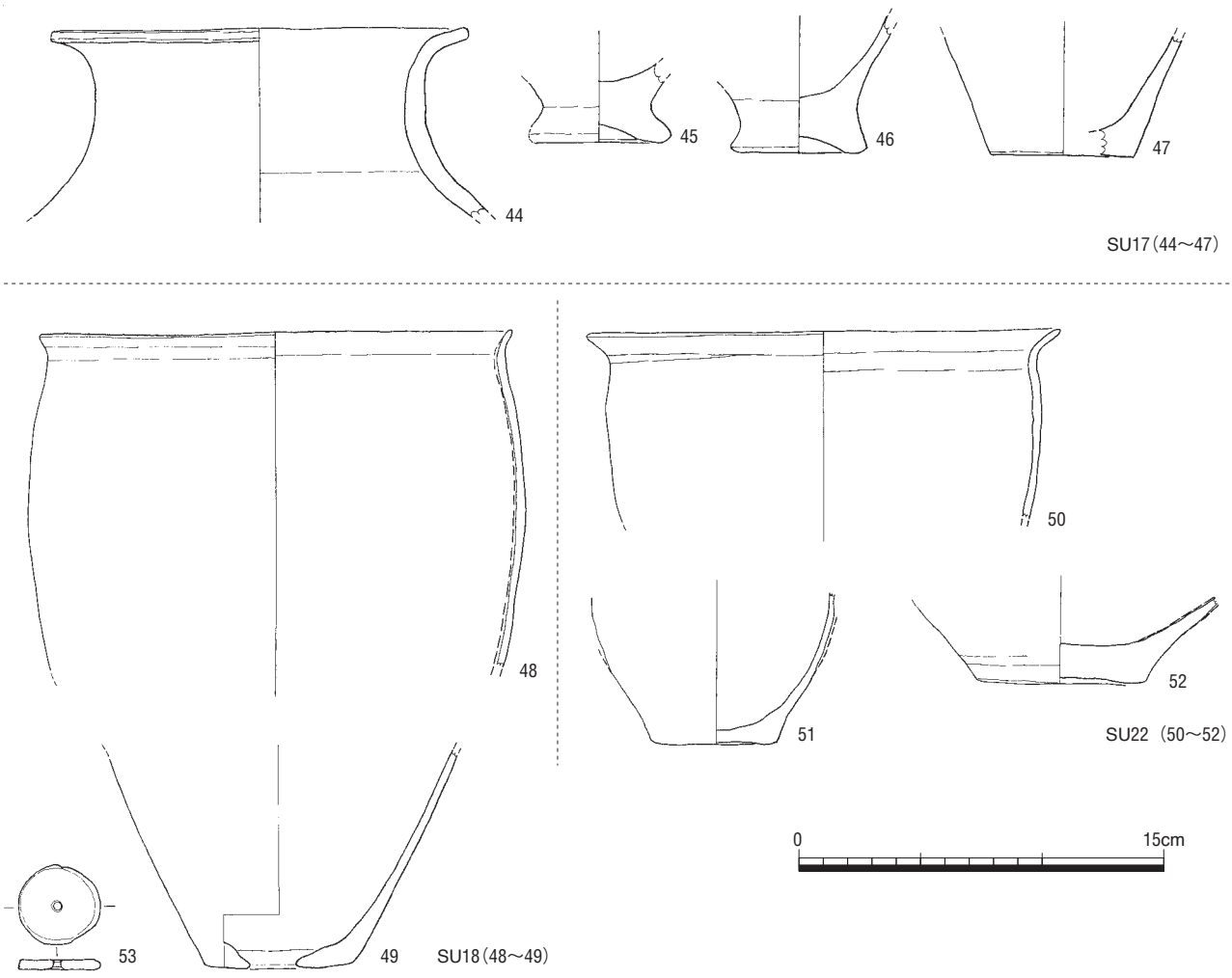


Fig. 16　SU17、18、22出土土器実測図（1/3）

b．各器種分類と概要

甕１類　口縁部が如意形に外反し、胴部の張り出しは弱く、底部へすぼまっていく。胴部が大きく傾き、器高の低い甕もしくは鉢とみられるものがある。

甕２類　口縁が外反しながら１類より長く延びる。新相になると口縁端部は面取りされ、刻みが無くなってくる。胴部は張り出しが大きくなり、最大径部の位置が下がってくる。胴部の最大径が口径より大きいものも現れるようになる。胴部に突帯を有するものを甕2a類、沈線を有するものを甕2b類とする。

甕３類　口縁部が２類と同様に長く伸長するが、外反が弱い。胴部は張り出しが小さい。甕１類、２類との区別が難しい個体もあるが、明らかに特異な形態を呈すものがあるため、分類しておく。

甕４類　口縁部が「く」の字に屈曲し短く、胴部は口縁直下から張り出し、最大径が口径より大きくなる。

古式の刻目突帯文甕や上述した「亀の甲」式系譜の新相（甕５類）は出土していない。

如意口縁の甕１類ではSU27出土76、79のように胴部が張らず、底部にかけて窄まる器形が古相であろう。他の甕１類は胴部がわずかに張り、口縁下端の刻みや沈線の有無などの形態差はあるが、他に大きな差異は見出し難い。

甕２類は胴部の張りが小さい４（SU06）から81（SU27）、12（SU07）のように胴部が球形に張り

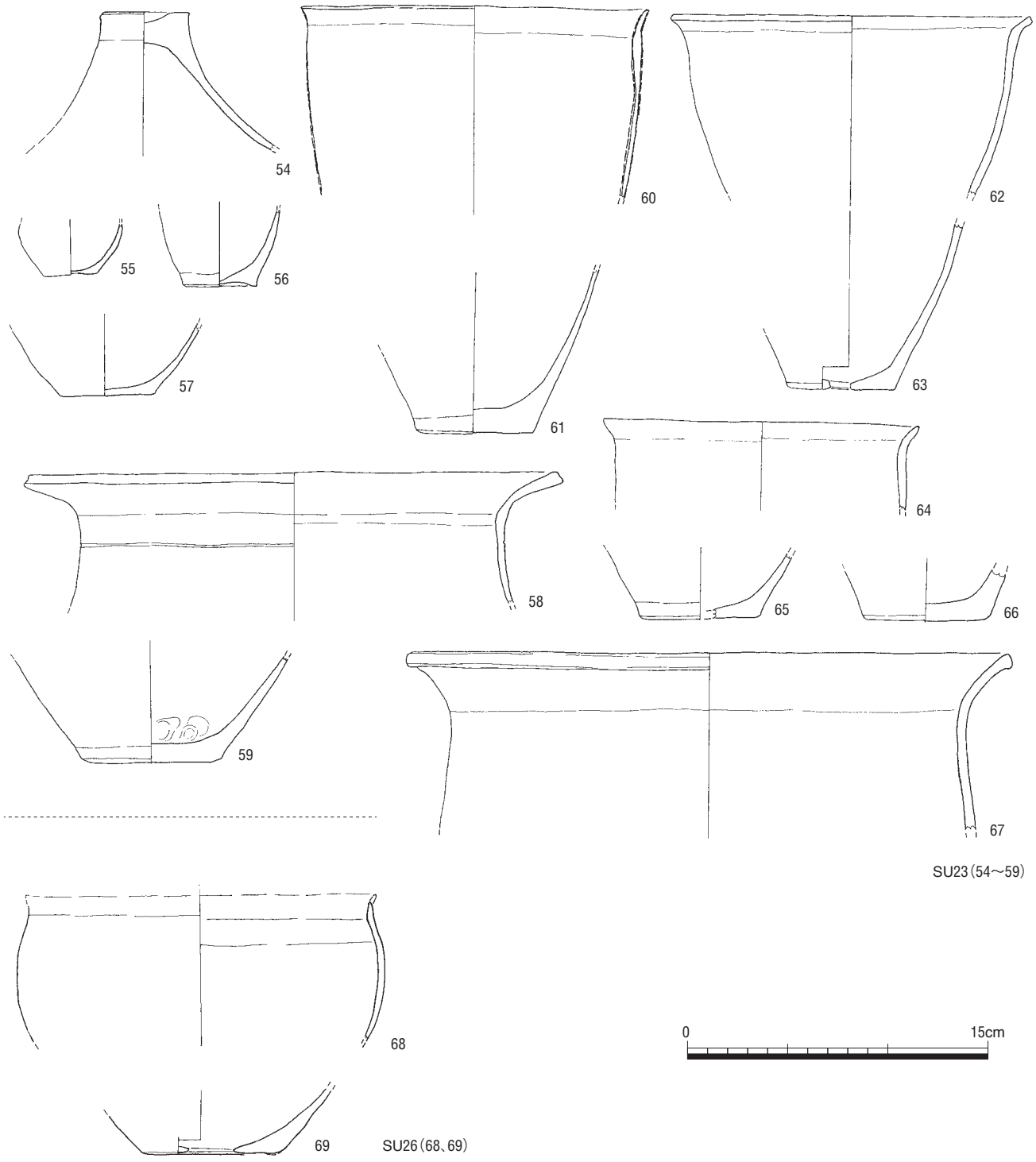


Fig. 17　SU23、26出土土器実測図（1/3）

出してくる形態が見られる。いずれも突帯を有した甕2b類が出土し、12（SU07）は口縁部と突帯に刻みを有している。

甕３類は頸部に浅い沈線を有する32（SU09）、38（SU09）、沈線が無い84（SU28）、99（SU48）、67（SU23）が含まれる。67は大型で胴部が張る壷に近い器形とみられる。

甕４類は胴部の張りが比較的小さい48（SU18）、151（SU100）張りが大きくなった87（SU39）、154（SU100）が含まれる。151には胴部に沈線が施されているが、他はいずれも沈線、突帯を有して

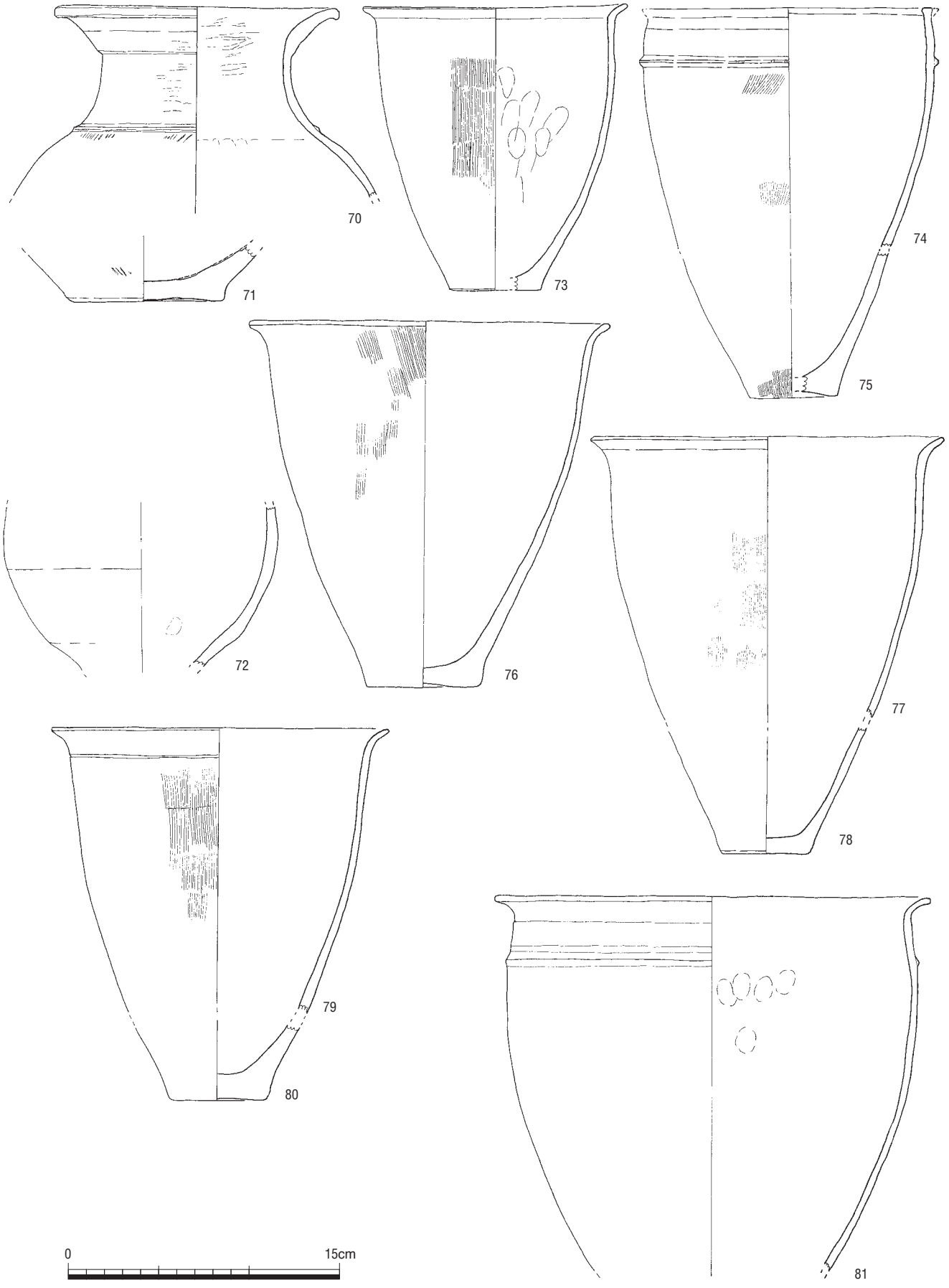


Fig. 18　SU27出土土器実測図(1/3)

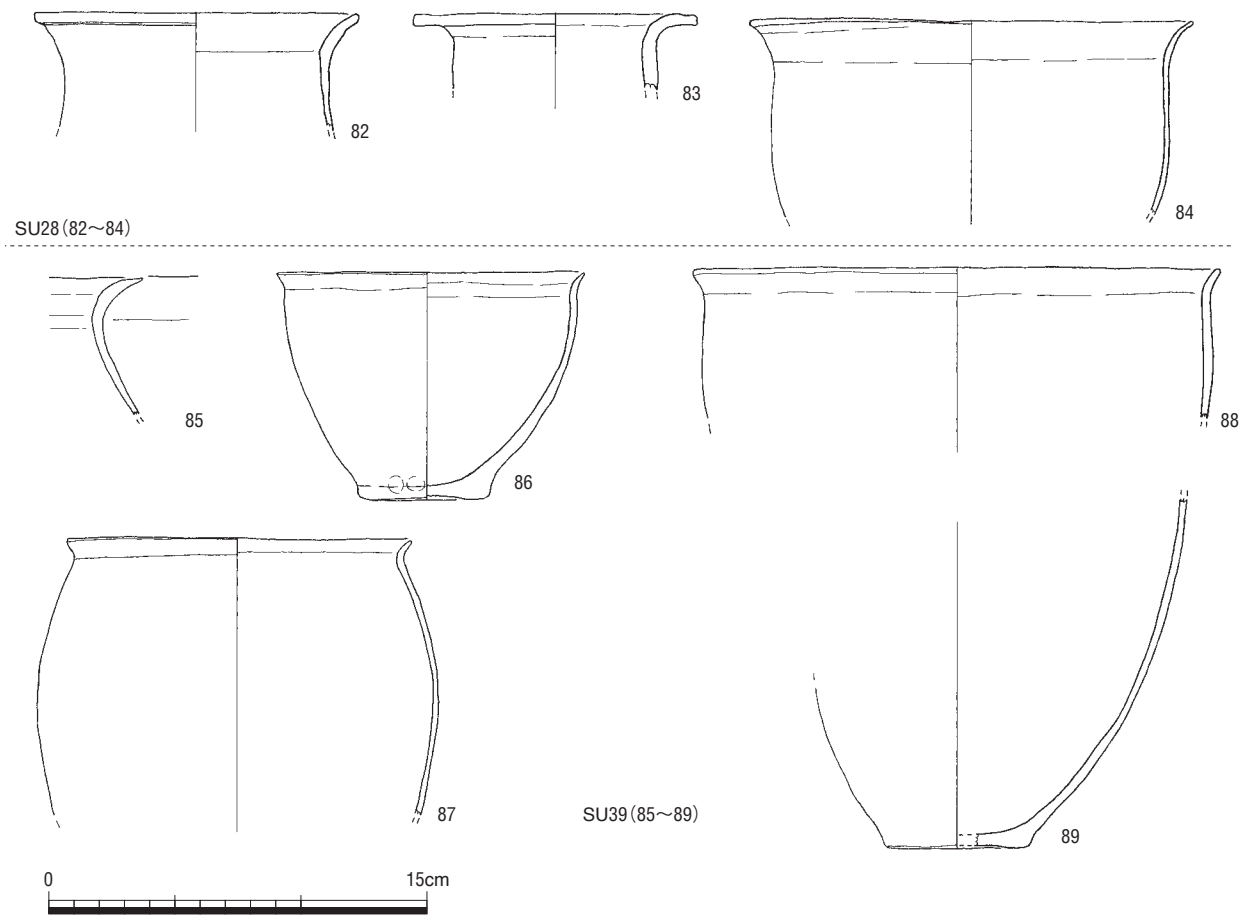


Fig. 19　SU28、39出土土器実測図（1/3）

いない。

壷１類　頸部が内傾しながら直線的に延び、口縁部が大きく外反する。口縁部外面が肥厚し、頸部との境に段を有す。

壷２類　頸部が内傾しながら直線的に延び、口縁部が大きく外反する。口縁部の肥厚はなくなり、頸部との境は浅い段（沈線状）となる。

壷３類　頸部は弯曲しているが直立に近くなる。

壷４類　頸部の弯曲がなくなり直線的に直立し、口縁部が大きく外反する。

壷５類　口縁端部の内面ないし上面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。内傾した長い頸部から短く口縁部が外反し、貼り付けた粘土上面が内側に傾斜した器形が古相を示す。頸部から口縁部が大きく弯曲して、口縁端部の上面が水平となる器形へ移行していく。さらに貼り付けた口縁端部の粘土は内側へも嘴状に張り出していく。頸部も内傾から直立に近い角度へ変化していく。

頸部が内傾しながら直線的に立ち上がり、短く外反した口縁部内面に傾斜した粘土を貼り付けたものを壷5a、頸部が直立ぎみに弯曲し、壷5a同様に傾斜した口縁部内面に粘土を貼り付けたものを壷5b類、頸部が短く弯曲し、大きく外弯した口縁部の上面に粘土を貼り付けたものを壷5c類とする。5a→5b→5c類に推移するが、壷5cは金海式甕棺に近似し甕形に変化している。

口縁部外側を肥厚させた古相の壷１類がSU08、SU40、41、SU47、SU50、SU96から出土している。いずれも肥厚した口縁部と頸部の境に段を有し、頸部は弯曲しながら内傾している。120（SU65）の

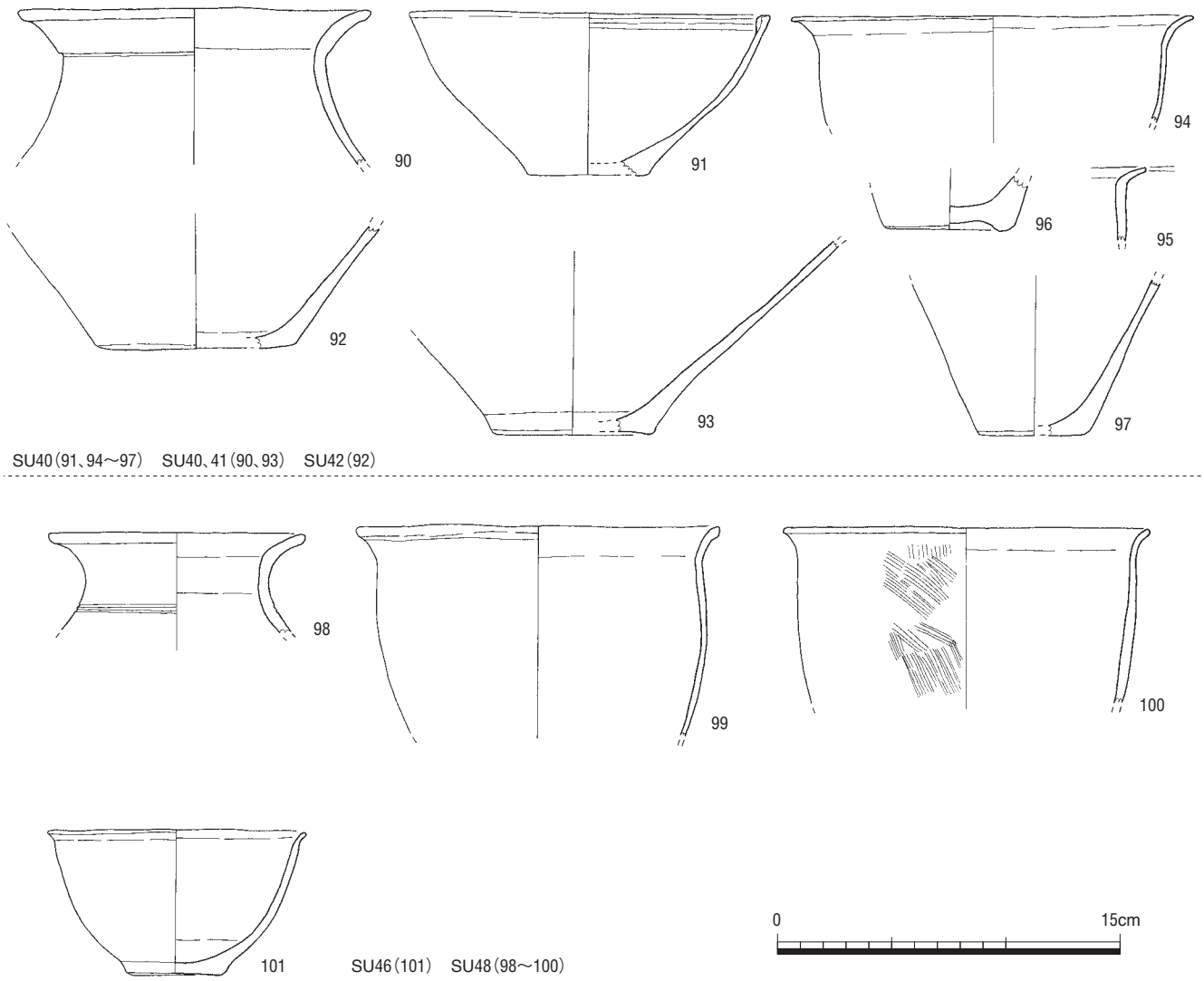


Fig. 20　SU40、41、42、46、48出土土器実測図（1/3）

口縁部の肥厚が薄く、そのため頸部との境も浅い段となっている。壷２類の143（SU100）は口縁部が長くなり、大きく外弯している。後出の壷３類は小型が98（SU48）、145（SU100）にみられる。中型の58（SU23）は内傾した頸部が直線的である。98は頸部の変換点近くに２条の沈線、58も１条の沈線が施されている。頸部の弯曲が小さくなった後出的なものに44（SU17）、82（SU28）、135（SU96）が挙げられる。壷４類は83（SU28上層）のみである。壷５類は壷5a類が128（SU66）、壷5b類が14（SU08）、壷5c類が１（SU06）にみられる。いずれの口縁端部にも刻みが上下２条施されている。１のように口縁端部が水平となり、内側へ嘴状に張り出した形態は中期初頭まで降る可能性がある。

鉢１類　体部が直線的に延び、口縁部は短く外反する深鉢形である。３区のSC502から出土した小型の深鉢392が含まれる。貯蔵穴からは出土していない。

鉢２類　口縁が如意状に外反し、胴部が膨らまず、その最大径部が口縁部との境（頸部）にある。体部の傾斜が立ち上がって深くなり、口縁部が短く外反した2a類の101（SU46）、86（SU39）、体部の傾斜が大きく、口縁部が長く外反した2b類の27（SU09）、103（SU50）が含まれる。

鉢３類　外側に断面三角形の突帯を貼り付けた口縁部。この類は貯蔵穴からは出土していない。

鉢４類　胴部の形態は鉢２類と同じく、直口の口縁端部の内側に粘土を貼り付けた91（SU40・41）

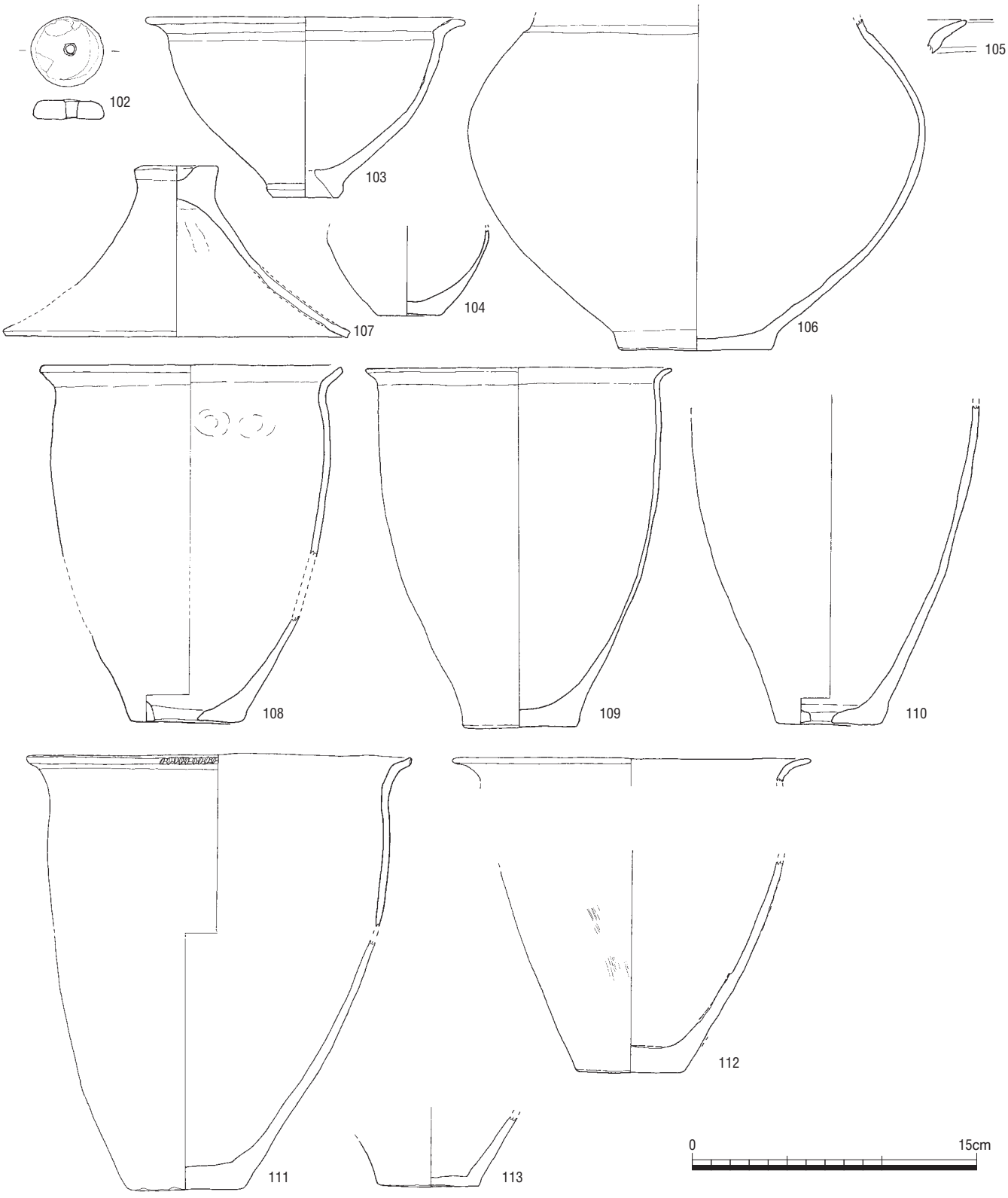


Fig. 21　SU50出土土器実測図（1/3）

が含まれる。

鉢５類　21（SU08）は壷２類と同様に口縁部外側に粘土を貼り付けて段を有して肥厚させている。胴部は口縁部以下、緩やかに膨らむ。口径41cmの中型である。

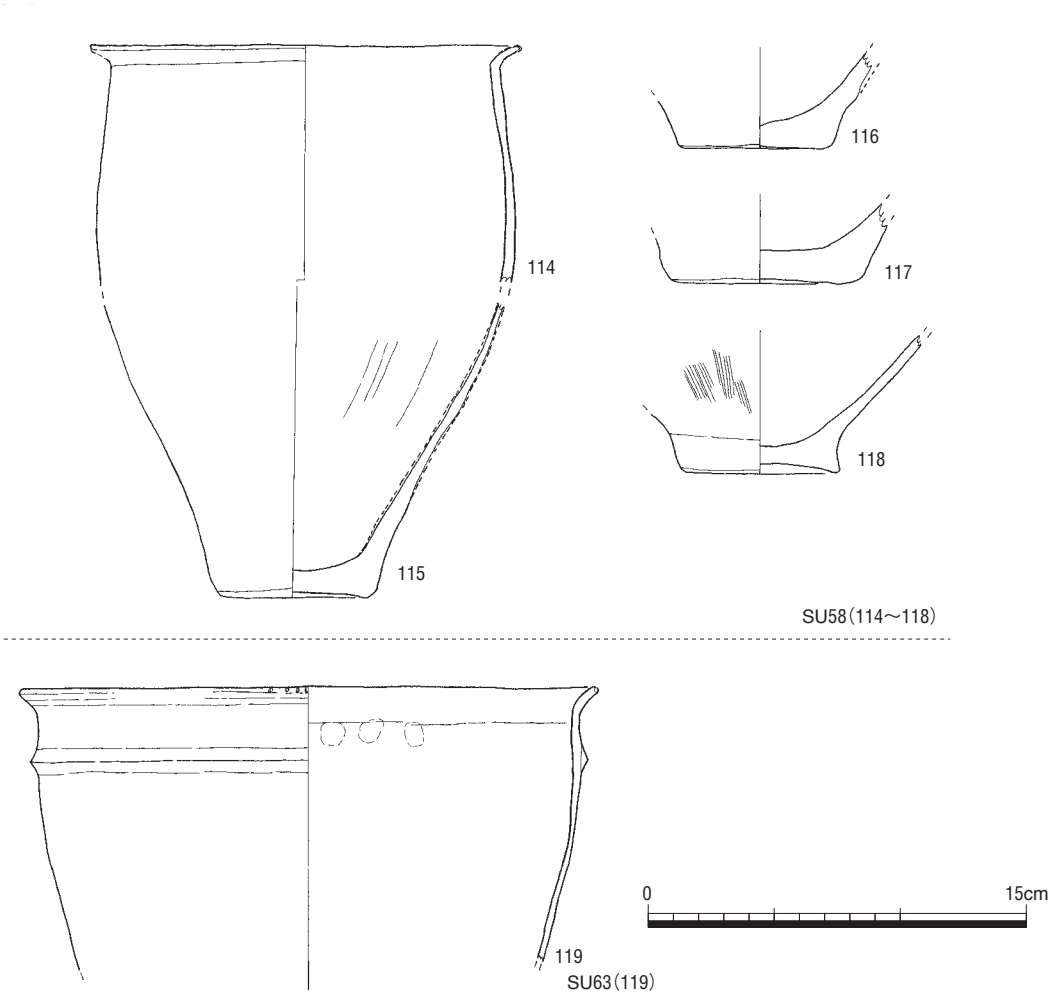


Fig. 22　SU58、63出土土器実測図(1/3)

鉢６類　胴部が球形に張り出し、口縁部が緩やかに弯曲しながら外反する。19（SU08）の口縁部の弯曲は大きく、体部に突帯が巡る。口縁部の弯曲が小さい68（SU26）も含む。

鉢７類　口縁部の上面に粘土を貼り付けて肥厚させ、端部に上下２列の刻みを施す。貯蔵穴からは出土していない。

（石器）

１は粘板岩製の石包丁である。２は黄灰色を呈し、目が細かい軟質の砂岩製の砥石である。１面がU字状に研ぎこまれている。３は板状を呈した砂岩製の砥石である。火熱を強く受け、赤黒い。４は灰色を呈し、層理がみられる硬質の堆積岩製石斧である。刃部は丸く、中央付近で折れ欠損している。側面に敲打痕が残る。５は明黄灰色を呈した硬質砂岩製の磨石である。全面滑らかで、１面に敲打痕が残る。６は磨石である。６はすりこぎ棒の形状を呈した磨石である。全面滑らかで、擦痕や敲打痕は少ない。７は玄武岩製の太形石斧に近い石斧未成品である。刃部や基部に剥離面がみられる。８は白色にわずかに淡緑色が混じる翡翠製の獣形勾玉である。片面の２箇所に筋状の線刻がみられ、対面には孔を通る縦方向に断面U字状の凹線が入る。９は硬質な粘板岩製の磨製尖頭器の未成品である。全長11.1cmを測る。10は黒灰色を呈した頁岩製と思われる磨製尖頭器の欠損品とみられる。擦痕がみられる。11は磨製石鏃の尖頭部である。12は滑石製の円盤状石器である。平坦面と凸面からなる。周縁を打ち欠いている。13は薄い層状の剥離面がみられる硬質粘板岩製の紡錘車である。

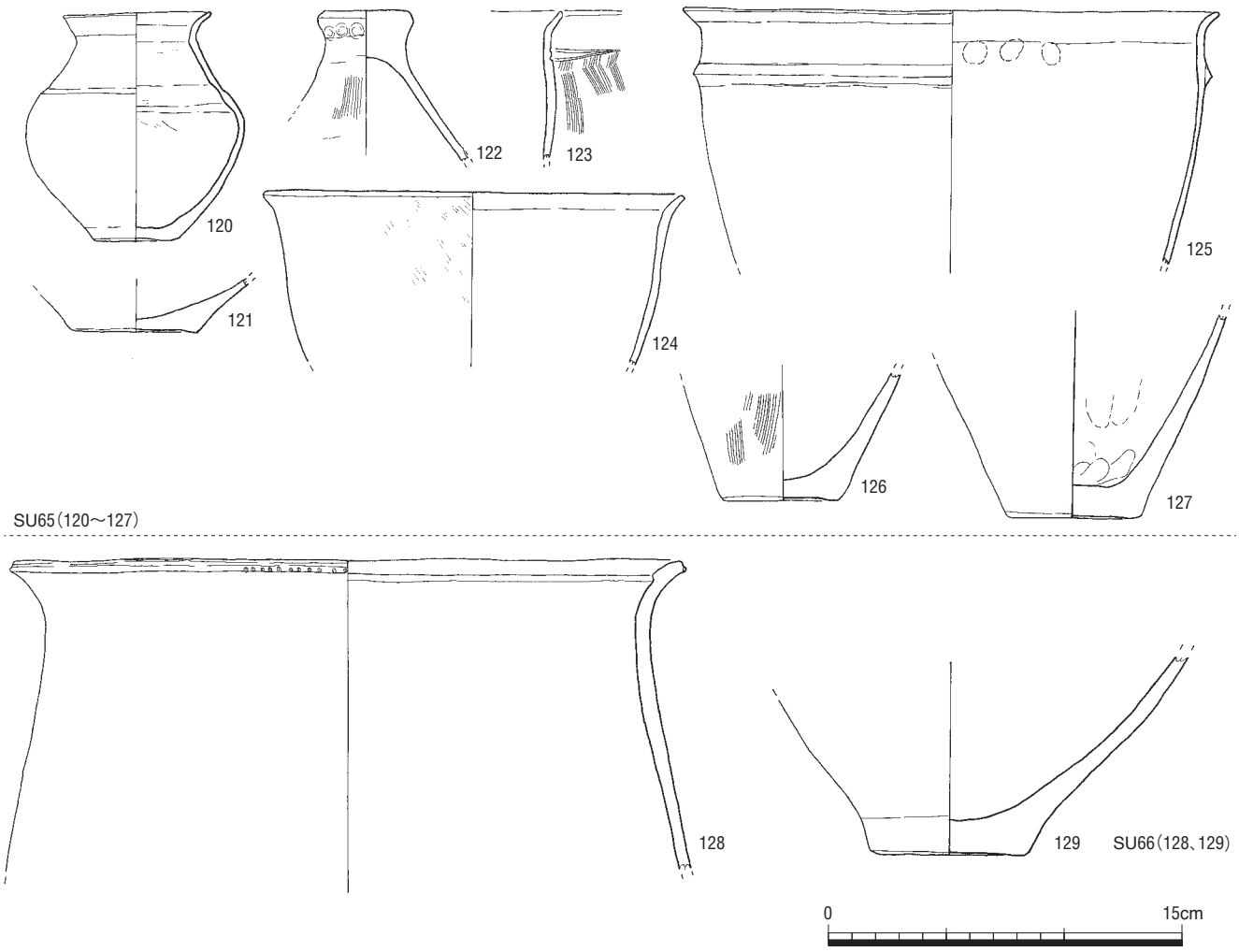


Fig. 23　SU65、66出土土器実測図(1/3)

b．焼土坑、土坑

SX01

Ⅰ区の北東部に位置する。貯蔵穴群のA-a-1群内に位置し、貯蔵穴同様に焼土、炭が分布していたことから貯蔵穴下底部の可能性がある。上面の検出では不整形に炭、焼土が分布する中央部に長軸長125cm、短軸長77cmの略楕円形部が特に厚く焼土、炭層が堆積していた。埋土はレンズ状に堆積し、中央の略楕円形部の下層は地山に近似した明黄白色粘質土に炭層が薄く帯状に堆積していた。

SX13

貯蔵穴群A-a-1群の西側に位置する。攪乱で形状が不明瞭となっているが、径150cm程度の貯蔵穴下底部と土坑が切り合っている可能性がある。最深部は上面から15cmを測り、焼土が部分的に検出された。

SK70

Ⅰ区西際で検出された。長軸長247cm、短軸長106cmの隅丸長方形プランを呈す。中央付近から南側にかけて深くなり、遺構が切り合っている可能性がある。西側に偏って上部から土器や石器片が集中して出土した。130～133の出土土器の時期は貯蔵穴群と同じく板付Ⅱc期におさまるであろう。

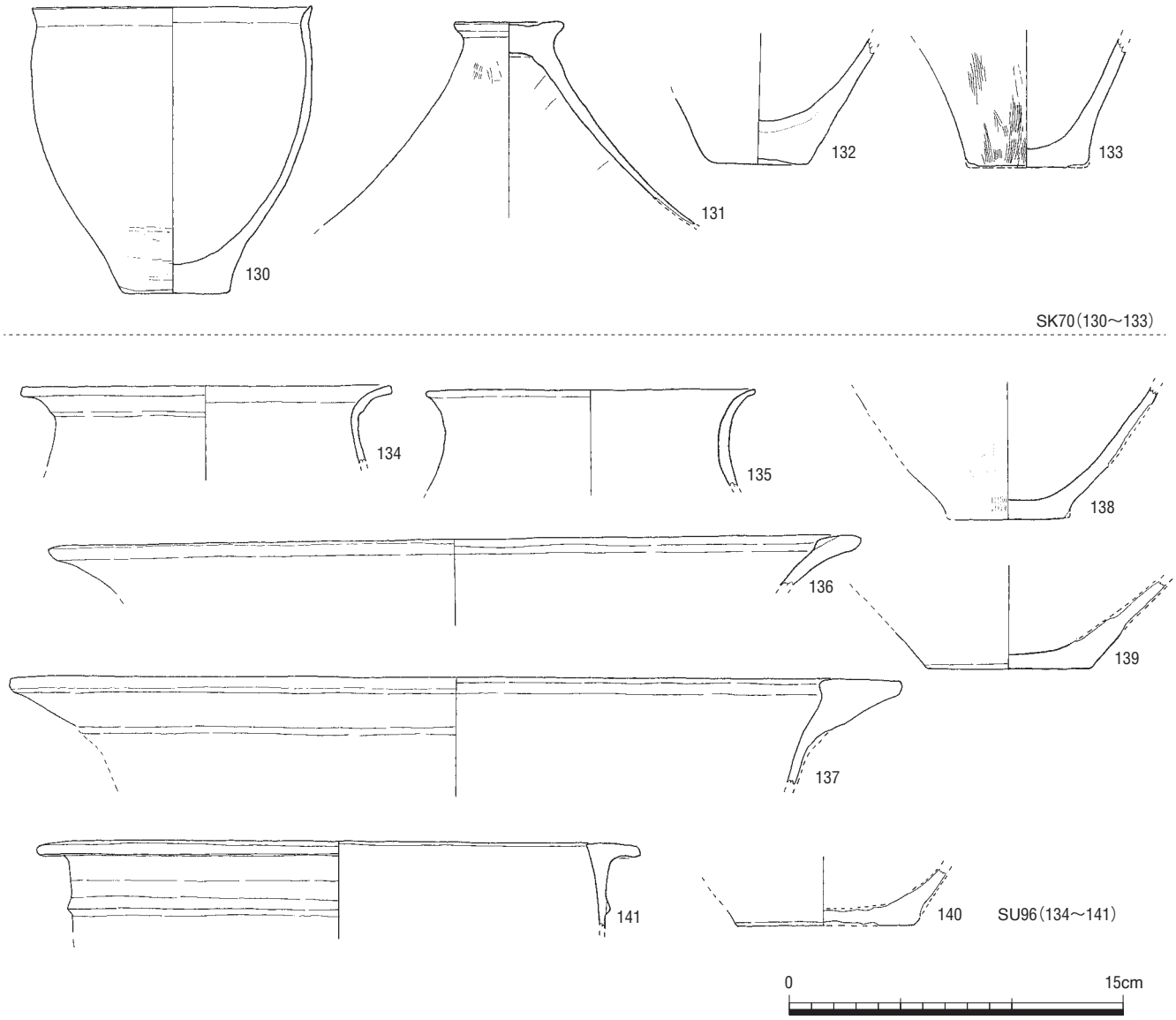


Fig. 24　SK70、SU96出土土器実測図(1/3)

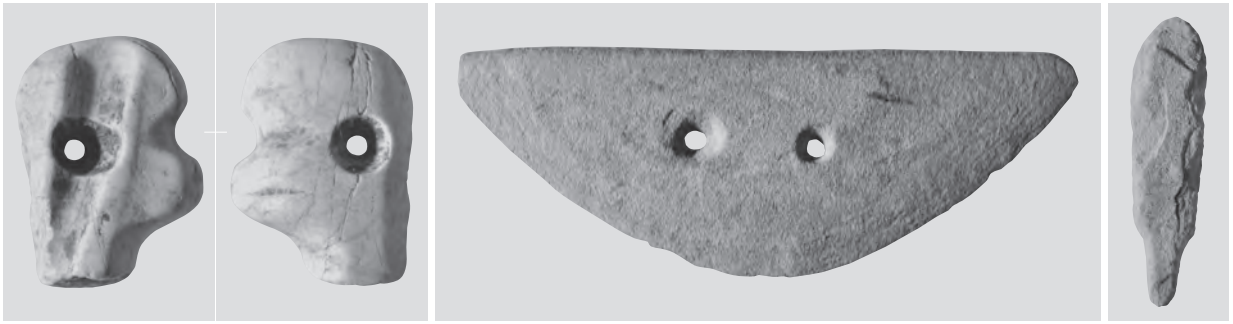


Fig. 26 -8　Fig. 26 -1　Fig. 26 -9

Ph. 1　1区出土石器

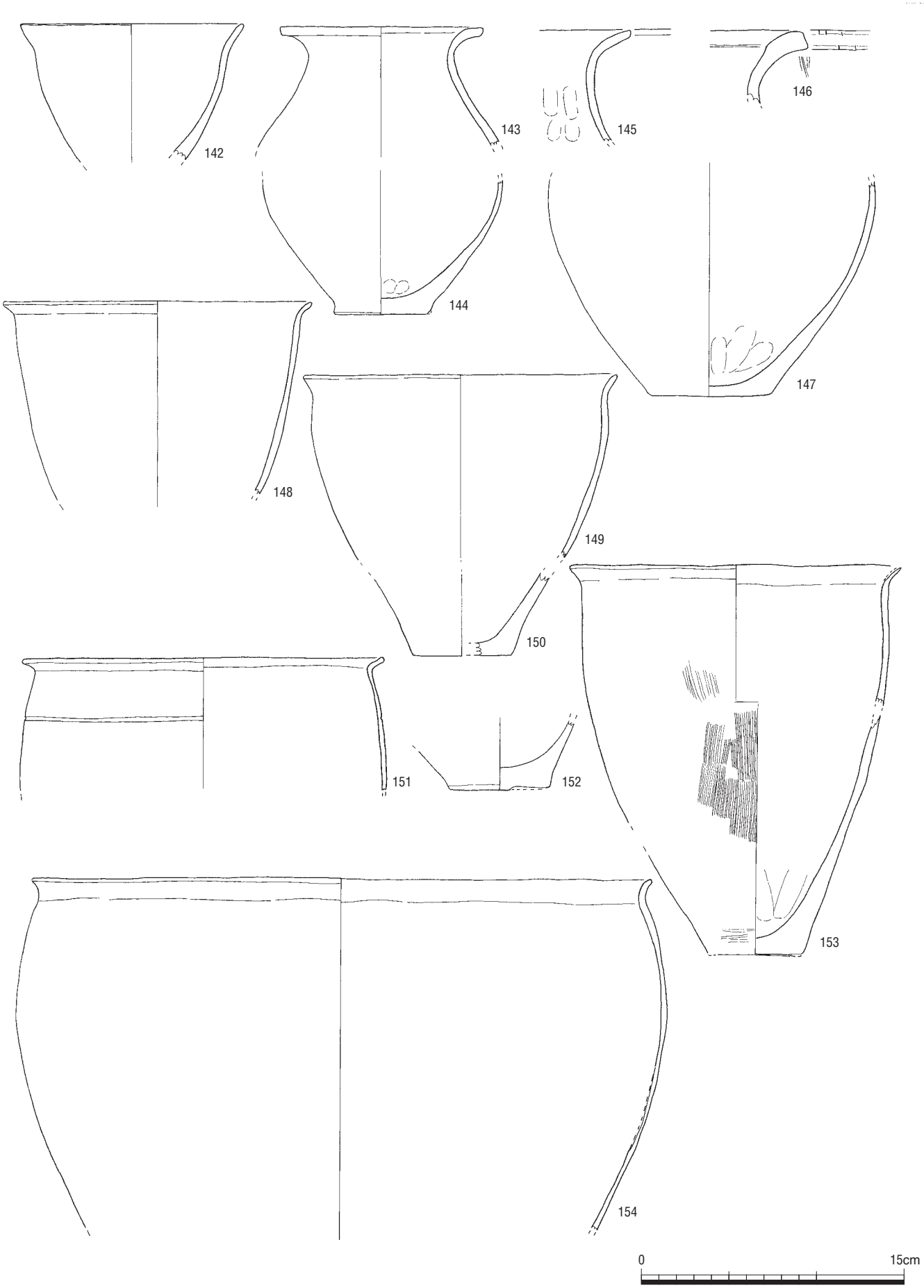


Fig. 25　SU100出土土器実測図 (1/3)

1、2(SU07)、3(SU22)、4(SU27)、5(SU38)、6(SU40・41)、7(SK70)、8(SU43)、9(SU46)、10(SU28)、11(SD84)、12(SU100)、13(SX54)

Fig. 26　1区出土石器実測図（8は1/1、9～11は1/2、他は1/3）

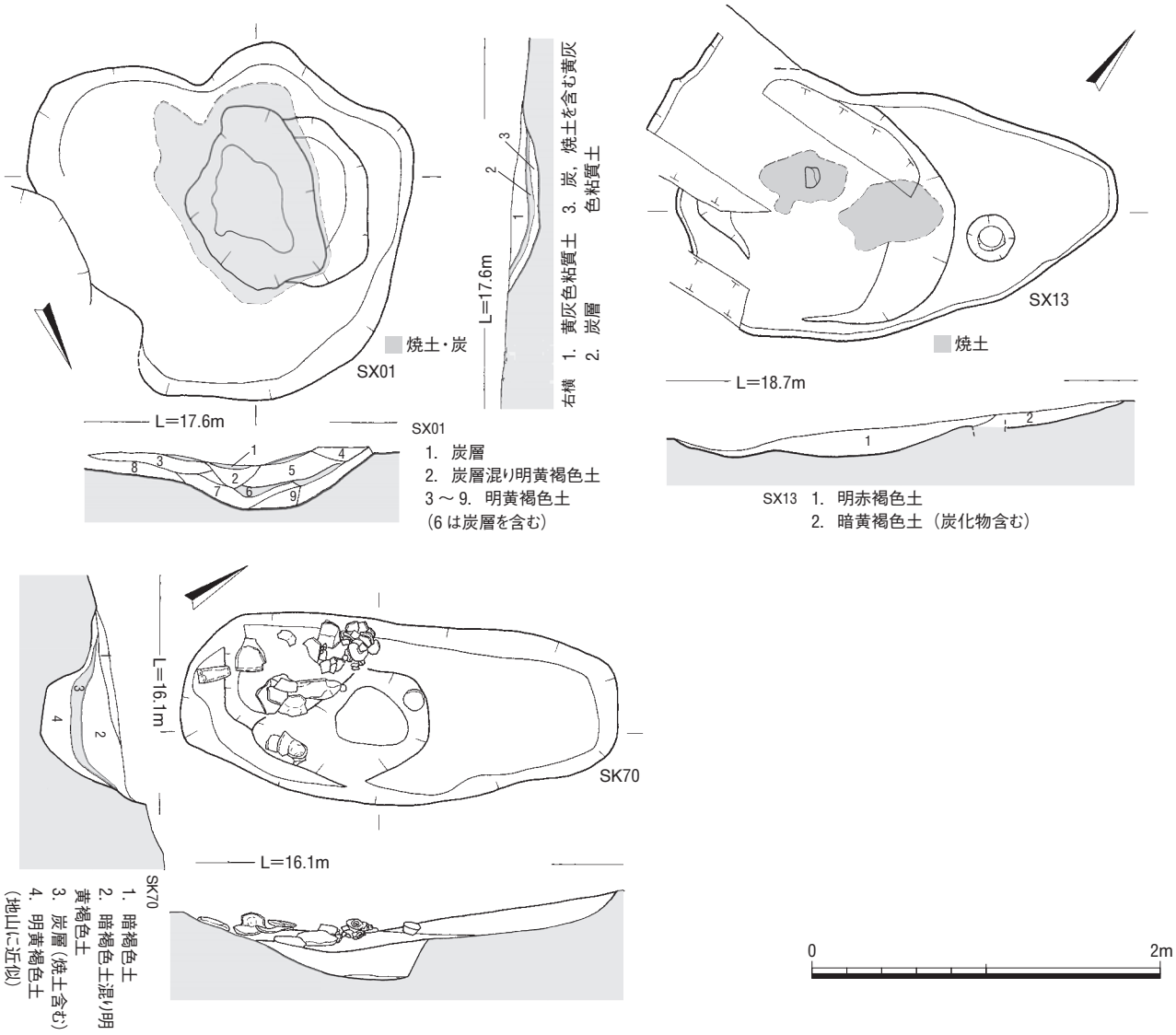


Fig. 27　SX01、13、SK70実測図（1/40）

c．甕棺

（概要）

1区南東際から合口の甕棺墓6基が検出された。配置や頭位から方形区画墓である可能性が高い。（Fig.92）甕棺墓4基からは青銅製利器の副葬品が総数6本出土した。その中の2基（ST21、ST60）の上部からは壷棺（ST20、ST47）が出土し、ST20からは石剣の切先を伴う頭蓋骨が出土した。

ST19

（墓坑）

他の甕棺墓から西側にやや離れて構築されている。主軸方位も他と異なり西側に向く。墓坑は挿入した甕棺側が短辺となる台形状の平面形を呈す。甕棺側の短辺長160cm、その対辺長230cm、長軸長296cmを測る。

先ず、検出面からの深さ34cm下底に平坦面をつくる。次に甕棺を埋置する側に向けて、階段状となった不整形なスロープを掘削し、さらに、甕棺を埋置する周りを更に1段深く掘削している。

下甕を挿入する横穴は下甕に合わせた形状で6cm程度下甕より広く掘削し、長さ56cmの位置まで抉っている。その底面は奥側に高くなる。

（甕棺の設置）

横穴に挿入された下甕の底部から粘土が検出された。粘土は厚く濃いアズキ色に変色していた。横穴の底部付近のみに検出されたことや同様な粘土付設がST59、60でも検出されたことから意図されたものと思われる。下甕は上甕より大型のものを用いる。下甕は傾斜角度4°で底部側をわずかに高く傾斜させて設置している。設置時には下甕口縁部の下部に目張りの粘土を敷設している。粘土は灰色を呈し、墓坑底面直上から検出した。屍体は下甕に頭部を挿入したと考えられ、頭部とみられる位置に朱が散布されていた。朱は25×15cmの範囲内で認められ、頭部全体を覆ったものとみられる。

散布の中心から上甕の底部までは100cmを測る。上甕に屍体を挿入し、下甕と口縁部を合わせて目張りの粘土を上部にかけて貼り付ける。目張りの粘土は幅およそ50cmを測る。上甕の底部にも下甕同様に粘土が検出された。特に底部の下部にかけてまとまった粘土が検出された。甕棺の主軸方位はN-41°-Wである。

（埋め戻し）

縦断面の土層から大きく3層が認められた。甕棺を概ね8割程覆った最下層に地山に近似した明黄褐色土（4、5層）が堆積する。その上層のやや暗色となった土層（2、3層）で甕棺が完全に覆われる。この層までは遺物を含まない。最上層の暗褐色土（1層）は暗色となり土器片を含み、下層との差異が大きい。墓坑検出時に南辺側に沿って土層が異なる明瞭なラインがみられたが、下底の掘り込みによって沈み込んだ1層が検出されていたことによる。

上甕155

口径66.0cm、底径10.3cm、器高75.5cm

口縁部の内側への張り出しが発達し、細く延びる。口縁部上面は外側へ低く傾斜する。体部上半は外側へ開く。体部に断面三角形の

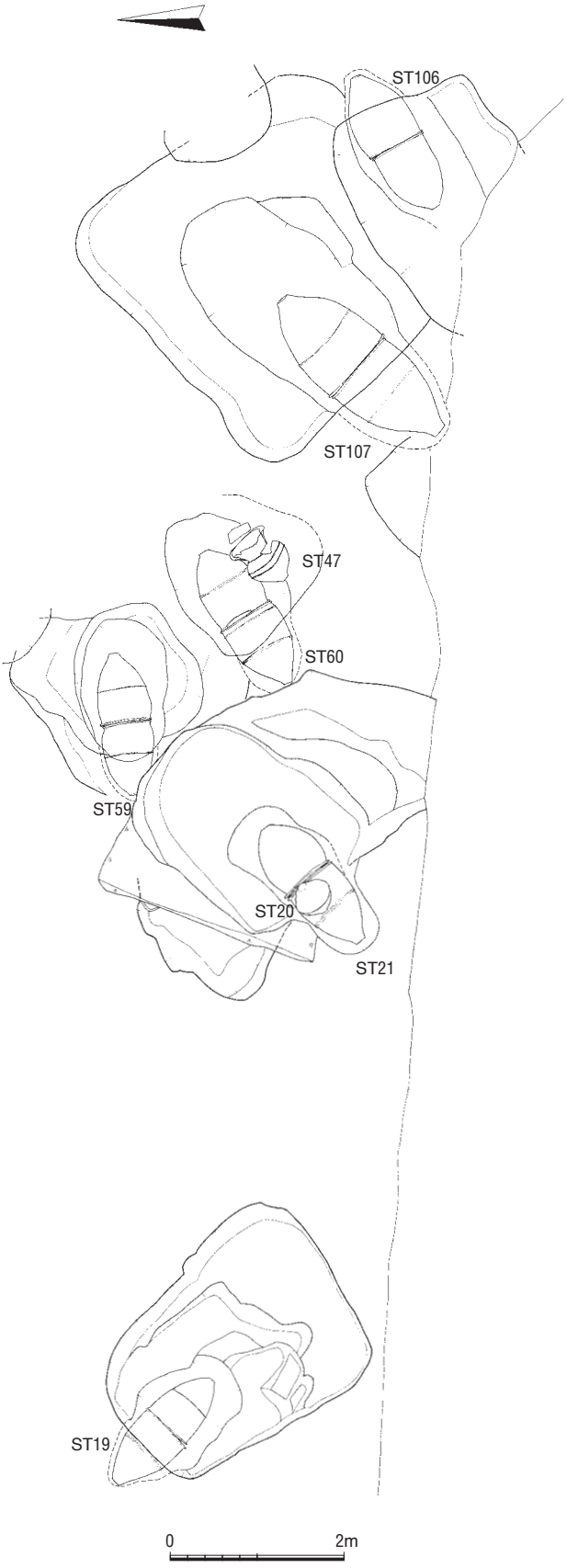


Fig. 28　甕棺墓配置図（1/80）

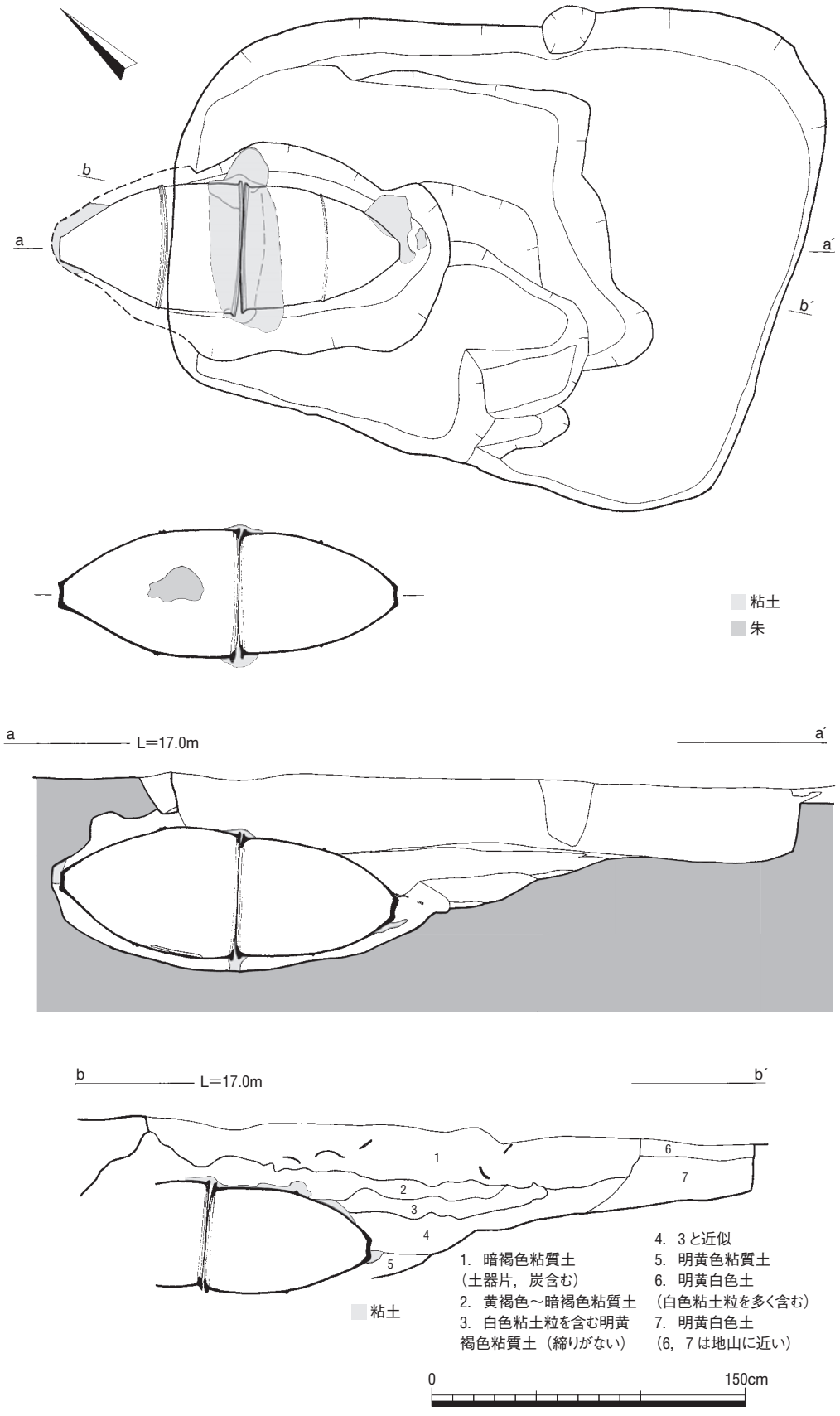


Fig. 29　甕棺墓ST19実測図（1/30）

突帯が１条巡る。底部は断面が丸い接地部が輪状に巡る上げ底なっている。器壁は薄く、５mm程度の部分がある。

下甕156

口径65.5cm、底径11.0cm、器高85.3cm

口縁部の張り出しは上甕より小さく、その上面は水平近い。体部上半は内側に窄まる。体部にＭ字状の２条造りになった突帯が１条巡る。底部は薄く、厚さ17mmを測り上げ底である。器壁は薄く５mm程度である。

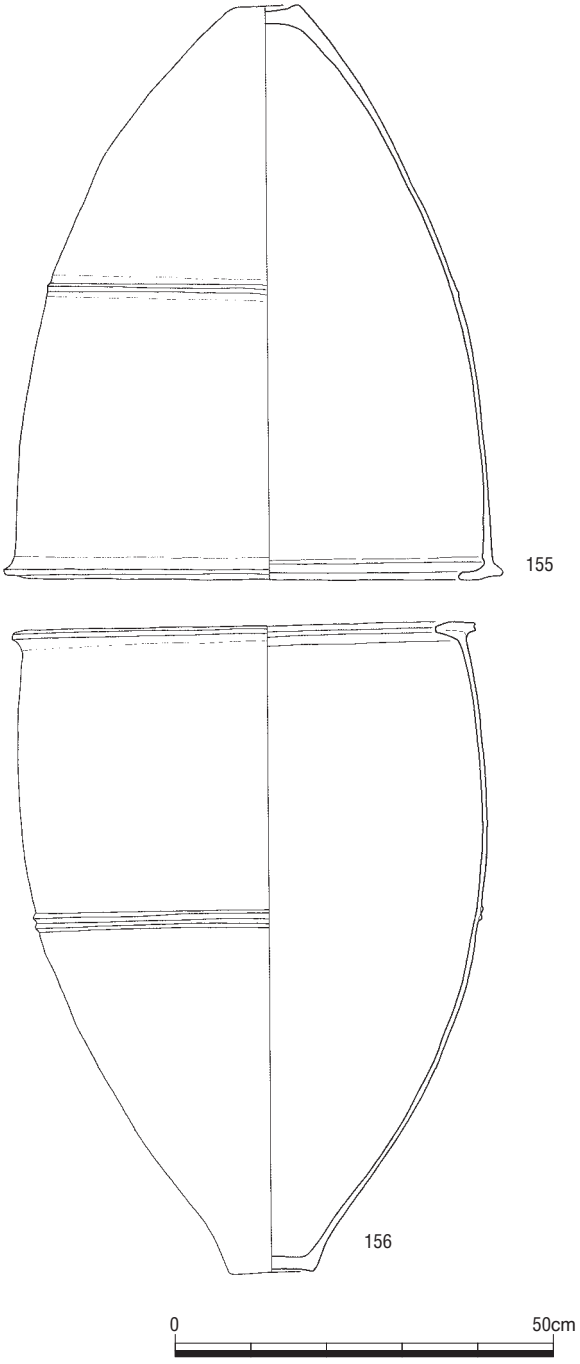


Fig. 30　ST19甕棺実測図（1/10）

ST20、21

小型壷を組み合わせた20号甕棺の直下から21号の大型甕棺が検出された。下記のように20号に頭部、21号に同一屍体の頸部以下の部分を分割して納棺したものとみられる。

（墓坑）

甕棺主軸方向に直交した辺が長い歪な方形プランを呈す。試掘で一部損壊したが、直交した方向の最大長は675cm、主軸方向は494cmを測る。東西の両辺側には２、３段のテラスが検出され、最下面は最大幅390cm、長軸長494cmの整った方形プランとなる。その平坦な底面に上甕より一回り大きな掘削が施され、甕棺が据えられている。その延長方向には80cm奥までの横穴が穿たれ､底面は奥側に傾斜して高くなり、天井部分は陥没していた。

（甕棺設置）

（ST21）

主軸方向S-50°-W、傾斜角度５°に設置された合口の大型棺である。下甕は上甕より大型のものを用いる。横穴に埋置された下甕は最大径部の突帯を底面に接地させ、底部をわずかに持ち上げて据えている。口縁部の下部にも目張りの粘土が敷かれていた。

下甕内部には口縁部から径40～60cmの楕円形内に朱が検出された。この朱の分布内から細形銅剣１本が出土した。銅剣の切先が口縁部に接し、甕棺主軸方向に平行していたことから、屍体を仰向けに納めていた場合、切先を足元方向に向けて左胸付近に置かれていたとみられる。

上甕は下甕より低く、わずかに傾斜して据えている。上甕の口縁部から15cm離れ、内面器壁より１cm程度浮いた位置から石剣の切先が出土した。20号壷棺内の石剣切先と同様に屍体に刺さったまま納棺したのであろう。

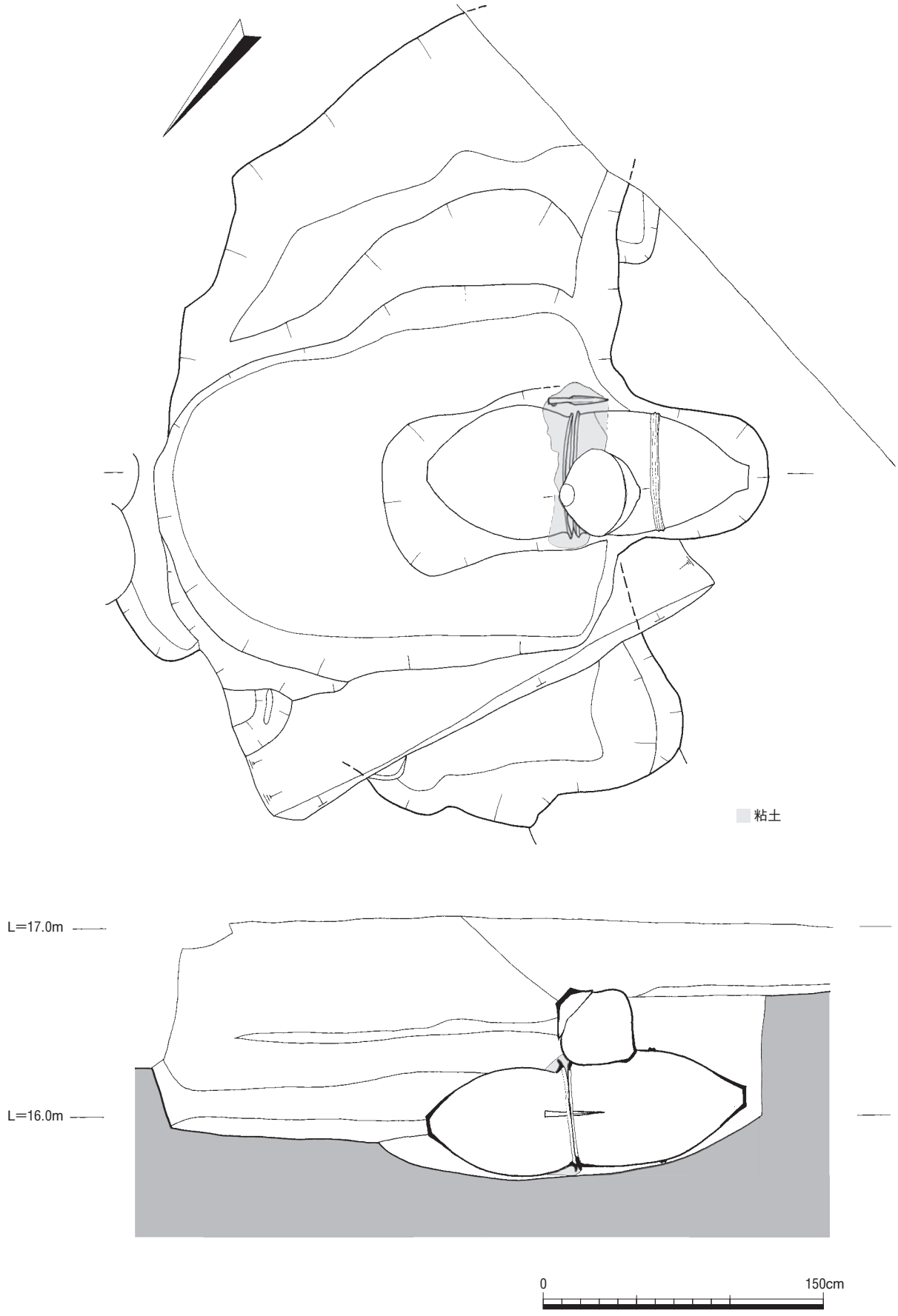


Fig. 31　甕棺墓ST20、21実測図1（1/30）

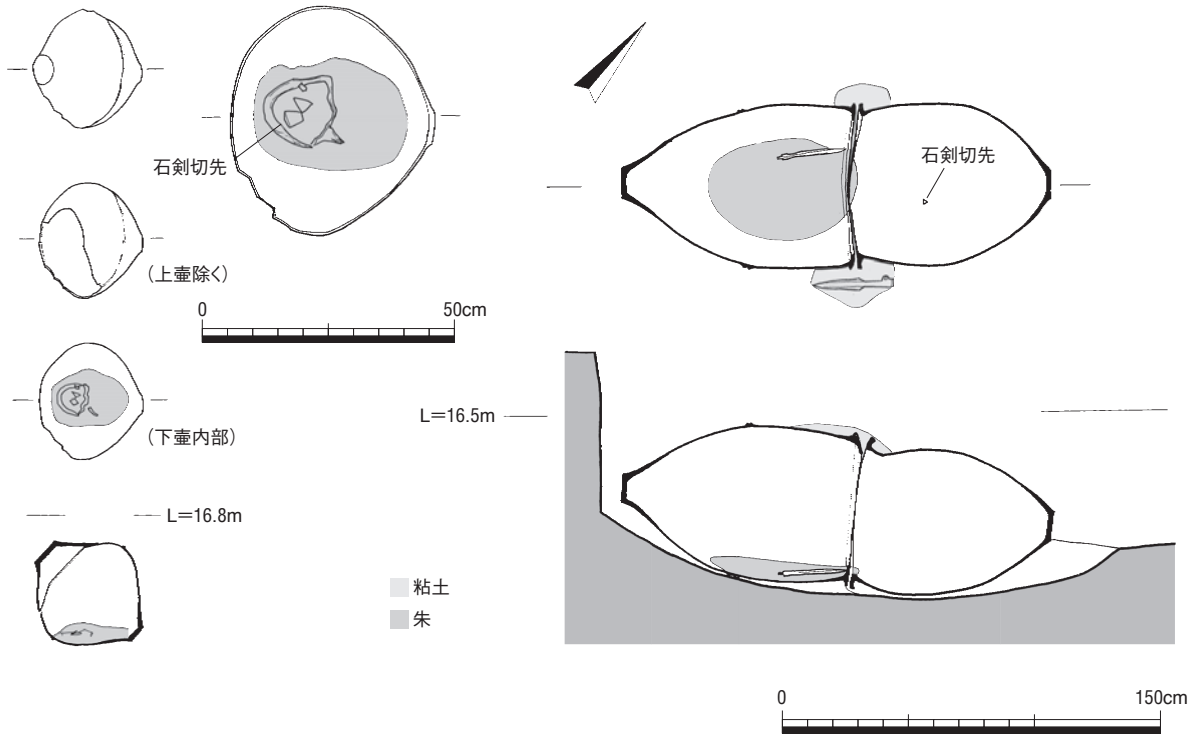


Fig. 32　甕棺墓ST20、21実測図2（1/15、1/30）

合口の目張りの粘土は甕棺の設置前に敷きこんだ口縁部下から接口後に上部に幅30～40cmに及んで貼り付けている。

（埋め戻し）

埋め戻しは先ず、甕棺際の掘り込みを粘土混じりの土で埋めていた。さらに、平坦な底面より12cm高くなったレベル（甕棺下の基底面からは33cm上）の甕棺を半分ほど埋めたレベルから銅矛が出土した。銅矛は甕棺合口の目張り粘土を拡張し、その中に封じ込められていた。甕棺内から出土した銅剣とは屍体を隔てて反対側になる。その切先の向きは銅剣と異なり頭部方向である。さらに埋め戻しが進行し上部テラスの高さになると、甕棺が完全に埋められた状況となる。

上甕159　口径62.8cm、底径11.5~12.0cm、器高76.2cm

口縁部は上面が弯曲しながら水平に近い角度まで大きく折れ曲がる。その端部には刻みが1条、直に近い角度で密に施されているが、端部の中央が凹むことから上下2条の刻みとなる。体部は中央部が最大径となるような球形を呈す。底部は厚さ17～20mmを測り、上げ底である。

下甕160　口径63～67cm、底径11.5cm、器高90.8cm

口縁部は内側に張り出し、端部は面をなす。上面は外側に下がる。体部上半部は直に近く立ち上がる。胴部最大径は口縁部から22cm下がった位置となり、そこから上位は内傾する。底部は4mm程度、中央部が上がるが平底に近い。厚さ15mmを測り、内面の平坦面が広い。胴部に2条造りの突帯が1条巡る。

（ST20）

頸部から口縁部を欠いた胴部2個体を組み合わせた小型壷棺である。内部から頭蓋骨が出土したことから切断した頭部を納棺したものと考えられる。大型棺ST21号の合口付近から下甕にかけての上部から出土した。埋置角度は40°を測り、下壷棺の底部は21号下甕の直上となる。

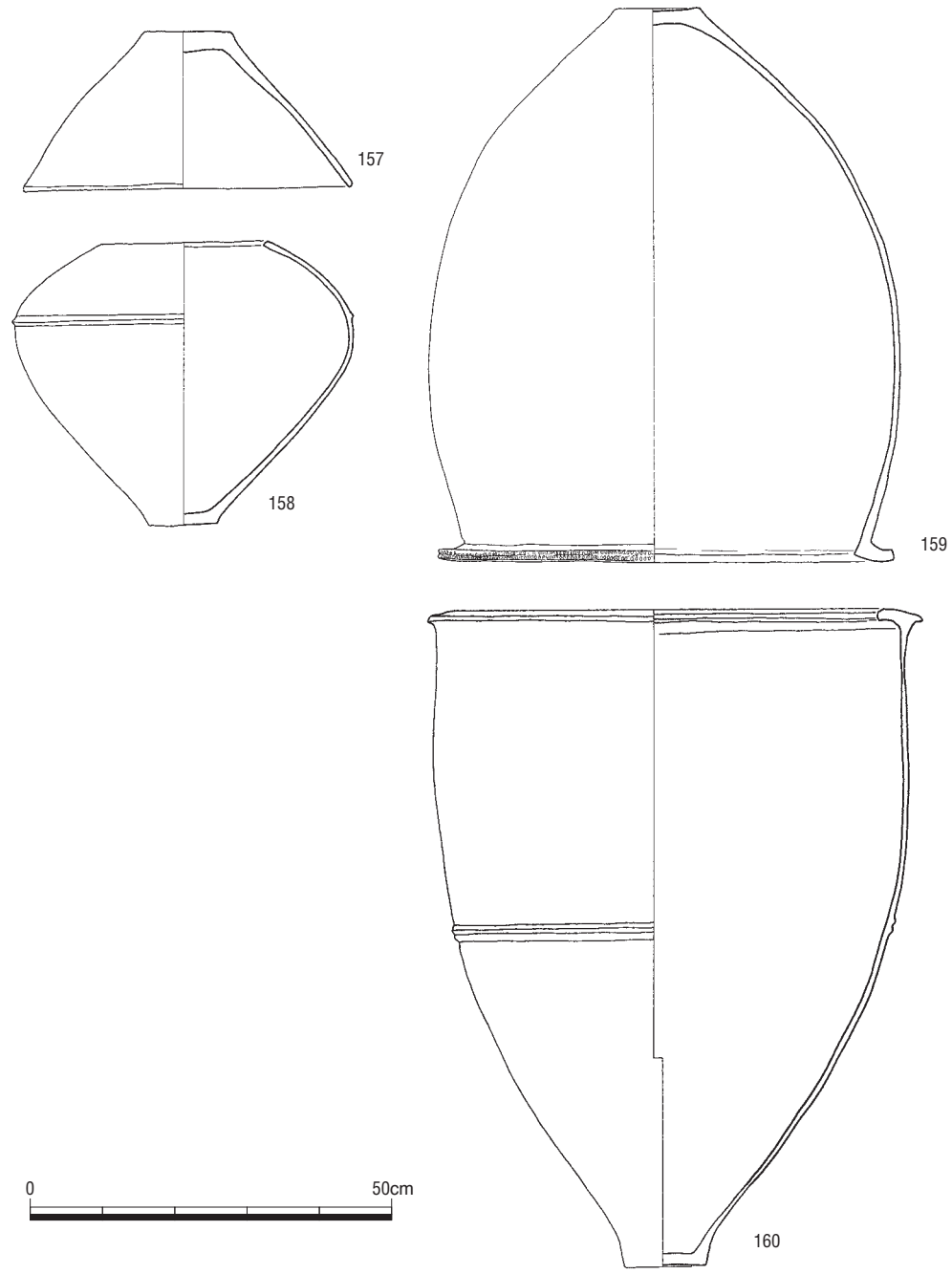


Fig. 33　ST20、21甕棺実測図（1/10）

20号壷棺は21号下甕の頭部の位置を意識し、主軸を同じくして、その直上に埋置されていることや20号壷棺の墓坑掘方が検出されなかったことから21号と同時に埋葬されたと考えられる。

頸部を欠いた壷体部を下にして、胴部最大径部まで欠いた壺体部下半を上から被せ、下壷棺の最大径部までを覆う。合わせた空隙中から粘土が検出されたが、粘土は外側から貼り付けたものではないことから、目張りの粘土ではなく、自然に生成されたものと思われる。

下壷棺の内部底面の22×30cmの楕円形の範囲内に朱が検出された。さらにこの朱の範囲内から下顎骨と石剣の切先が検出された。下顎骨の中心軸は壷棺の主軸にほぼ合致している。石剣切先は２つに折れた状態で下顎骨の内側から出土した。他の頭蓋骨は壷棺の器面に薄く貼りついた状態で検出され遺存は良くない。

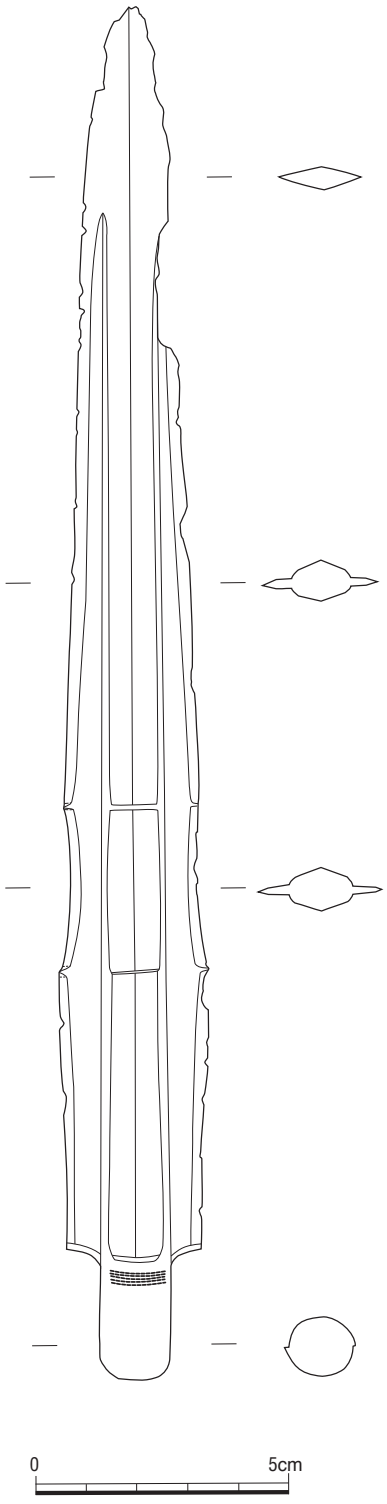


Fig. 34　ST21出土銅剣実測図（2/3）

Ph. 2　ST21出土銅剣

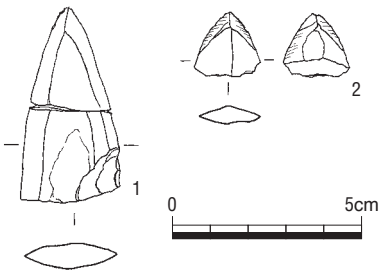


Fig. 35　ST20、ST21内出土石剣切先実測図（1/2）

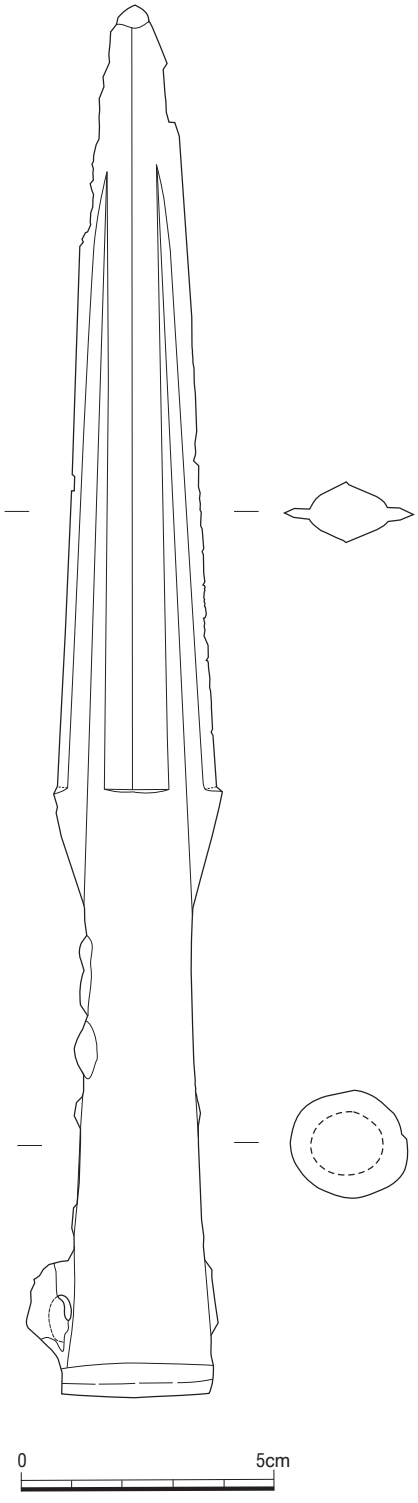


Fig. 36　ST21出土銅矛実測図（2/3）

Ph. 3　ST21出土銅矛

壷棺157、158

157は158と同器形とみられ、胴部最大径の46cmまで欠いている。高さ21cmを測る。頸部から打ち欠いた158は開いた頸部の内面径22cm、胴部最大径46cm、器高39cmを測る。胴部最大頸部に断面三角形の突帯が1条巡る。

石剣

1、2はいずれも遺体に刺さっていたとみられる磨製石剣の切先である。1はST20から2つに折れて、2はST21上甕から出土した。1は鏑が不明瞭であるのに対し、2は明瞭に通る。いずれも粘板岩製。

銅矛

全長27.5cm、刃部長15.5cm、鋒長3.1cm、関部下端までの袋部長9.6cmを測る細形銅矛である。袋部の中空部分は関上端付近に及び、長さ12.4cmを測る。切先に細かい刃こぼれがみられる。関は吉田分類のxタイプである。袋部には甲張りがわずかに残り、耳は錆化で孔が埋まる。耳の断面は稜が緩やかな菱形を呈し、節帯の上端にかかる。幅7mmの1条節帯には中央に緩い稜が立つ。翼に縦方向の、脊に研ぎ分けではない斜め方向の研磨痕がみられる。刃部と脊部鏑の角度は同一面上である。袋部内に木柄の一部が遺存していた。樹種等は未分析である。

銅剣

現存長27.1cm、刳方上端に位置した最大幅は2.9cm、茎長2.5cmを測る細形銅剣である。元部も刃部を研ぎ出し、脊の鏑も関部まで及ぶ。刃部と脊部鏑の角度は同一

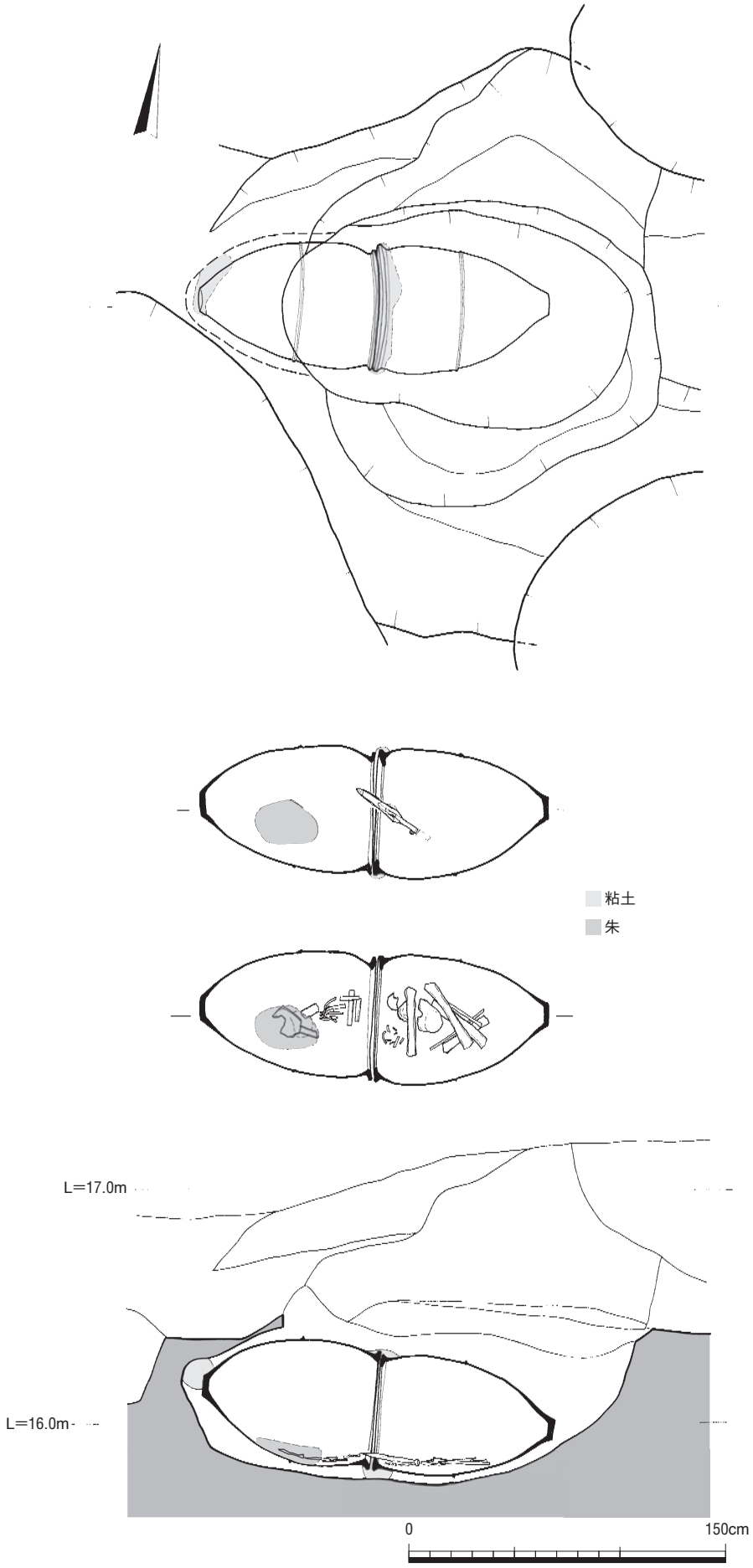


Fig. 37　甕棺墓ST59実測図（1/30）

面上で同時の研磨とみられる。脊部節帯は山形の形状を呈す。茎の断面に范ずれによる段がみられる。

ST59

（墓坑）

上部を古墳周溝SD10に切られ、ST60に近接した位置で並列して検出された。ST60の墓坑に切られ、南西側のST21との切り合い関係は明確ではなかったが、切られていると判断した。墓坑の形状は不明瞭であるが、甕棺の主軸方位では160cm以上、直交方向では278cm以上の規模である。直交方向ではST21の墓坑同様に階段状になり、中段に117cm四方のテラスが設けられている。その面からさらに甕棺周囲を設置した甕棺の上部の深さまで掘り下げ、横穴へ延長していく。横穴は主軸長60cmまで穿たれ、底面は奥へ緩やかに上がる。

（甕棺、人骨、銅矛出土状況）

甕棺の主軸方位はS-81°-Wを向き、上下の甕棺はほぼ同じ大きさである。下甕を横穴に半分程度挿入しているが、横穴と底部の間の空隙にST19同様に粘土塊が検出された。また、口縁部の合口下部からも目張りの粘土が検出された。下甕は底部を少し持ち上げた傾斜角度7°で据えている。

内部からは人骨が出土した。形状は不明であるが厚みやカーブから頭骨とみられる骨片が下甕中央部底面から出土した。接して左右上腕骨が間隔を狭くしてハの字状に出土した。その下部からは厚さ1mm程度の層状となった朱を検出した。続いて下甕内からは肋骨、左上肢骨が出土し、左上肢骨は肘関節を屈曲していた。上甕には骨盤（寛骨）、下肢骨が残る。左右下肢骨は膝関節を強く屈曲し、特に左下肢骨は膝から反転して折れ曲がり、右下肢骨上に重なる。

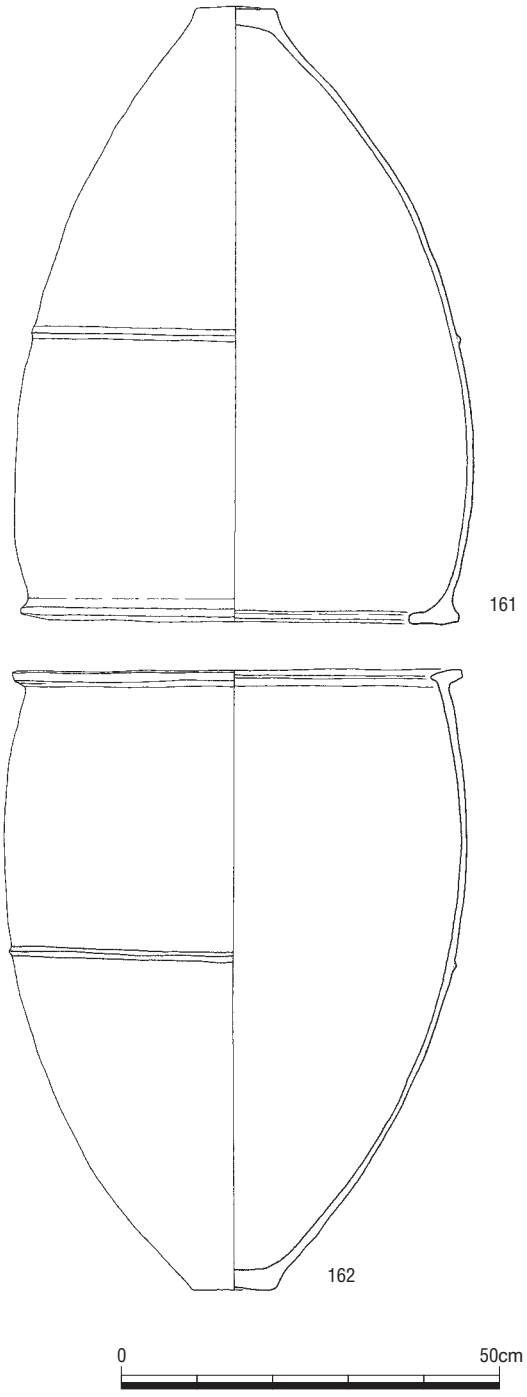


Fig. 38　ST59甕棺実測図（1/10）

上記をまとめると左右上腕骨が近いことや強く屈曲した下肢骨が右側に倒れこんでいることから右側臥に近い仰臥で下肢骨を強く折りまげて納棺されたと考えられる。

朱は下甕中位の底面に径20×30cmの楕円形範囲に分布し、人骨位置から頭部から胸にかけて分布していたことがわかる。

合口から上甕にかけての人骨上から銅矛が出土した。銅矛は屍体の下腹部に切先を斜め上に向け置かれていた。銅矛および周囲からは黒色の皮膜状のものが検出されたが、内容は不明である。袋部端から約5cm出た炭化した木質状のものが検出された。袋部内に木柄が遺存していたことからその延長の可能性があり、木柄を折って副葬したものと考えられる。

上甕161　口径57.8cm、底径11.0cm、器高81.1cm

口縁部は内側へ張り出し、端部は丸みがある。胴部の最大径部は上部に位置し、そこから弯曲しながら内傾する。胴部の中央より少し下がった位置に断面三角形の突帯が１条めぐる。底部は平底に近く、中央で厚み21mmを測る。内面にはかすかに黒塗りの痕跡が認められる。

下甕162　口径59.2cm、底径11.0cm、器高81.6cm

口縁部の内側への張り出しは小さく、先端は細まって丸く尖る。上面は弯曲しながら内側へ低く傾斜し、外側へ張り出した口縁の端部は面をなす。胴部には断面三角形の突帯が１条めぐり、上位の最大径部より口縁にかけて弯曲しながら内傾する。底部はわずかに上がる平底に近く、厚さ27mmを測る。内面の空洞化していたとみられる部分に黒塗りの痕跡がみられる。

銅矛

全長35.1cm、刃部長22.0cm、鋒長5.2cm、関部下端までの袋部長9.1cmを測る。袋部の中空部分は関部上端の位置に合った長さ13.0cmである。関は吉田分類のｘタイプである。切先に細かい刃こぼれがみられる。袋部の甲張りが一部突線になった稜線状の形態で残る。刃部と脊部鎬の角度は同一面上である。

袋部内から木柄とそれに巻かれた紐状の繊維が出土した。（カラーPh.12）樹種など現在、未分析のため改めて公表したい。

ST47、60

（墓坑）

ST59同様に上部を古墳周溝SD10に切られているため、墓坑上部の形状は不明である。下部の上甕周囲に主軸長170cm、最大幅123cmの土坑が掘られていた。基底面は合口に向かって下がっていく。延長した横穴は開口部幅が73cm、奥までの主軸長は58cmを測る。基底面は合口から奥に向かって緩やかに上がる。

（ST60甕棺、銅剣出土状況）

上下甕棺はほぼ同じ容量で、下甕の最大径がわずかに大きい程度である。下甕は合口下部に目張りの粘土を敷いて設置する。甕棺はほぼ水平に置き、胴部の最大径部が接地している。下甕底部からその上部にかけてST19、57と同様に粘土が検出されたが、偏っている。上甕も下甕同様に水平に据えられていたが、合口が下にずれ落ちていた。合口の目張りの粘土は幅広く40cm程度を測る。上甕周囲に埋め戻された土中には粘土が部分的に混入していた。

朱が下甕内面の合口から底部側へ65cmまでの範囲で厚さ１～２cmの層に混じって検出された。銅剣は朱の上に堆積した青灰粘土中から出土した。上甕の口縁部付近に切先をやや外側に向けて置いていた。屍体の頭部を下甕に納めた仰臥の場合は右脇に置いて切先を下方外側に向けた状態となる。茎部分は黒変した粘土となっていたが、形状を残すものは無かった。

上甕165　口径63.8cm、底径11.4cm、器高87.4cm

口縁部は内外面に張り出すが、その端部は内側が丸いのに対し、外側は明瞭に面をつくる。上面は水平もしくは外側へ低く傾斜している。胴部は内側に弯曲しながら内傾する。外面にはＭ字状の２条造りの突帯が１条めぐり、底部近くにハケメが残る。底部は内面と外面の縁辺に粘土を加えている。

下甕166　口径64.8cm、底径10.4～11.4cm、器高90.2cm

口縁部の形状は上甕と近似するが、上面が内側へ低く傾斜する。口縁部下の外面には断面三角形の突帯が貼り付けられている。中位の突帯は２条造りである。底部はほぼ平底である。

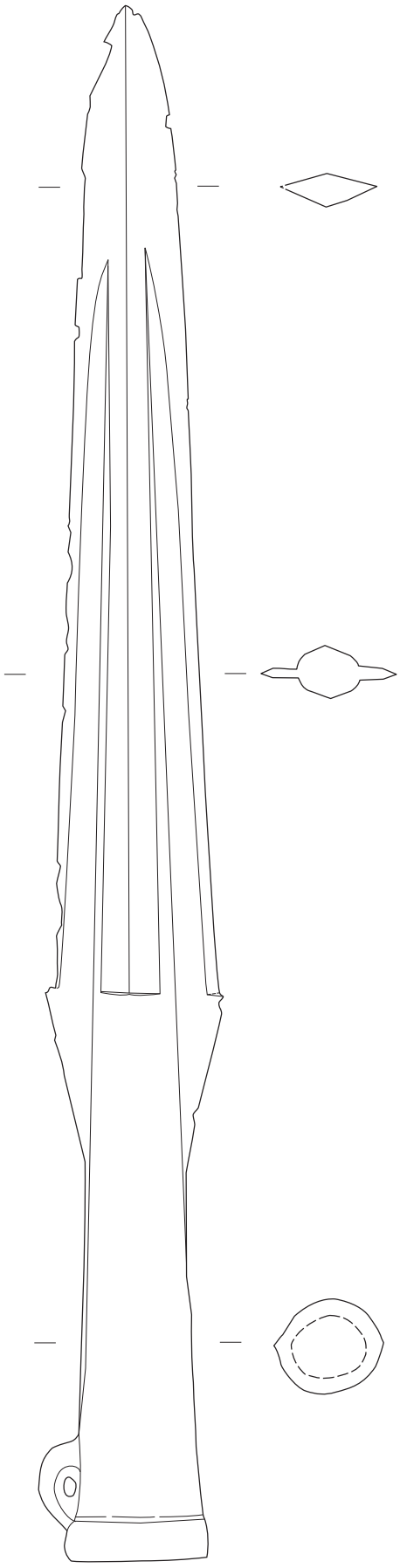


Fig. 39　ST59出土銅矛実測図（2/3）

Ph. 4　ST59出土銅矛

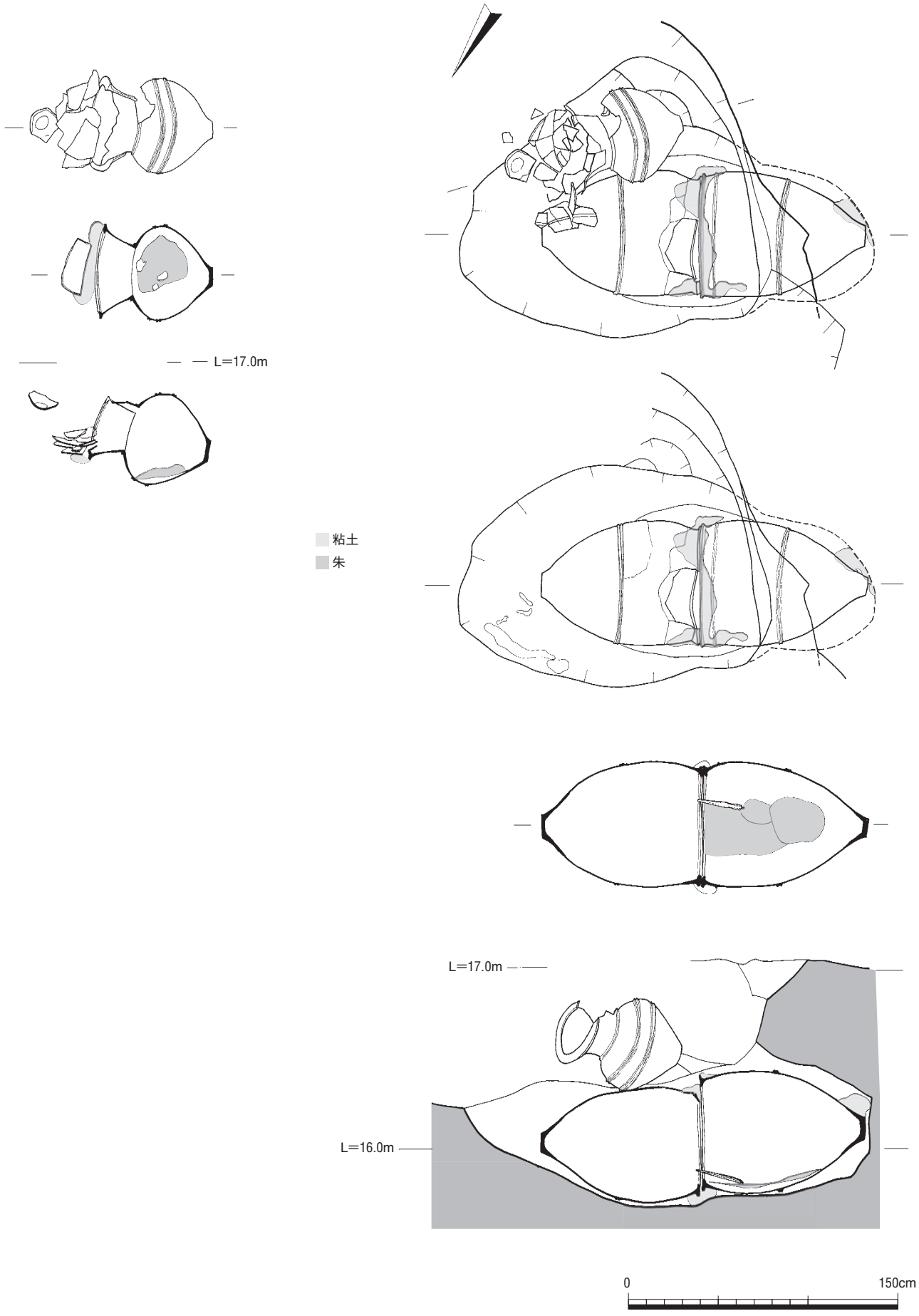


Fig. 40　甕棺墓ST47、60実測図（1/30）

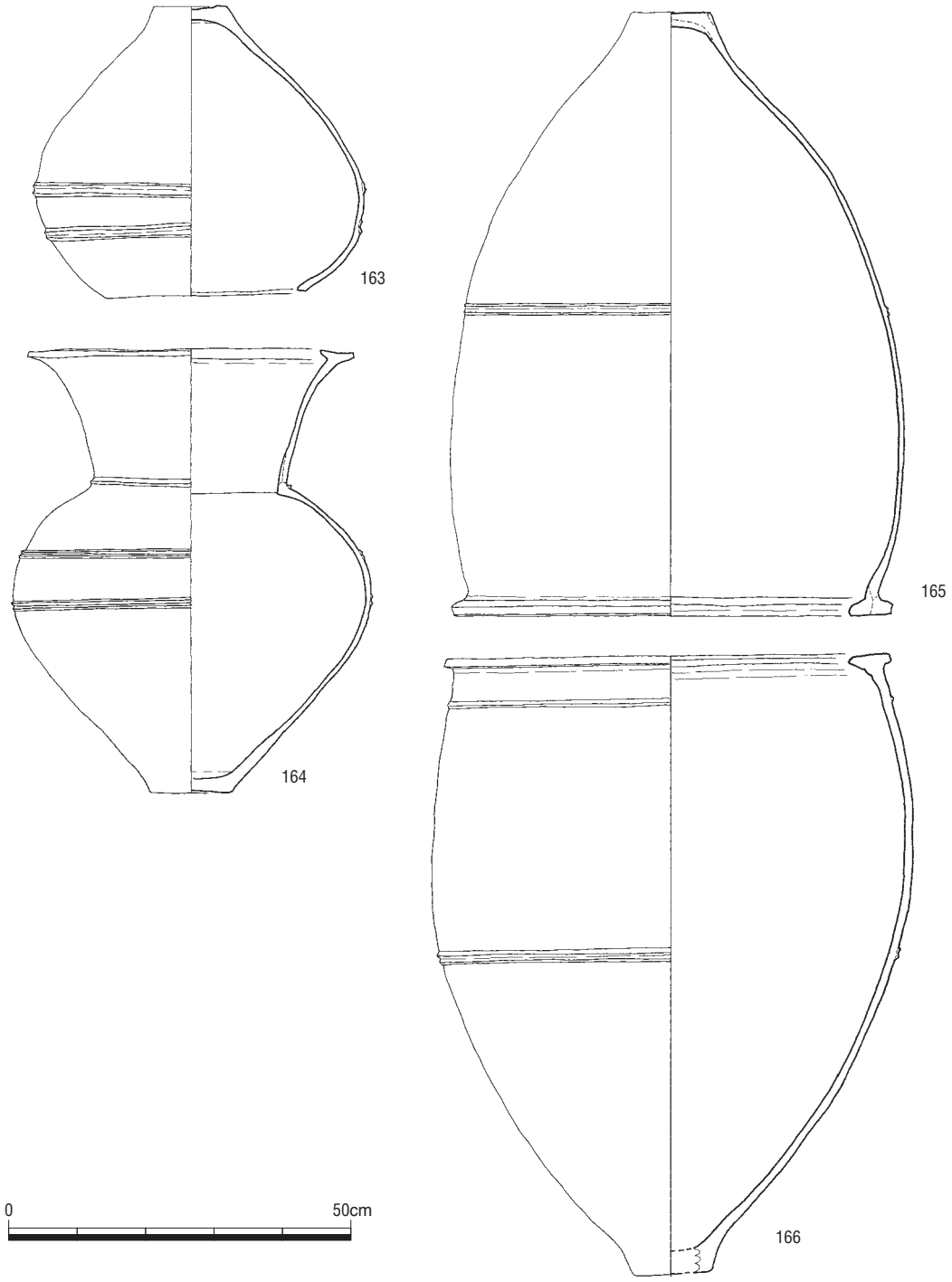


Fig. 41　ST47、60甕棺実測図（1/10）

（ST47壷棺出土状況）

ST60の直上で2個体の壷を合わせた壷棺が検出された。位置はST60上甕の南脇に位置していることからST20のように頭部の位置を意識していない。墓坑は検出されないことからST60と同時に埋置されたとみられる。ST60掘方の上端付近に位置し、下壷底部のレベルがST60下甕の口縁部上部と同じであることからST60をほぼ埋めた状態で埋置している。

壷棺の主軸方位はST60と近似する。下壷棺に完形の広口壷を用いて、底部をST60の下甕側に向け

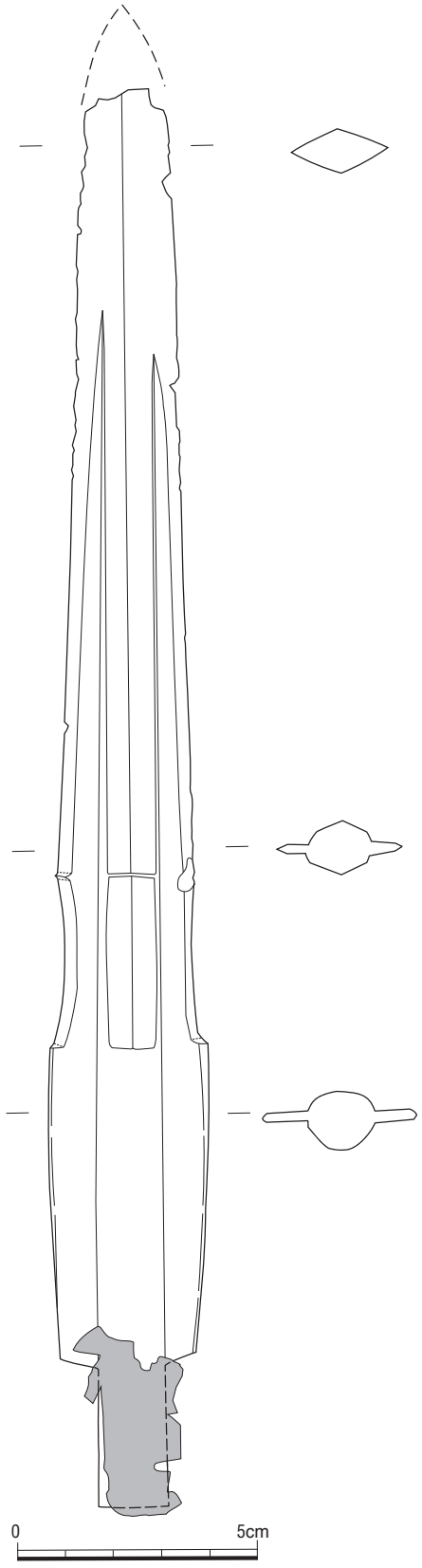


Fig. 42　ST60出土銅剣実測図（2/3）

Ph. 5　ST60出土銅剣

た緩い傾斜角度11°で埋置している。上壷棺は古墳周溝掘削時に破壊されているが、残存した破片の接合により、頸部を打ち欠いた壷胴部であったことがわかる。従って呑口に合わせたと考えられる。下壷棺の口縁部付近に粘土が検出されたが、目張りの粘土か判然としなかった。下壷棺の内部には朱が散在的であるが検出された。

壷棺163、164

上壷163は頸部から口縁部を打ち欠いている。器形は上下ほぼ同じであるが、大きさは上壷がやや小さい。上壷の胴部最大径47cm、器高42cmを測る。下壷は口径47cm、胴部最大径52cm、器高64.5cmを測る。胴部最大径部と上位にM字状になった2条造りの突帯が2条めぐる。

銅剣

切先を欠損した現存長29.2cm、刳方下端に位置した最大幅3.3cm、茎長2.7cmを測る。刃部と脊部鎬は刳方下端の位置まで及び、鎬と刃部の角度は同一面上である。脊部の節帯は山形を呈す。茎に付着物があるが未分析である。

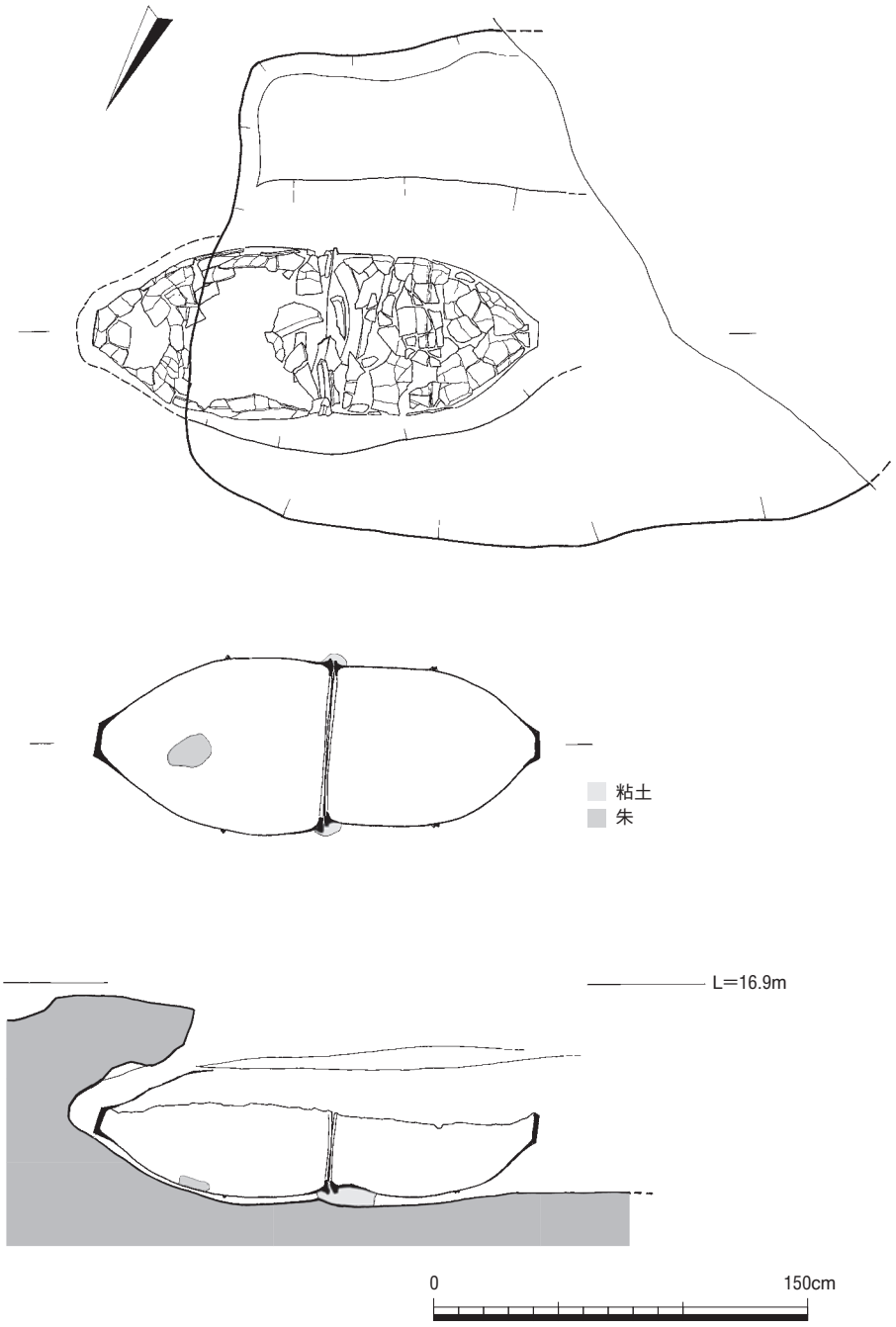


Fig. 43　甕棺墓ST106実測図（1/30）

ST106

検出された甕棺墓群のなかで最も西側に位置する。さらに西側は段落ちし、旧地形図（Fig.3）からも尾根線脇の急斜面となっている。ST107と近接し、その墓坑を切っていた。

（墓坑）

南側が調査区外となり規模が不明であるが、検出された範囲では長辺270cm以上、短軸長203cmの隅丸長方形プランを呈す。南東辺側に幅40～50cmのテラスが設けられている。そのテラスから甕棺周囲を甕棺が覆われる深さまで掘削した土坑が掘削されている。底部方向の上端はスロープ状となるためか不明瞭となっている。横穴は開口部径72cm、奥までの主軸長47cmが掘削されている。底面は下甕の形状に合わせて緩やかに傾斜して上がる。

（甕棺出土状況）

横穴はST19以外の甕棺と反対方向に掘削されていることから頭位も逆位と考えられる。甕棺の器胎は脆く、上部は割れて細片になっていた。下甕は上甕よりやや大きい容量のものを用いている。傾斜角度1°を測り、ほぼ水平である。下甕内面の体部下位の底面にわずかに赤色顔料が検出されたことからも頭位が他と異なり逆位であると考えられる。合口の目張りの粘土は口縁部下部にも厚さ4cm程度を敷いて甕棺を置いている。厚みは薄いが幅は上甕側に広く、最大で30cmを測る。

上甕167　口径59.4cm、底径12.1cm、器高82.6cm

口縁部は内外に張り出し、その端部は面をなす。上面はほぼ水平である。体部中位に2条造りの突帯が1条めぐる。上下の突帯は粘土が離れているが、他の甕棺同様に1連のものとみられる。粘土帯の継ぎ目は4～10cm幅でみられる。

下甕168　復元口径68～72cm、底径11.3cm、器高89.5cm

上部が陥没し、細片で出土した為、完形に復元することができなかった。そのため、図示した器形に誤差が生じている可能性がある。口縁部上面はほぼ水平で、内側に粘土を貼り付けて張り出させる。その端部は面をなす。外側への張り出しは小さく丸みがある。体部上半は内側に窄まり、中位に幅1.0cm、高さ4mm程の断面三角形の突帯が1条巡る。底部は厚さ27mmの平底である。器壁は5mm～8mmと薄く、突帯より約5cm低い位置で明瞭に粘土帯の継ぎ目が巡る。他の継ぎ目は判然としないが、幅8.7～10.3cm程度で積み上げているとみられる。

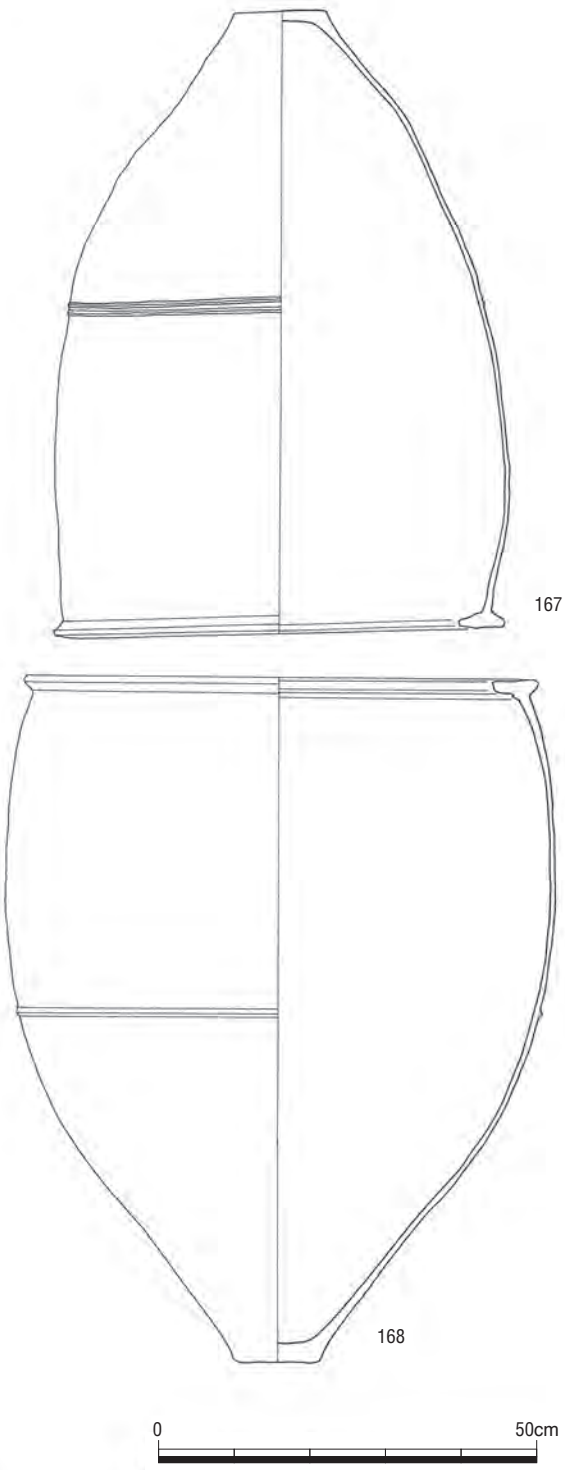


Fig. 44　ST106甕棺実測図（1/10）

ST107

（墓坑と埋め戻し）

ST106の西側で検出された。北西側の上部は古墳周溝SD10によって切られている。検出された墓坑は北西辺365cm、北東辺360cmを測る正方形に近いプランを呈している。現状の地山面からは70cm下がったレベルで平坦面を作っている。このレベルは甕棺の上面ないし、10cm下がったレベルとなる。次にこの面から甕棺を埋置する土坑を掘削している。甕棺周囲の掘方は上甕底部との間が広くあいた細長い形状となっていることはST107の墓坑と同様である。甕棺を斜めに挿入していくスペースを確保したものとみられる。テラスから底面までは上記のようにテラスの高さで甕棺を覆う85～95cmの深さである。甕棺埋置後の埋め戻しは甕棺周囲を先に埋め、その後、テラスまでの深さを埋

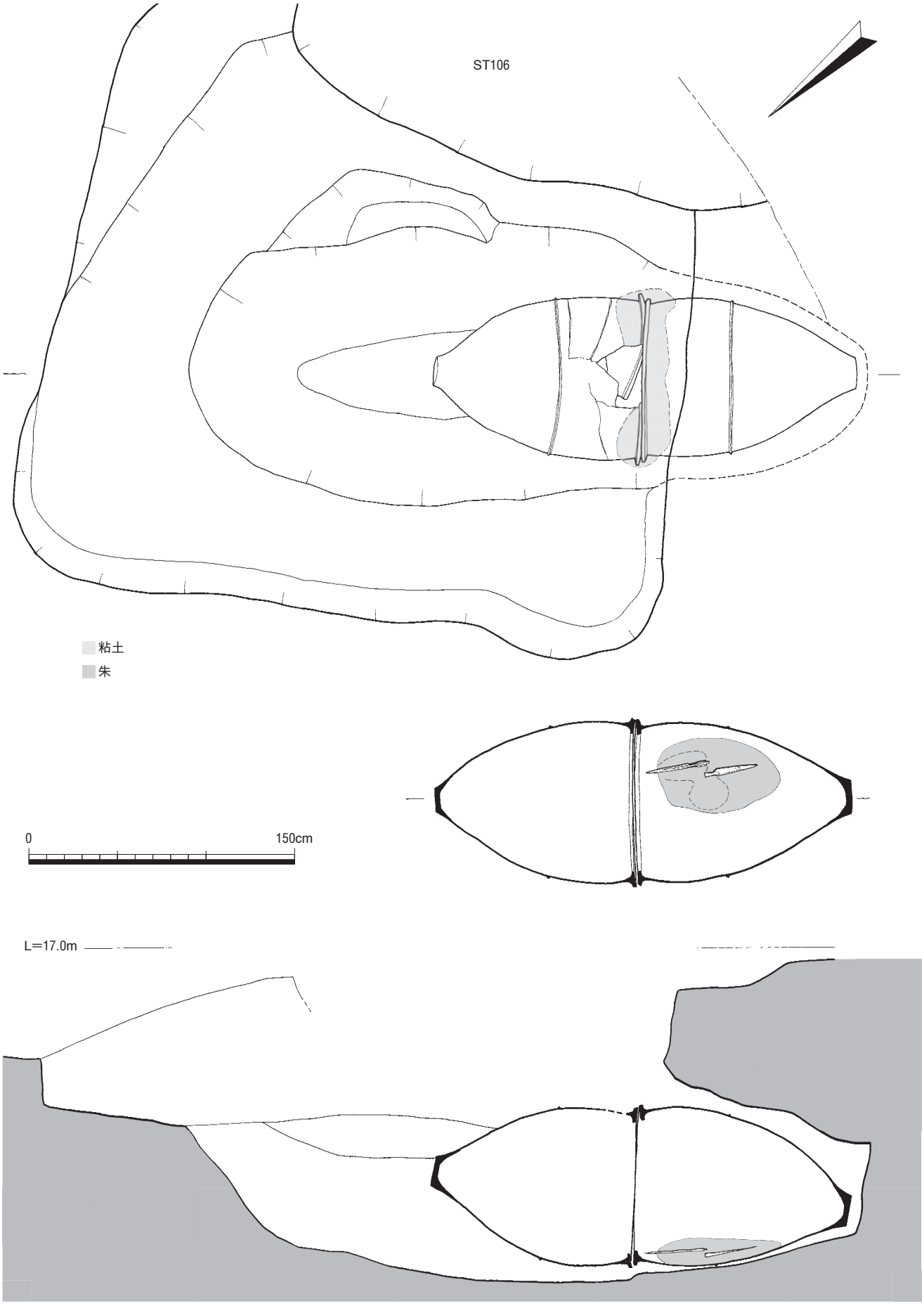


Fig. 45　甕棺墓ST107実測図（1/30）

めたとみられる。そこまでは地山と近似した土で埋められ、一連の作業が認められるが、その上層からはST19同様に土器片を含むようになることから中断を置いた埋め戻しの可能性がある。横穴は甕棺周囲の掘方と連続し、開口部120cm、奥行き115cmを測る。底面は甕棺のカーブに合った奥側へ高くなる傾斜がつけられている。

（甕棺設置と銅剣・銅矛出土状況）

検出された中で最も大型の甕棺が用いられている。上下甕棺はほぼ同じ容量である。埋置角度は6°を測り、上甕底部方向へわずかに高くなる。下甕最大径部の突帯付近が基底面に接地し、接口の位置となる下底に溝状の段が検出されたことから甕棺を設置する前に傾斜角度の調整や合口目張りの粘土の準備を行っていたものと考えられる。横穴は余裕をもった範囲を穿ち、特に底部上方との間には広い空隙ができている。

甕棺内部の底面には胴部下位から口縁部近くに及ぶ40×67cmの範囲内に朱が検出された。屍体が仰臥の場合、朱の分布は主軸に対して右側に偏っていることから幾分か右側臥であった可能性がある。この朱の分布範囲内で、遺体頭部から胸にかけての右側から細形銅矛１本、細形銅剣１本が出土した。縦列に近い配置で銅矛を頭位側にして、切先を上下逆方向に向けている。銅矛節帯と銅剣茎の位置を横位にずらして平行させ、甕棺主軸方向に対しては少し斜位となっている。青銅器周辺は青灰粘土が黒色化していた。銅矛袋部内には木質は残っていなかった。銅剣の茎部からは絹糸が巻かれた形状を

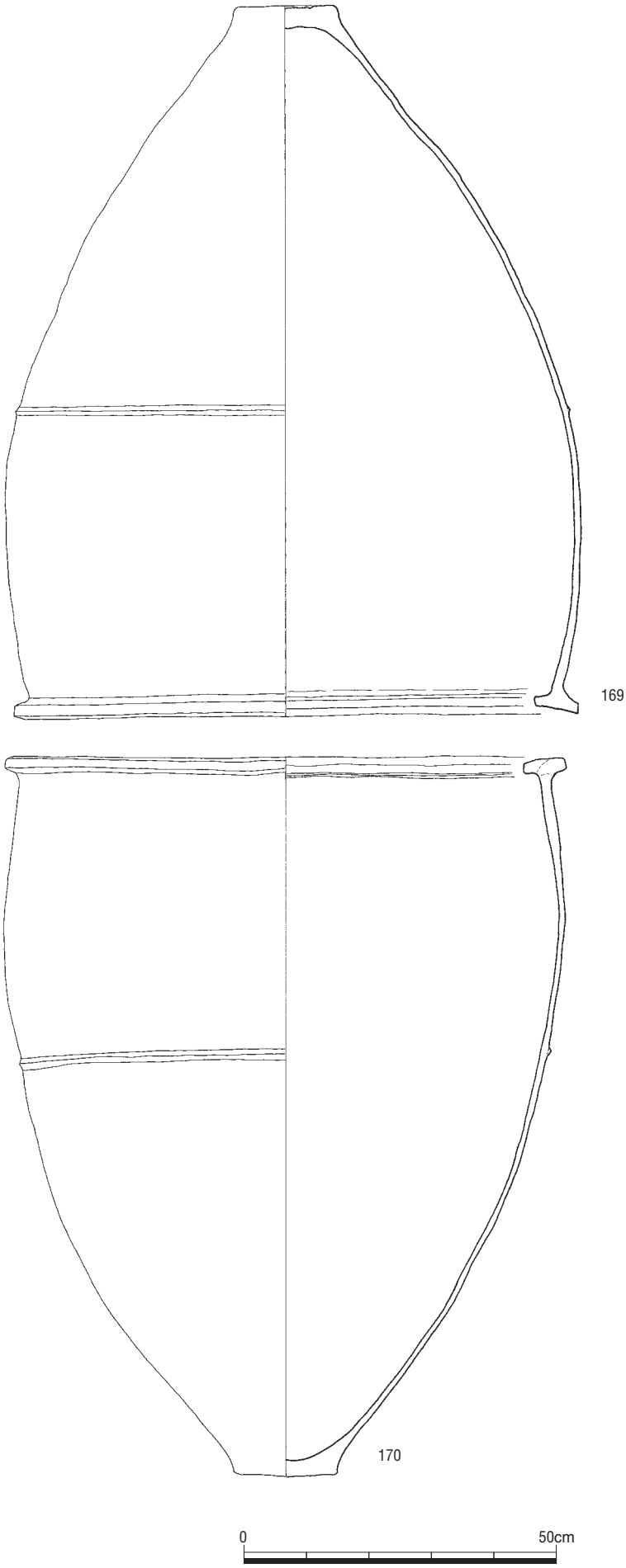


Fig. 46　ST107甕棺実測図（1/10）

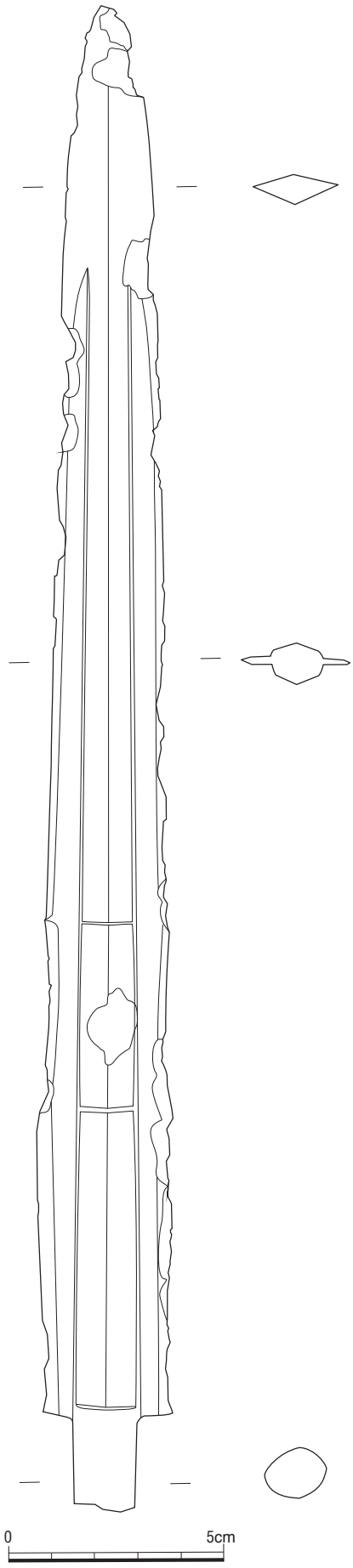


Fig. 47　ST107出土銅剣実測図（2/3）

Ph. 6　ST107出土銅剣

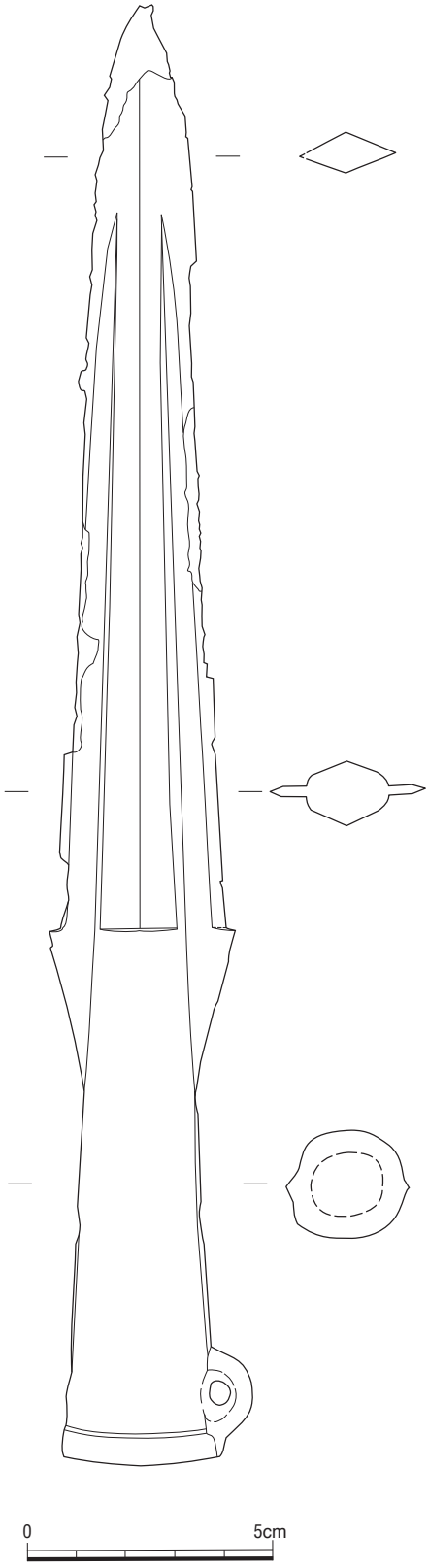


Fig. 48　ST107出土銅矛実測図（2/3）

Ph. 7　ST107出土銅矛

残す有機物が付着していた。

上甕169　口径89.5cm、底径16.5cm、器高113.9cm

上甕と下甕の大きさはほぼ同じである。口縁部はＴ字状に内外に延び、両方の端部は面をなす。上面は内側へ低く傾斜する。底部は厚さ33mmの平底である。胴部下半部には幅11～13cmの粘土帯の継目がみられる。

下甕170　口径89.2cm、底径16.2cm、器高114.9cm

口縁部は上甕同様に短く内外面に張り出す。その内外の端部両方に面をつくることも同様である。上面は内側に低く傾斜する。厚さ26mmの外面がわずかに凸レンズ状となった平底である。

銅剣

現存長34.8cm、現状での鋒長5.8cm、茎長2.0cm、最大幅は刳方下端で3.0cmを測る。翼部の幅が図上、左側が狭くなった非対称形となっている。刃部と脊部鎬は元部まで及ぶ。刳方上下端の刃部の形状は１ヶ所のみ残り、脊部節帯は段状となっている。茎部から巻いた絹糸の形状を残す有機物が検出された。（カラーPh.11）未分析のため、改めて公表したい。

銅矛

現存の全長29.6cm、鋒長4.0cm、刃部長18.8cm、関部最大幅3.5cm、関部下端までの袋部長7.6cm、袋部の中空部分は下端から約14.0cmまで及ぶ。関部は吉田分類のｘタイプである。刃部と脊鎬の角度は同一面上である。袋部の甲張りの削り残しが稜線状に残る。

竪穴住居跡

SC71

１区調査区の南西際で方形の竪穴が検出された。竪穴住居跡の可能性があるが、形状、時期は不明。

（２）１区古墳時代の遺構と遺物

顕孝寺１号墳

１区から周溝が検出され前方後円墳の形状が明らかとなった。埋葬施設の石室は調査区外の財務省所有地内に位置しているが、北側の民有地との境界付近で崖落ちし、半壊している。

ａ．墳丘盛土

墳丘盛土は後円部の西端に位置したSX52とその周辺のみで検出され、他は削平され、表土下で地山面が露呈している。

SX52（Fig.50、カラーPh.19）

墳丘盛土下で検出された楕円形に近いプランの掘り込みである。略南北に5.8m以上、東西は後円部中央へ広がり調査区外となるため不明である。深さ10～20cmの掘削が認められ、下底に炭と焼土広がる。

ｂ．墳丘土層（Fig.51）

調査区外周壁面の土層観察から、SX52には最下底に分布した焼土、炭層の上にややグライ化して粘性が強い灰褐色粘質土が堆積する。その上層から墳丘の細かい土層が積み上げられている。この墳丘盛土は黒色土と地山の明黄褐色土が互層となり、砕けた黒色土は縞状に続く。互層は墳丘周縁に沿うとみられる２ヶ所で高まりを見せ、周堤状になっている可能性がある。この周堤間は地山の明黄褐色土で充填されている。

ｃ．周溝（Fig.49、50）

中世以降の造成により墳丘は上記の後円部に一部が残っているのみである。古墳周溝は前方部南側

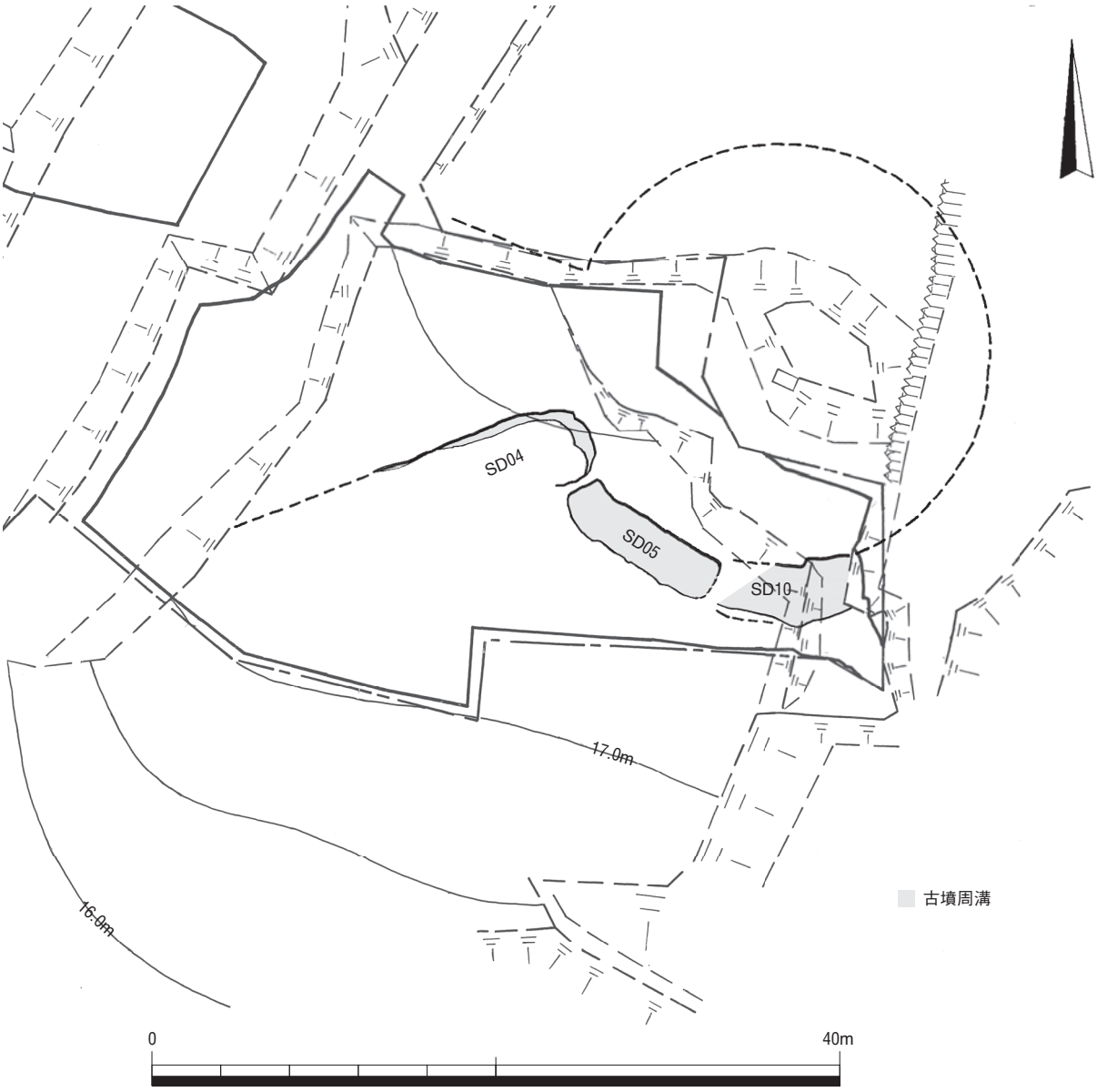


Fig. 49　顕孝寺1号墳周溝実測図（1/400）

の側縁の一部（SD04）と後円部の約1/4周（SD05、10）が検出された。復元した周溝を含めない後円部径は24.4m、周溝を含めると30.0m程度となる。前方部の周溝SD04は貯蔵穴と切り合ったくびれ部で外側（南側）の立ち上がりが検出され、幅4.5mが確認された。後円部の周溝SD05との間は幅40～70cmの陸橋状となっていたが底面の起伏の可能性がある。SD04の前方部端への延長は内側（墳丘側）ではくびれ部から側縁長12.5mまで検出できたが、外側ではくびれ部のみで延長は消滅している。従って、前方部長は現状では不明である。くびれ部の墳丘側に立ち上がった上端の標高は17.46m、周溝の下底の標高は16.56m、その比高差は0.9mを測る。前方部延長が消滅した位置の標高は16.76mを測り、くびれ部より前方部端側へ20cm高くなっている。

後円部の周溝SD05、10は貯蔵穴、甕棺と切り合い、その形状が判り難くなっている。形状が比較的明瞭なSD05は幅2.8m、深さ92cmを測る。埋土内からは拳～人頭大の礫が散在的に出土した。量は少なく、部分的な列石が崩落した程度である。くびれ部のSD04と後円部のSD10との間で下底が立ち

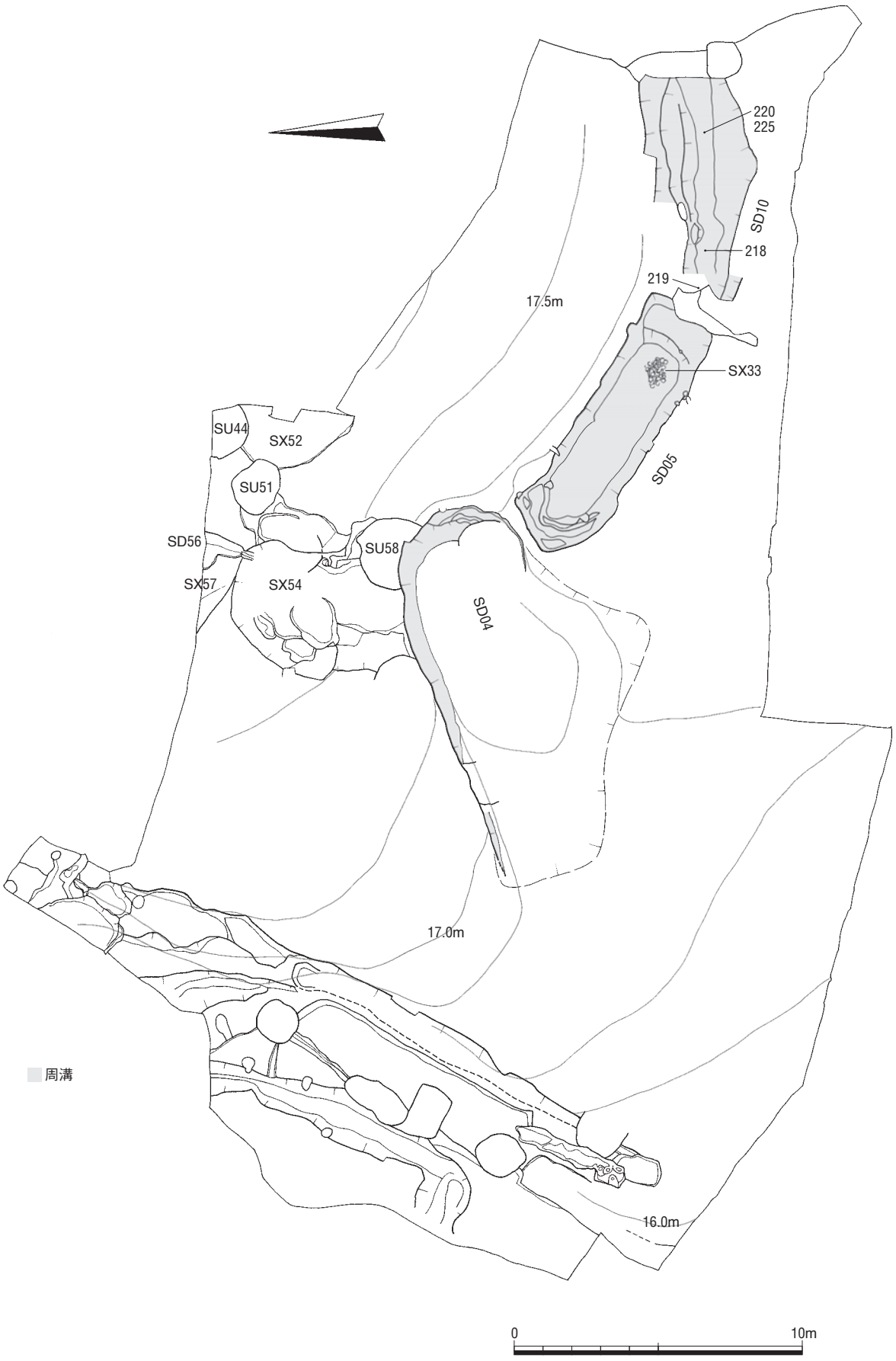
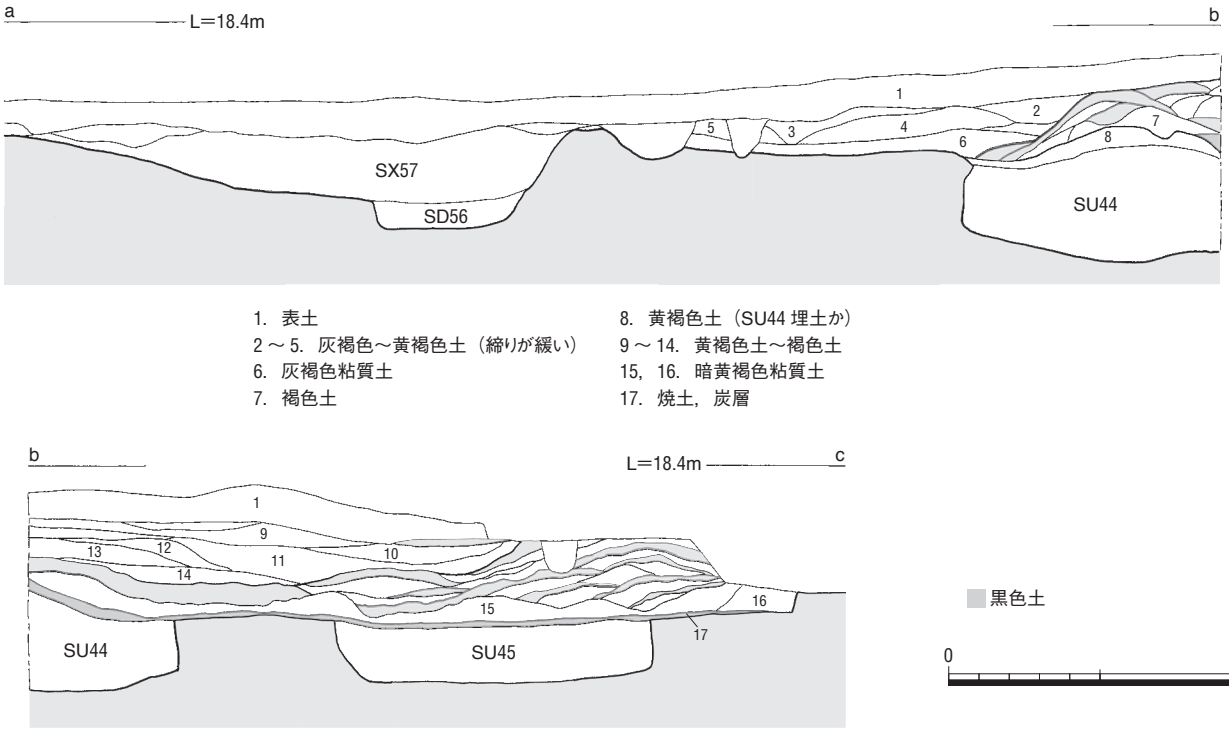
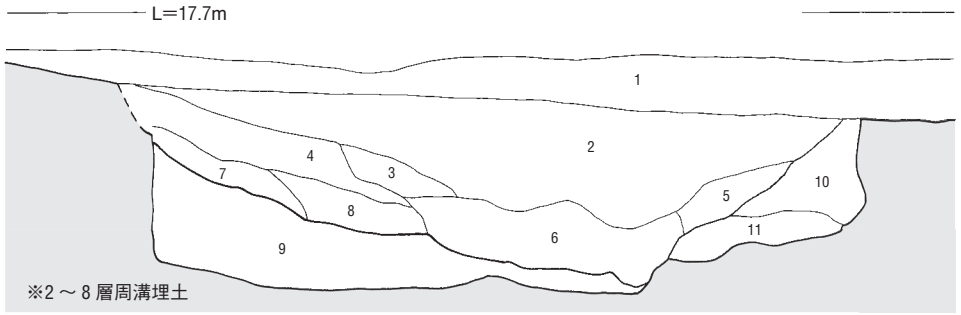


Fig. 50　顕孝寺1号墳遺構配置図（1/200）



1. 表土
2～5. 灰褐色～黄褐色土（締りが緩い）
6. 灰褐色粘質土
7. 褐色土
8. 黄褐色土（SU44 埋土か）
9～14. 黄褐色土～褐色土
15, 16. 暗黄褐色粘質土
17. 焼土, 炭層

Fig. 51　顕孝寺1号墳墳丘土層断面図（1/50）



1. 表土
2. 暗灰褐色土
3～5. 褐色土混り暗灰褐色土
6. 暗灰黄色粘質土
7. 8 明黄褐色土（暗灰褐色土を含む）
9. 明灰黄色土（SU41 埋土。地山に近似）
10. 黒褐色土混り褐色土（ST60 埋土）
11. 明黄灰色土（ST60 埋土）

Fig. 52　顕孝寺1号墳周溝土層断面図（1/40）

上がり、途切れている。SD05の下底レベルは16.26mを測り、SD10とほぼ変わらない。Fig.52のSD10の土層断面から幅3.7m以上、深さ90cm以上の規模で、形状は外側の立ち上がりが急であるのに対し、墳丘側は緩やかで盛土とみられる７、８層が流入している。

ｄ．周溝出土土器

SX33（Fig.53、カラーPh.20）

周溝SD05の基底面で検出された供献土器群である。位置は石室が未調査であるが、墓道の延長になる可能性がある。土圧によって破損している程度で土器群の乱れは小さく、置かれた位置を保っている。土器群は辺長60×93cmの菱形となった範囲に限られる。その長軸方向が周溝の延長方向にほぼ一致している。供献された土器は須恵器坏身が11個体、須恵器坏蓋８個体以上、須恵器高坏２個体、

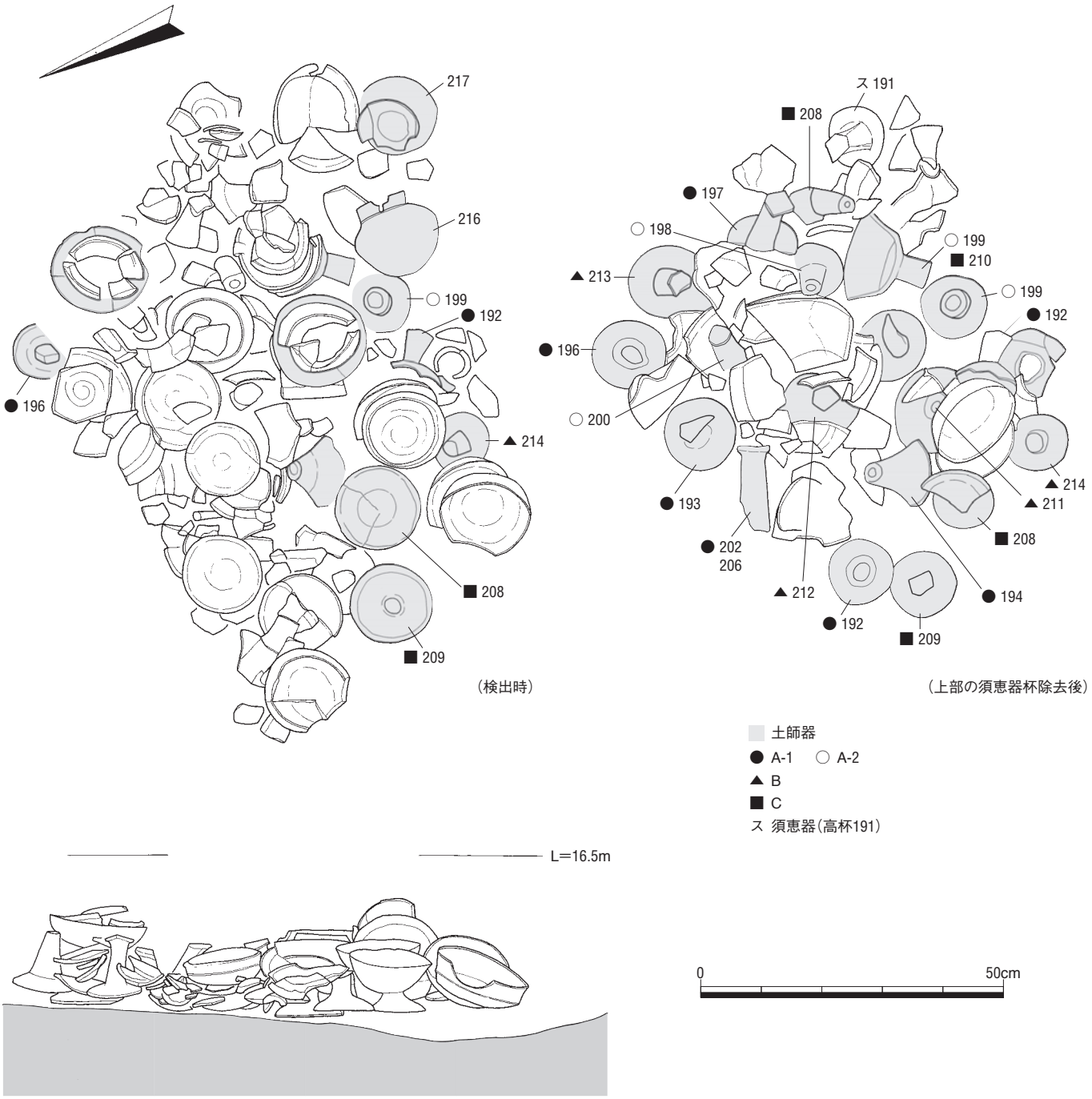


Fig. 53　周溝内祭祀遺構SX33実測図（1/10）

土師器坏１個体、土師器高坏が23個体以上、土師器坩が２個体である。その配列は土師器高坏を長辺の方向に合わせて５脚を３列、３脚以上を１列に並べている。その土師器高坏の坏部には須恵器の坏身、坏蓋が重ねられていた。須恵器坏身は正位、坏蓋は逆位にして内底をみせる。逆位の坏蓋173の上には坏身183が重なっていた。南側の頂部付近には土師器高坏の列から外れて土師器坩216、217の２個体と須恵器高坏191を配置していた。

（出土土器）

須恵器坏

坏蓋　すべての口縁端部に稜を有す。体部と天井部との境にも稜を有すが、形骸化し沈線状に近くなる。その中でも178は大型で口縁端部が内弯し、天井部端の稜が段状となるなど古相を示している。

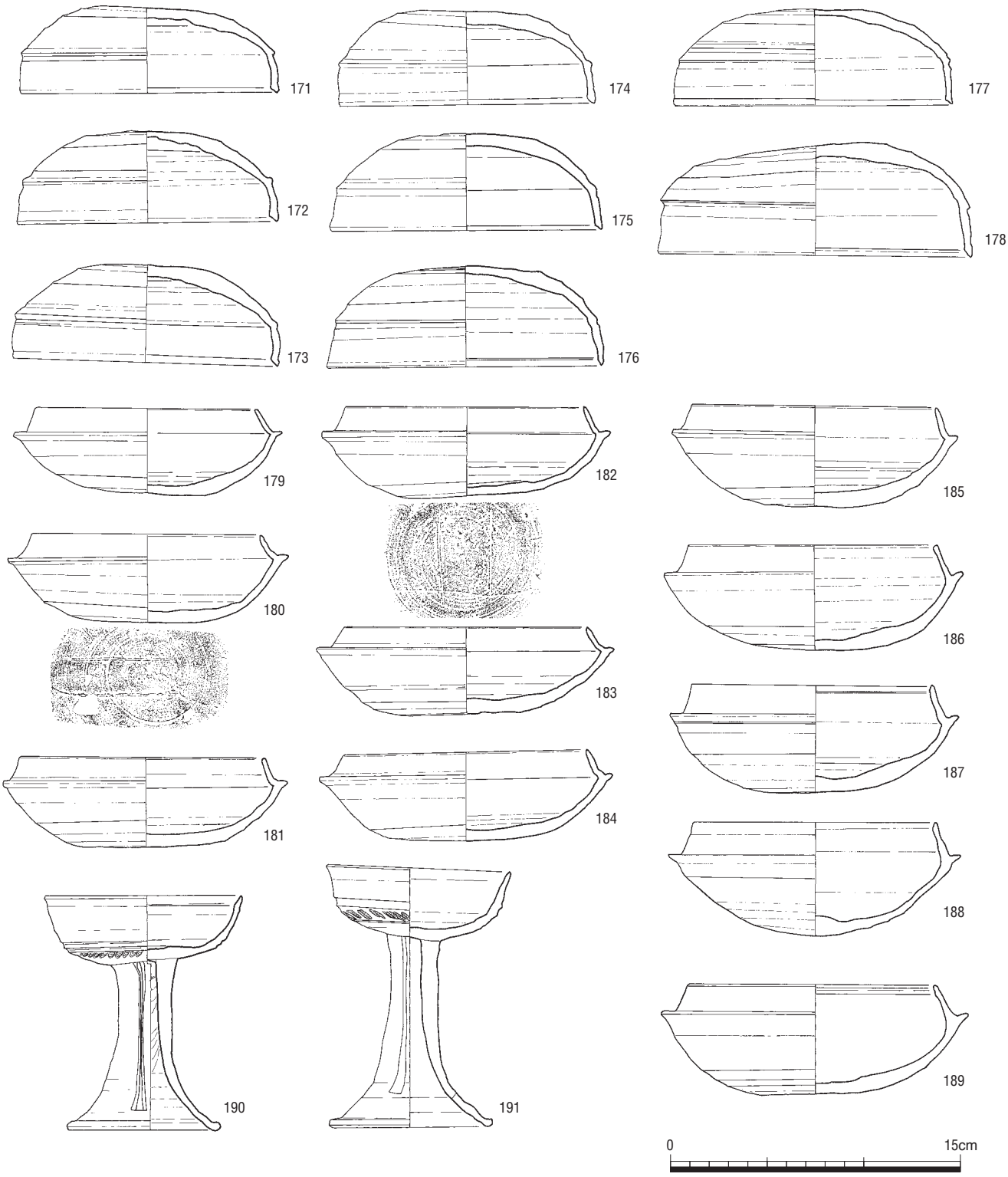


Fig. 54　SX33出土土器（須恵器坏、高坏）実測図（1/3）

坏身　返りの端部の形態から以下の2類に分けられる。A.返りが細く、口唇部を丸く収める。受部径14.0～15.6cm（181～186）B.返りの端部に稜を有す。受部径15.2～16.0cm（187～189）

須恵器高坏　いずれも長脚1段透かしである。沈線や稜で画した底部端に190は櫛歯波状文、191は櫛歯列点文を装飾している。

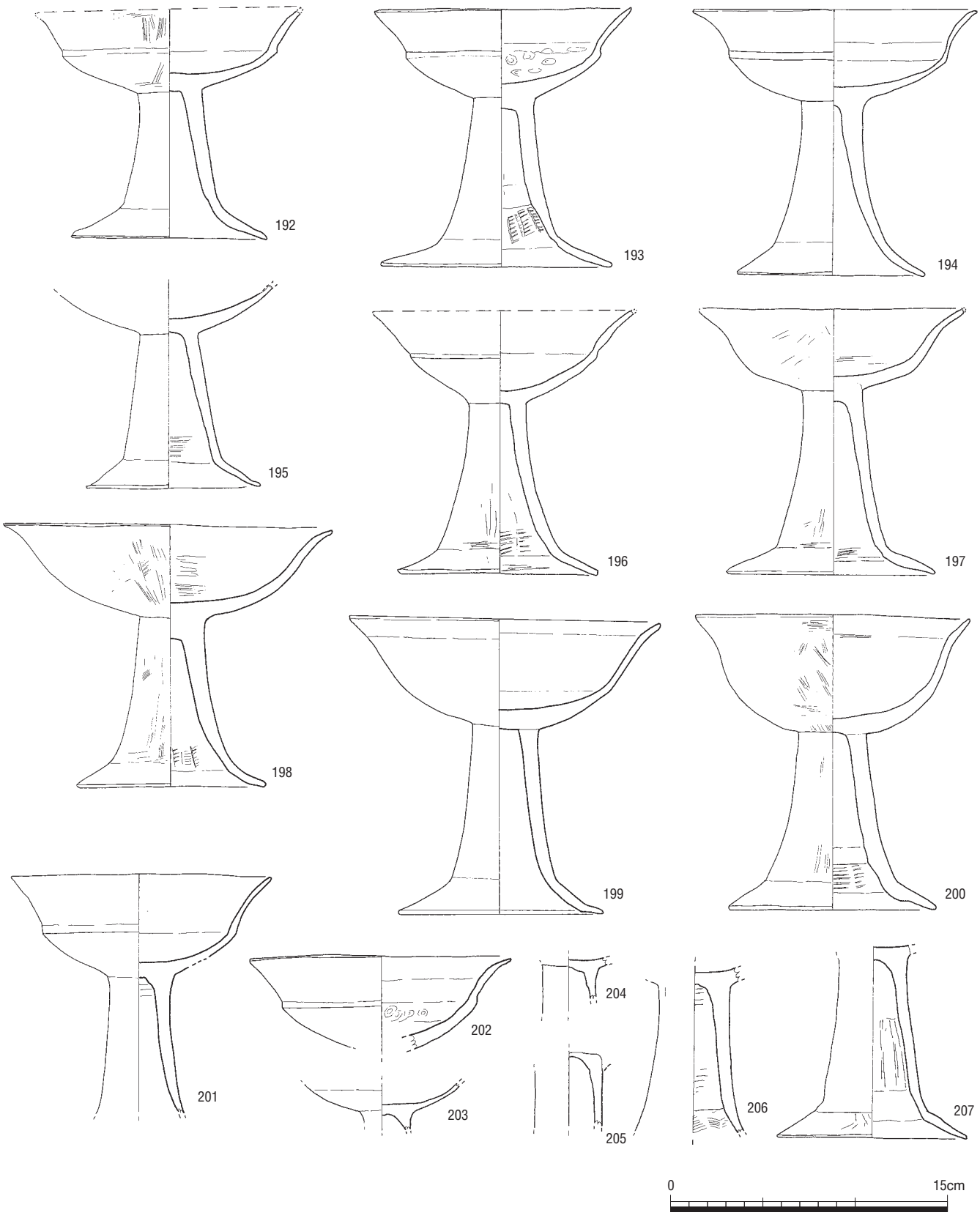


Fig. 55　SX33出土土器（土師器高坏）実測図（1/3）

土師器高坏

遺存状態の良い部分から赤色顔料が坏部内面から外面にかけて塗布され、磨研されていたものとみられる。形態から以下の５分類が可能である。この形態と配置の規則性は見出し難いが、同じタイプ

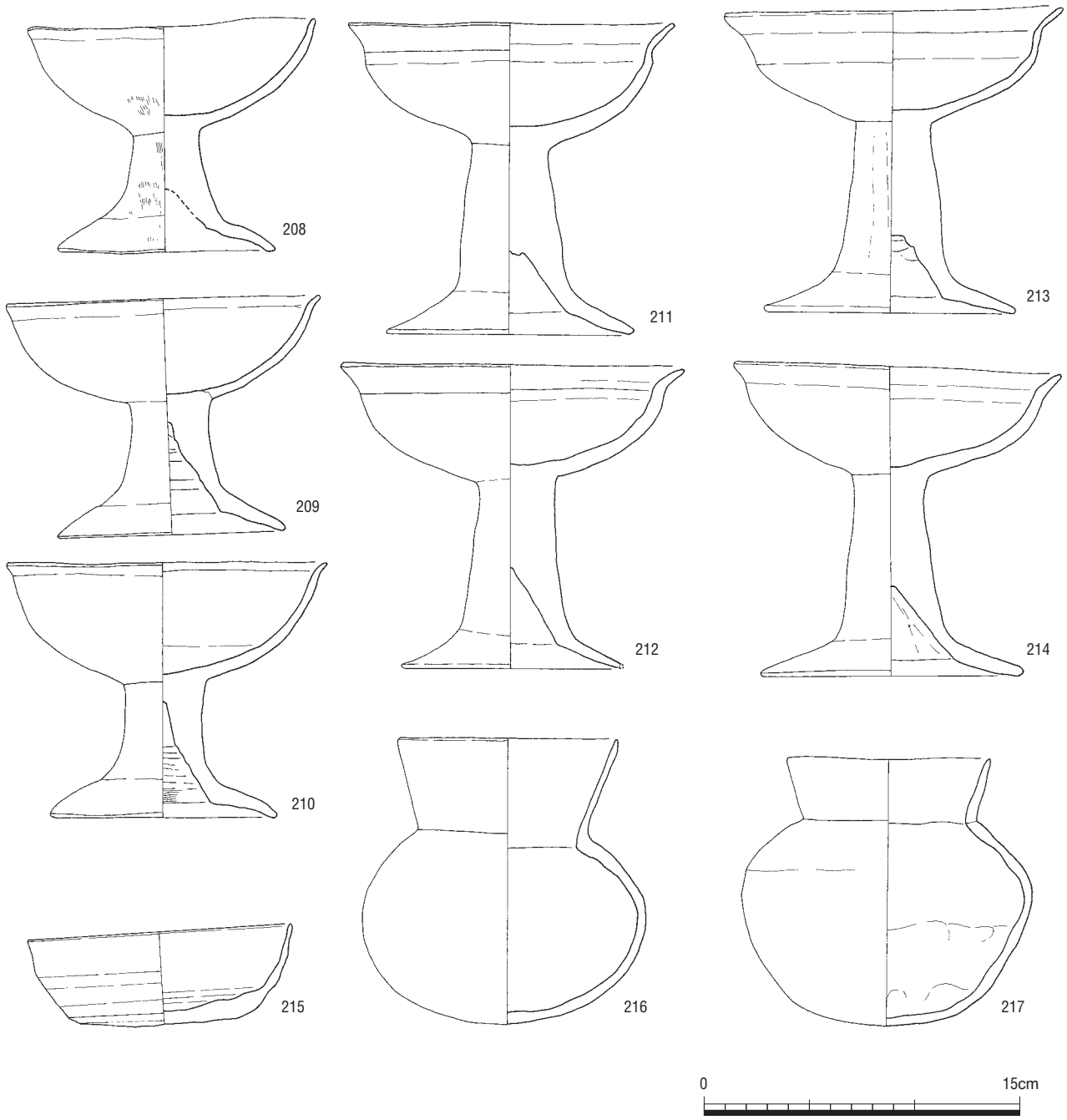


Fig. 56　SX33出土土器（土師器高坏、坏、坩）実測図（1/3）

の２個体程度が近接している傾向はみられる。

高坏Ａ類（完形10個体＋破片５個体）

脚部は中空をなし、坏部、脚部の器壁は薄い。

高坏Ａ-1（192～197、201、202）口縁部が体部中位で屈曲し、外弯しながら延びる。

高坏Ａ-2（198～200）口縁部が短く外反する。

高坏Ｂ類（211～214）

脚部は中実で坏部の口縁端部が短く外反する。脚部内面の裾部は強く屈曲して外へ広がる。

高坏Ｃ類（208～210）

短脚で坏部との接合部は器壁が厚く中実に近い。脚部裾の屈曲は高坏Ｂと近似する。口縁部は短く外反する。

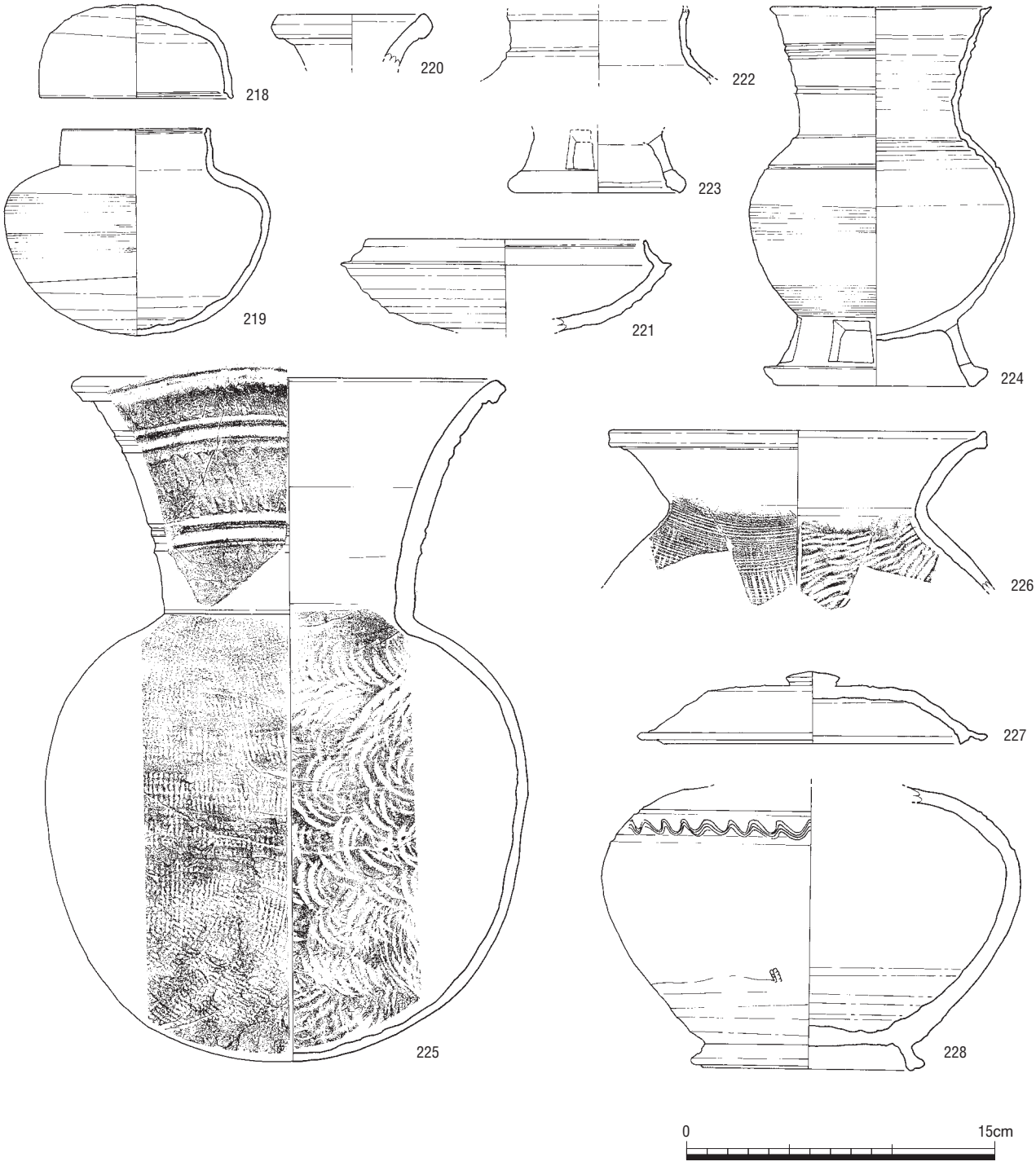


Fig. 57　周溝内出土土器実測図（1/3）

（その他の周溝内出土土器）（Fig.57）

出土地点はFig.50に示した。新羅土器224は小壷蓋218付近から出土している。218、219が完形である他は破損、欠損している。218～224はSD10内の近接した位置から出土した。219の短頸小壷の頸部は直口に近く、口縁端部は段を有す。220は提瓶の口縁部と思われる。新羅土器の台付長頸壷223と221、222は別個体である。223は全体の2/3程度が遺存する。口径10.7cm、器高18.5cm、胴部最大径12.8cmを測る。器胎は2、3mm程度で薄い。口縁端部が小さく外反し、その上面は弯曲している。頸部の上位に2条､下位に1条の沈線が巡る。胴部には頸部との境に小さな断面三角形の突帯が巡る。

胴部上位に１条の沈線が巡り、下半にはカキ目が施されている。外底部には指頭痕が残る。台部には６ヶ所に復元できる方形透かしが１段巡る。裾は断面三角形状に跳ね上がった形状を呈し、222と異なる。外面には灰釉が掛り、胎土は褐色を呈し泥質である。221、226はSD05から出土し、221は時期が降る。225は広口壷の器形を呈し、胴部内面に同心円文のアテ具痕が残る。頸部から体部上位にかけて灰釉が掛る。227、228も築造時期から降るがSD10の東端崖落ち付近から出土した。

SX54（Fig.58）

時期不明の不整形土坑である。前方部と後円部の境に位置する。貯蔵穴を切り、埋土は地山が砕けた白色粘土粒が混じる明黄褐色土からなる。内部に集石が検出されたが、配列はみられない。

Fig. 58　SX54実測図（1/60）

（３）１区の中世遺構と遺物

１区で検出された中世遺構は土坑（木棺）墓２基、柱穴である。土坑（木棺）墓は丘陵の頂部付近、柱穴は南側の緩斜面で検出された。南西部には地山の上にグライ化した粘質土が５cm程度堆積し、柱穴はこの上面から掘りこまれている。瓦片500（Fig.59）が前方部周溝SD04埋土から出土している。

SK16（Fig.59）

１区北東部の頂部付近で検出された。一帯、深く削平され、畑の畝状の攪乱が入る。主軸をN-5°-Wの南北に向け、北辺端から副葬品が出土した。墓坑の掘方は主軸長114cm、短軸長82cm、深さは北端で26cmを測る。北東隅から下底より約３cm浮いて土師皿がほぼ正置の状態で３個体出土した。２枚は重なり１枚は並置していた。北辺中央からは下底より６cm浮いて、青磁椀１個体と土師皿１枚が出土した。青磁椀は斜めに落下した状態で、割れて分散していた。棺上に置かれたものか。

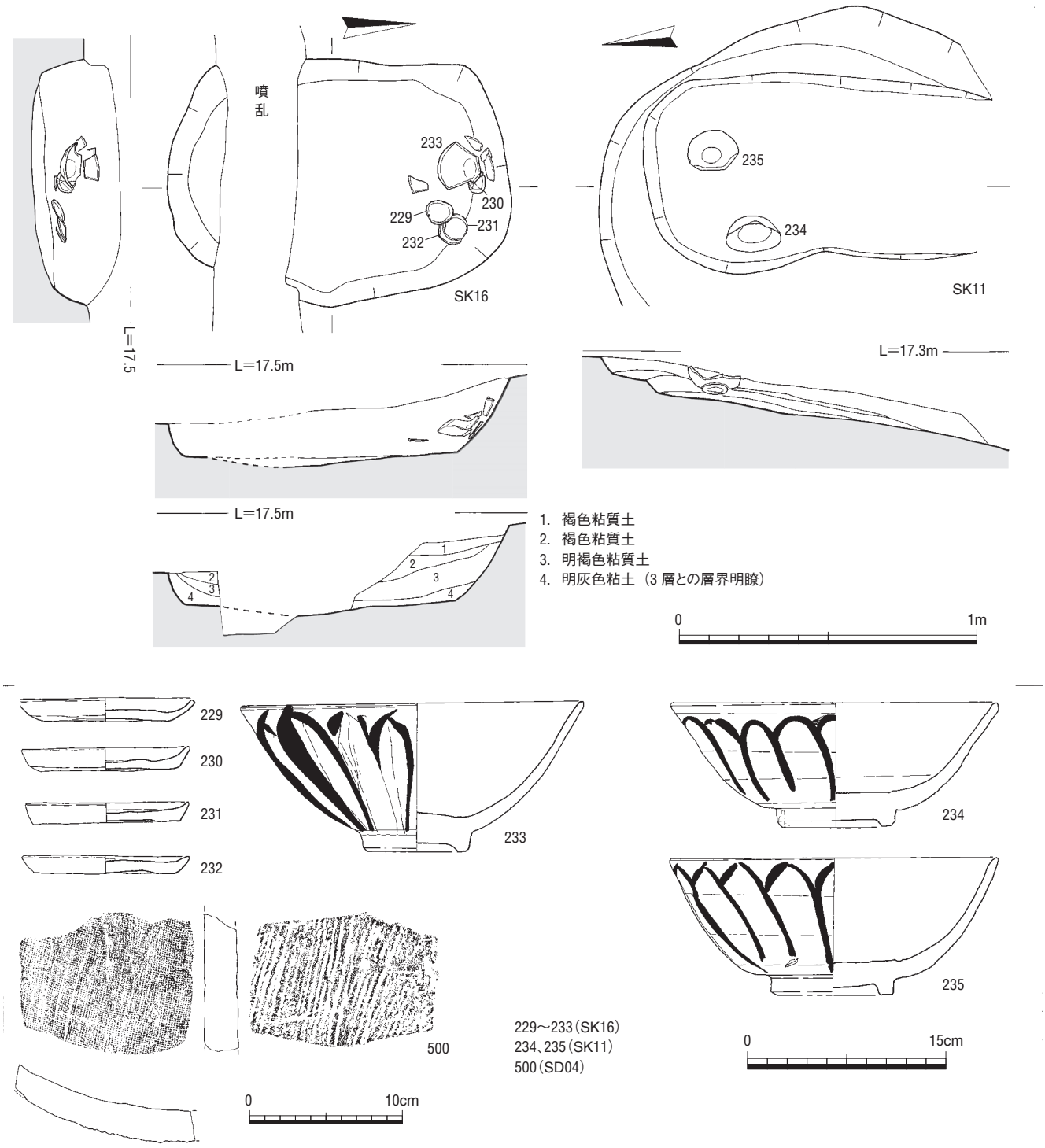
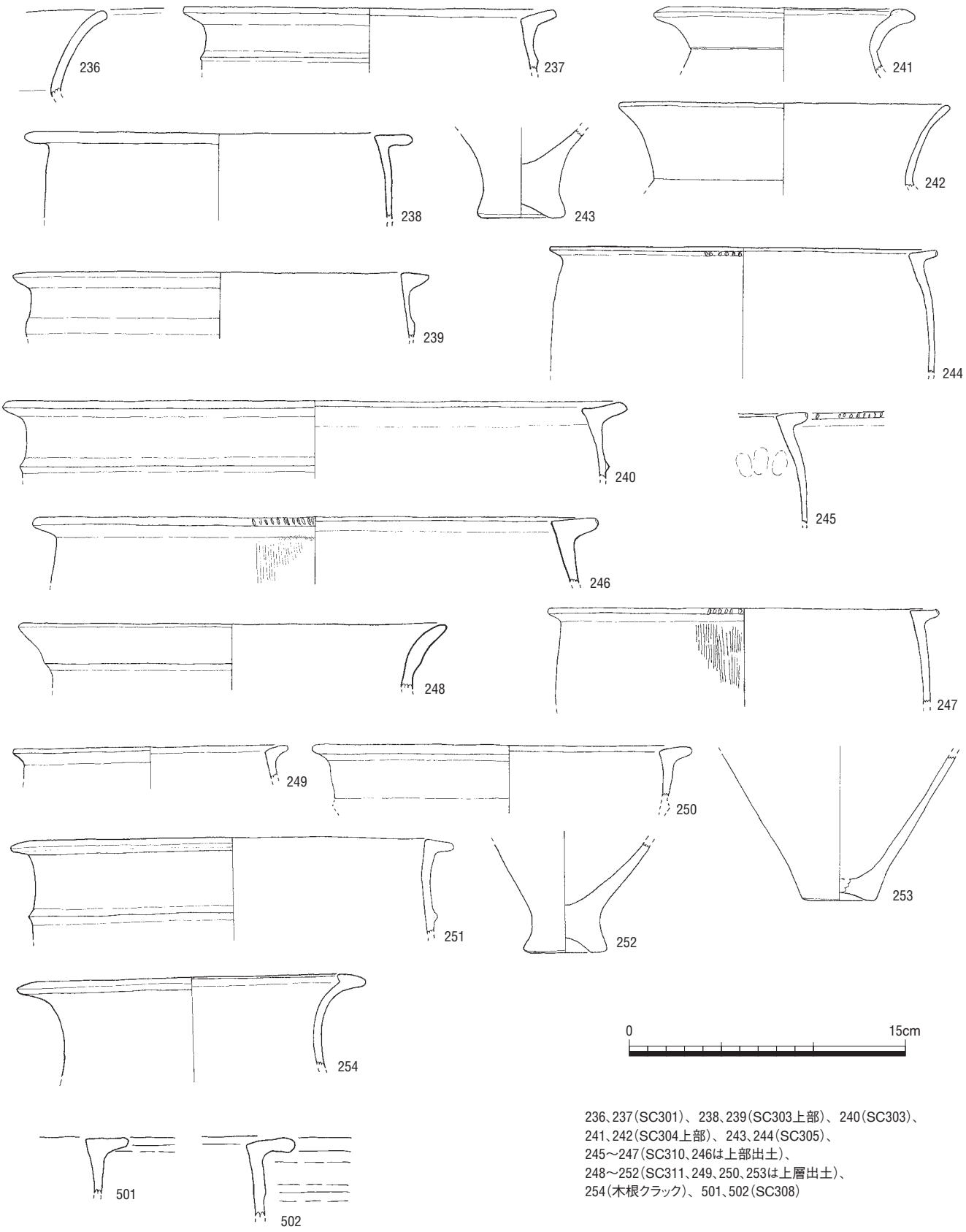


Fig. 59　SK16、11実測図（1/20）・出土遺物実測図（500は1/4、他は1/3）

SK11（Fig.59）

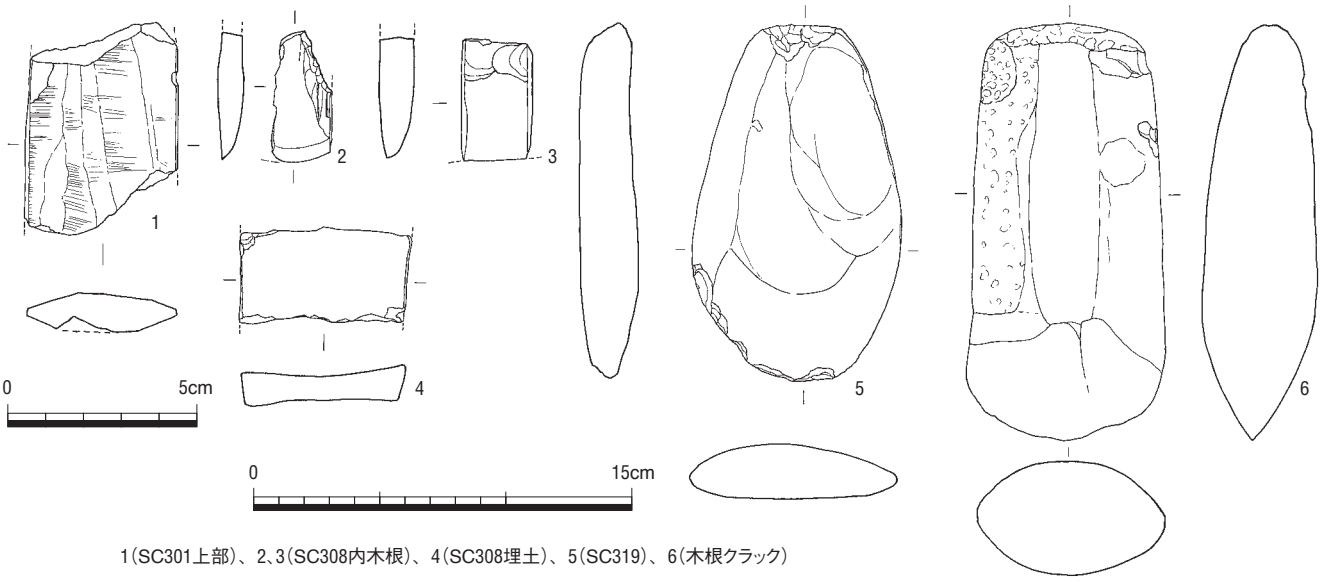
1区北東際の頂部近くで検出された。削平により南側が消滅している。主軸はN-4°-Wに向けSK16同様に南北に向く。北辺側に副葬品の青磁椀2個体が置かれていた。遺存していた主軸長は108cm、短軸長65cm、深さは約5cmを測る。副葬品はほぼ床面直上から出土し、青磁椀235は正置に近いが削平により上部が欠損したものとみられる。青磁椀234は完形であるが、横位に近い状態で出土した。

Fig. 60　第2区遺構配置図（1/100）



236、237（SC301）、238、239（SC303上部）、240（SC303）、
241、242（SC304上部）、243、244（SC305）、
245～247（SC310、246は上部出土）、
248～252（SC311、249、250、253は上層出土）、
254（木根クラック）、501、502（SC308）

Fig. 61　第2区遺構出土土器実測図（1/3）



1(SC301上部)、2、3(SC308内木根)、4(SC308埋土)、5(SC319)、6(木根クラック)

Fig. 62　第2区遺構出土石器実測図（1～4は1/2・5、6は1/3）

（5）2区の遺構と遺物（Fig.60～62）

2区は試掘から開発区域の北西部に設定した調査区である。(Fig.4) 3区と同様に南西方向へ派生する尾根線の側縁部に位置し、北西方向に急傾斜している。(Fig.3) 現状では標高10.25～7.9mまでの斜面が階段状に造成され、斜面最下の標高7.9mを地形変換点として、そこから平坦面が北側へ広がる。その北端には水路が谷筋に沿って略東西方向に設置されている。

遺構は標高8.5～10.0mの斜面から検出され、南側の緩斜面と北側の平坦面では消滅している。主な遺構に弥生中期の竪穴住居跡が3軒、貯蔵穴2基が検出された。出土遺物の時期は弥生前期末～中期中頃が多く、古墳時代後期、古代が少量みられる。

SC301、303、305　いずれも一部の上端検出にとどまる。弥生前期末から須玖Ⅰ式までが出土する。

SC308　最も形状が残る円形竪穴住居跡である。径5.3m以上、深さは残りが良い南側で60cmを測る。北側を方形竪穴住居跡SC309に切られていた。埋土中出土遺物から須玖Ⅰ式期とみられる。

SC311　東際で検出された円形竪穴住居跡である。木根、流水による地割れが著しい。出土遺物から城ノ越式以降である。

SU310　貯蔵穴とみられ、近接して貯蔵穴SU306が検出された。楕円形プランを呈し、深さは南側で約60cmを測る。中期初頭の城ノ越式甕245、247が出土した。

2区出土石器（Fig.62）

1は破損した磨製石剣である。灰色を呈し軟質の泥岩に近い石材である。側面は面をなす。2、3は粘板岩製の片刃石斧である。4は板状の砂岩製砥石である。5は砂岩製の磨石である。端部に敲打痕が残る。6は玄武岩製の石斧である。

（6）３区の遺構と遺物

２区の東側に設定した。（Fig.4）２区同様に階段状に造成された斜面から弥生前期末～中期前半の竪穴住居跡が検出された。２区と異なり斜面裾から北側の平坦地にも竪穴住居跡が遺存し、さらに調査区より東側へも分布していたが、未調査となった。

東際では中世の石敷道路とみられるSD500が検出された。

a．弥生時代の遺構と遺物（Fig.63～88）

斜面で検出された竪穴住居跡は階段状に細かく切り合い、概ね下方に従い時期が新しくなる。

SC501、509

３区の最も高所の位置で検出された。方形プランの竪穴住居跡の可能性があるが、床面が平坦ではなく、SC509の床面は階段状となり、他の遺構との切り合いが考えられる。

SC502

南側はSC501、509を切り、北側はSC510・511・522の方形プランとみられる竪穴住居跡と切り合う。当初、円形の上端が東側に張り出していたことから東側約1/3を別の住居跡のSC504としていた。しかし、完掘時点で上端と底面が連続していたことから同じ住居跡と判断した。西側が中世のSD500に切られ、その下部を完掘していないので明確ではないが、上端の最大径は9.5m以上となる。西側の上端から底面を切っているSX508、520、521は木根、流水による地割れの痕跡である。遺存が良好な南側の壁面は斜めに掘りこまれ、壁高60cmを測る。床面は緩やかに北側へ傾斜した平坦面となる。床面から柱穴は検出されなかった。埋土からは多量の土器片が出土した。土器片は大きく、器面も風化が無いことから短期に埋没したものと思われる。

東寄り壁際の床面より14cm浮いた位置から貝層SX580が検出された。（カラーPh.17）長軸長142cm、短軸長約80cmの範囲から２、３cmの厚みで貝殻が検出された。上位からの掘り込みは検出されず、遺物の出土状況も周辺と変化なく連続していた。出土遺物の時期は弥生前期末の板付Ⅱｃ式が主であるが、一部、中期初頭の城ノ越式まで降るものを含む。

SC510・511・522

SC502の北側で検出された。方形の竪穴住居跡の可能性があるが、明確ではない。出土遺物の時期は板付Ⅱｃ期に収まるとみられる。

SC519・523・512

円形竪穴住居跡の可能性があるが、明確ではない。SC512出土遺物は板付Ⅱｃ期に収まる。

SC524・529

底面のレベルが異なることから別の遺構とみられる。遺物の時期はほぼ同じ城ノ越式に収まる。

SC513

斜面から平坦地への地形変換点に位置する。未調査である。出土遺物は城ノ越式～須玖Ⅰ式にかけての時期を含む。

SC514

北側の平坦地で検出された円形竪穴住居跡である。東側は未調査である。出土遺物は須玖Ⅰ式まで降るであろう。

SC515・516

北側平坦地で検出された。円形竪穴住居跡であろう。出土遺物の時期は城ノ越式に収まる。

SX539

SC515内から検出された土坑である。板付Ⅱｃ式の鉢2044が出土した。

Fig. 63　第3区遺構配置図（1/150）

３区竪穴住居跡出土土器

概要

丘陵斜面に構築された３区の竪穴住居跡からはSC502の弥生前期末（板付Ⅱｃ式）に比定される土器片を中心に遺物が多量に出土した。その出土状況は傾向として丘陵斜面の下部にかけて須玖Ⅰ式の中期まで時期が降り、遺物量も少なくなってくる。低地の平坦部になると弥生後期までの遺物がみられるようになる。

丘陵斜面から出土した弥生前期末（板付Ⅱｃ式）～中期前半（須玖Ⅰ式）までの土器片には連続性がみられることから、以下、各器種の型式分類を行い、これに基づき各竪穴住居跡出土遺物を説明する。

SC502出土土器

甕１類（255～277）

胴部の膨らみが小さい如意口縁の甕１類は口径16～33cmにおよそ収まり、甕２類に比べ小さく特に23cm前後に集中する。272～277は胴部の傾きや弯曲の形状から浅鉢形に近い器形と思われる。

口縁端部の刻みは下端に施すか無いものが大半を占め、全面に及び施されたものは少ない。胴部に沈線が施されたものが多いが、無い形態もみられる。突帯を付した264の弯曲した口縁部の形状は甕２類に近い。大型の306～308は口縁の形状からは甕１類に近いが、胴部下半部の形状は不明ながら内外面の調整にミガキが施されていることから壷７類に分類する。

甕２類（278～284、291～296、301～303、309）

口縁部が弯曲し、胴部が膨らんだ甕２類は口径25cm以上が多い。特に突帯が巡るものには口径35cm以上の中、大型が含まれる。大型の309の下半部には内外面にミガキ状の痕跡がみられる。281は胴部に沈線を巡らすが、器壁が厚く、胴部が球形に張り出した新相の形態を呈す。301～303の口縁端部は肥厚して面取りされ、刻みも無く後出的である。291や296の口縁部は弯曲しているが、胴部は球形に近い張り出しを呈し、甕４類に近い。

甕３類（285～290）

甕２類に近いが、口縁部の外反が弱く、直口に近い。胴部の張りは小さい。285や287の胴部外面には横ハケが施されている。

甕４類（297～300、304、305）

口縁部が「く」の字に短く外反した甕４類は口径28～30cmと口径43cm前後の大型に近い器種にみられる。口縁部内外面の屈曲には強い稜線がみられ、胴部は球形に張り出し、口径以上となるものが多い。

甕５類（310）

古式の砲弾形を呈した突帯文系甕の５類はわすかに310の小片にみられる程度である。

甕６類（310、311）

口縁部は端部が丸い断面三角形に近い。その上面は内側に傾いている。口径16cm前後の小型にみられる。

甕７類（315～320）

口縁端部に断面三角形の突帯を貼り付けている。胴部にも断面三角形の突帯を貼り付けたいわゆる「亀の甲式」を含む。口縁部上面が水平のものと、外側に傾斜したものがある。口径が23～43cmまでのものがあり、28cm前後が多い。大型の325は口径56cmを測る。胴部は球形に張り出すものが多いが313、314のように直線的なものも含まれる。320、大型の325は口縁端部が細くならず、突帯には刻

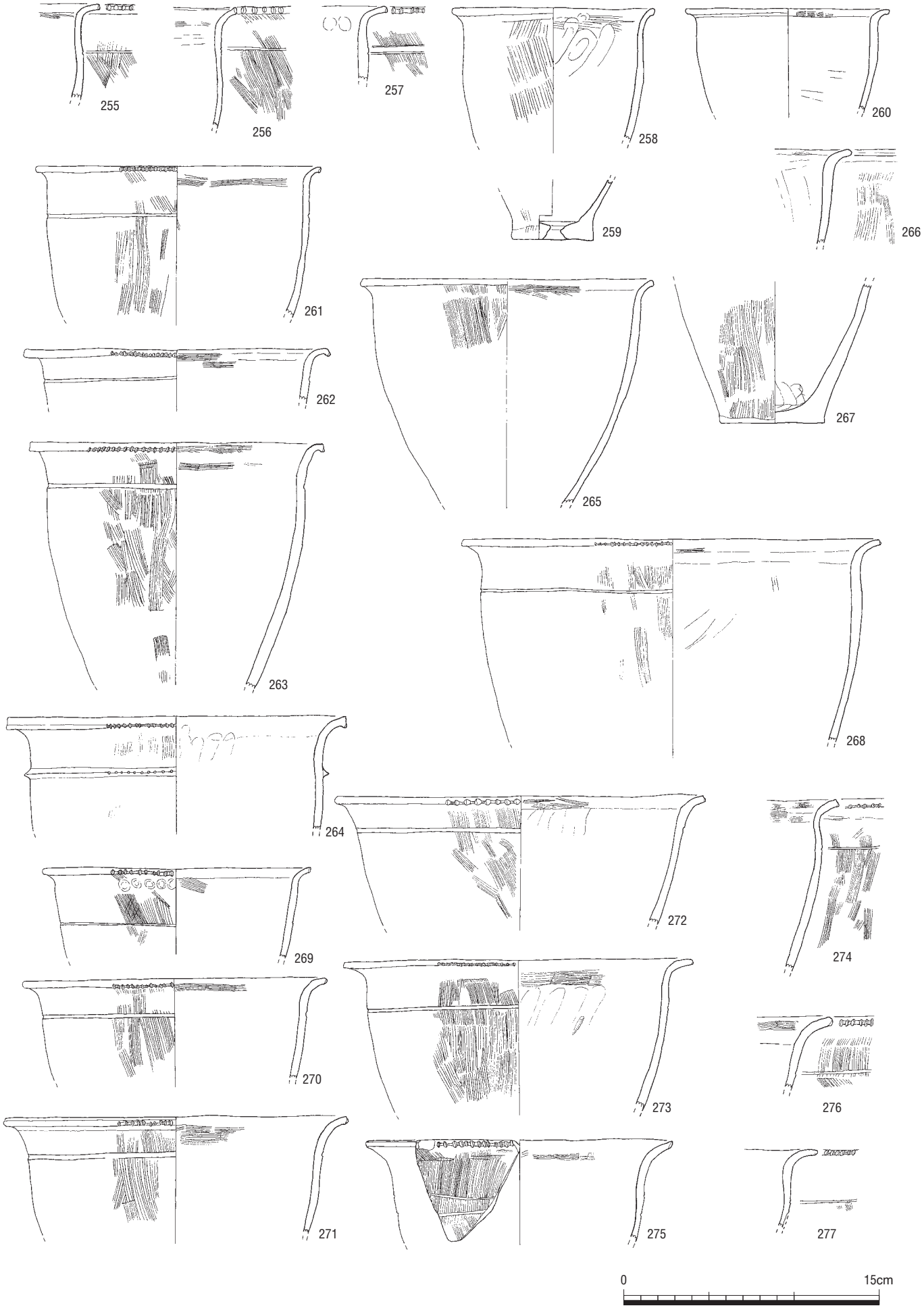


Fig. 64　SC502出土土器実測図1（甕　1/3）

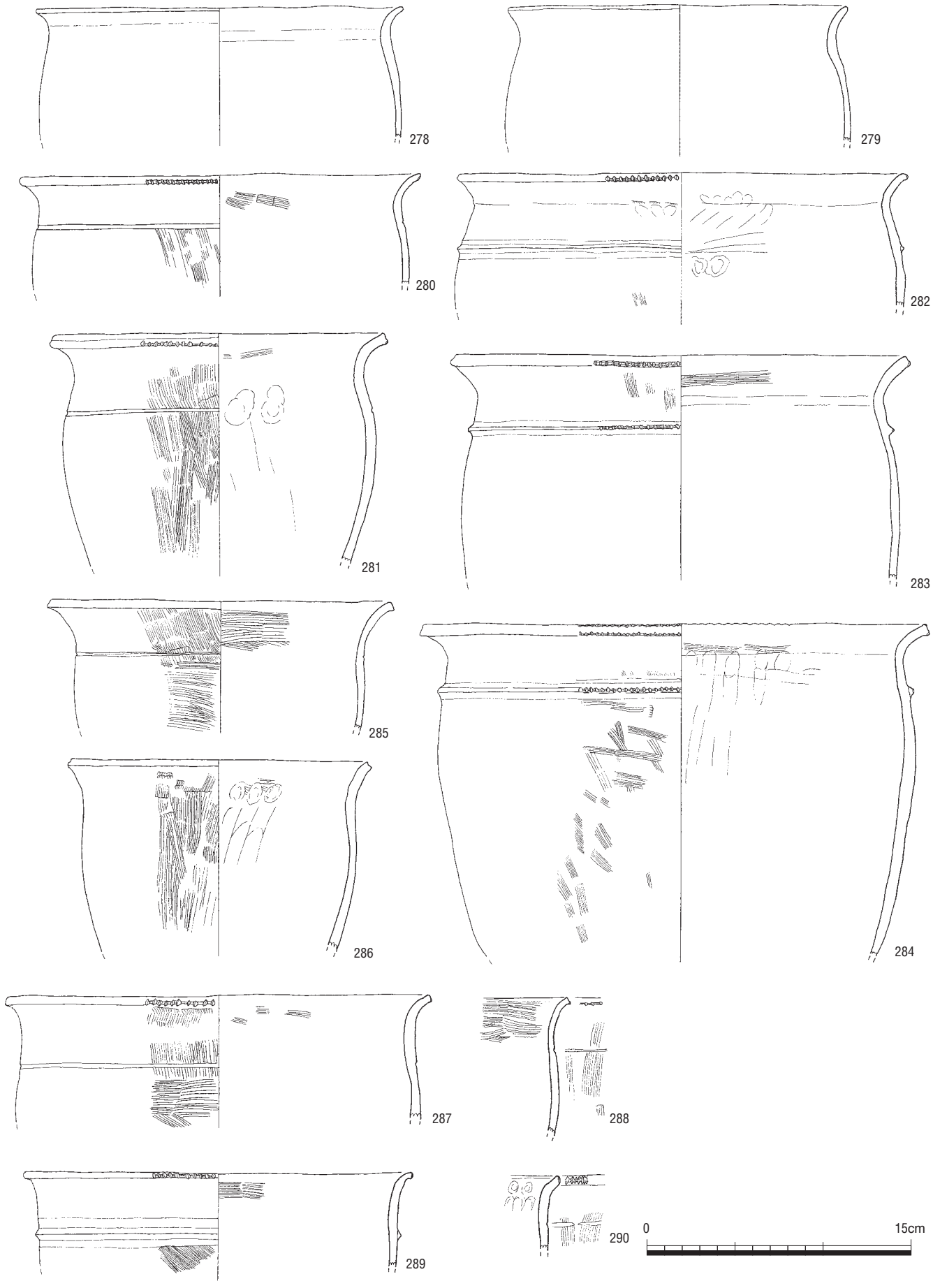


Fig. 65　SC502出土土器実測図2（甕　1/3）

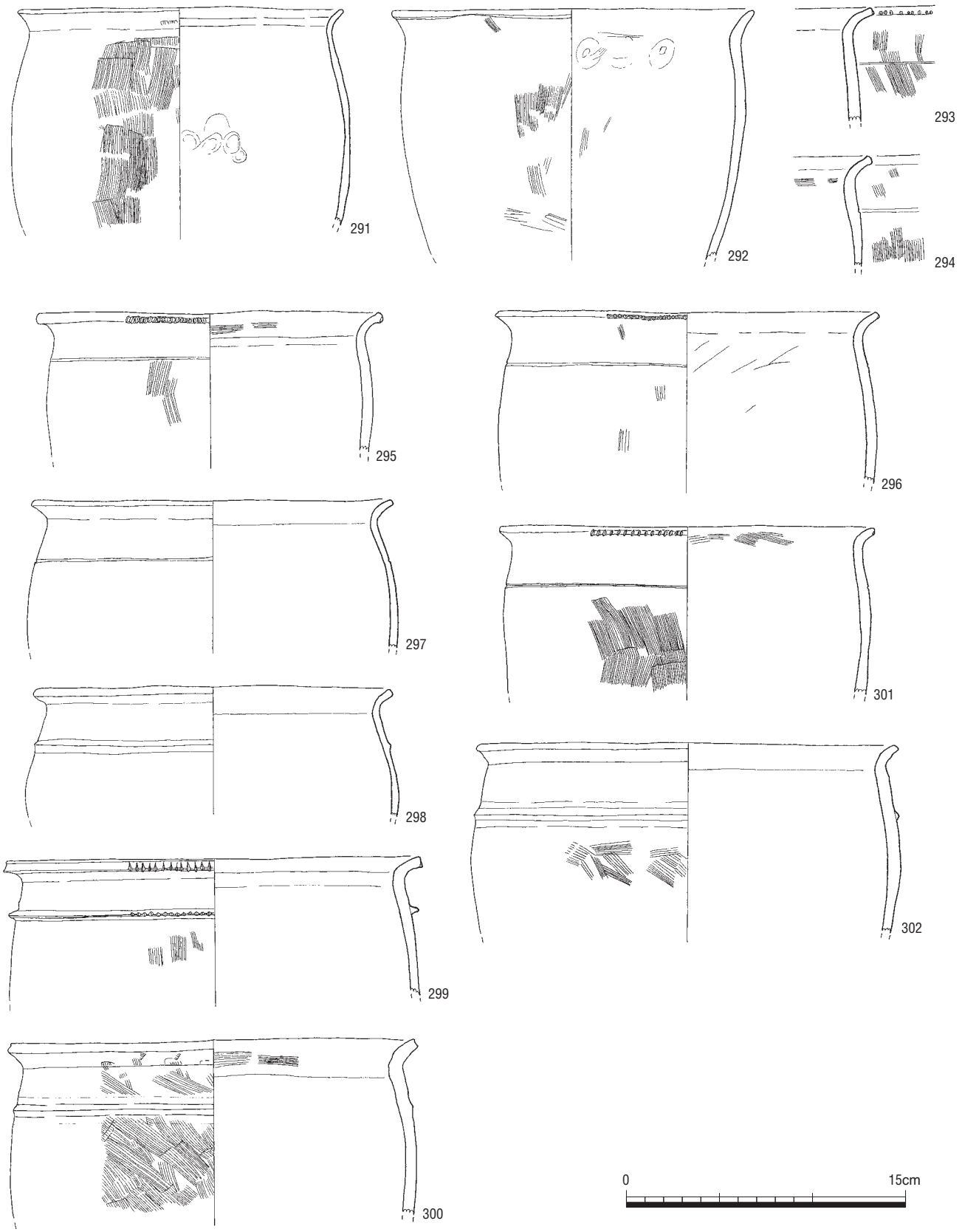


Fig. 66　SC502出土土器実測図3（甕　1/3）

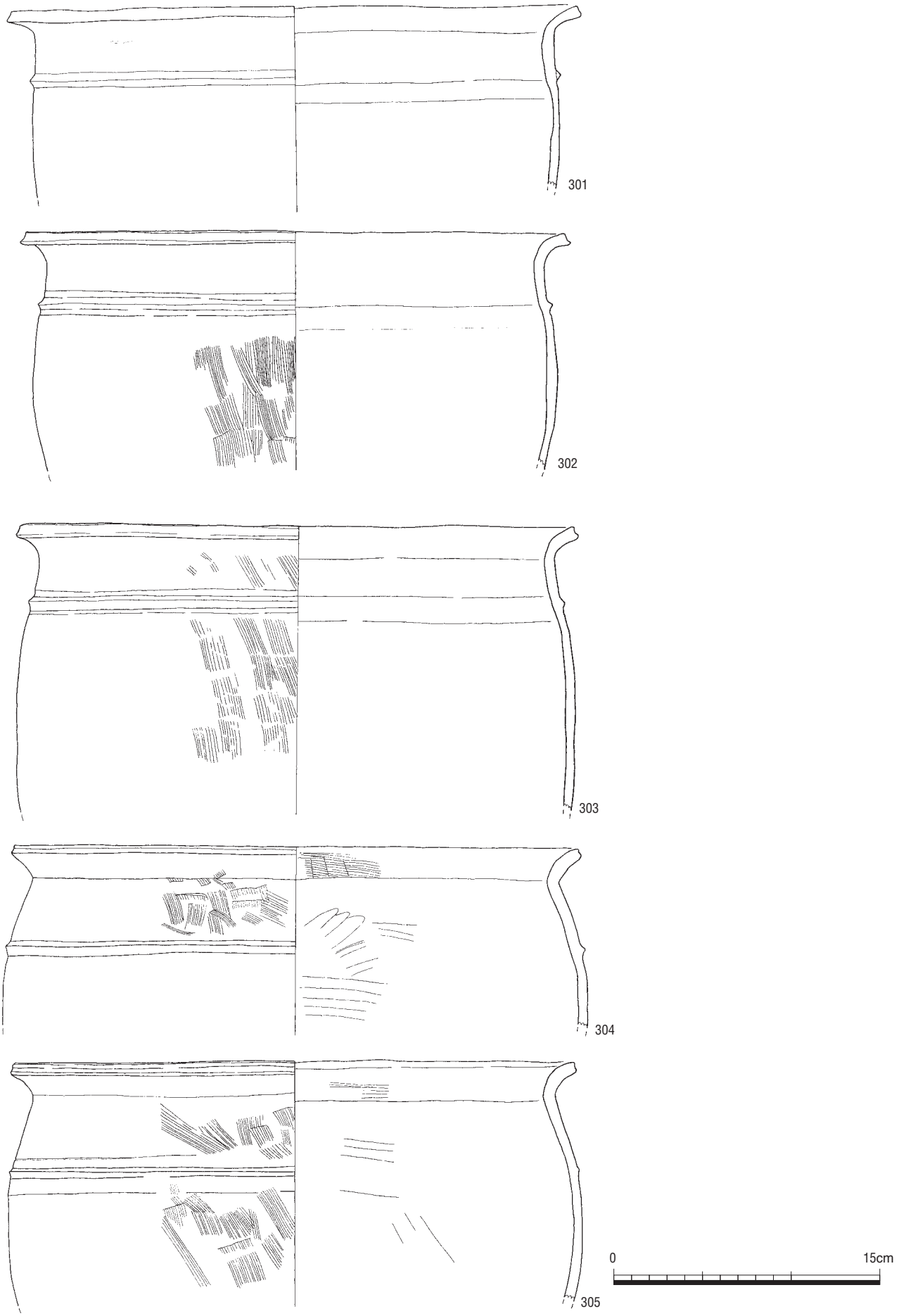


Fig. 67　SC502出土土器実測図4（甕　1/3）

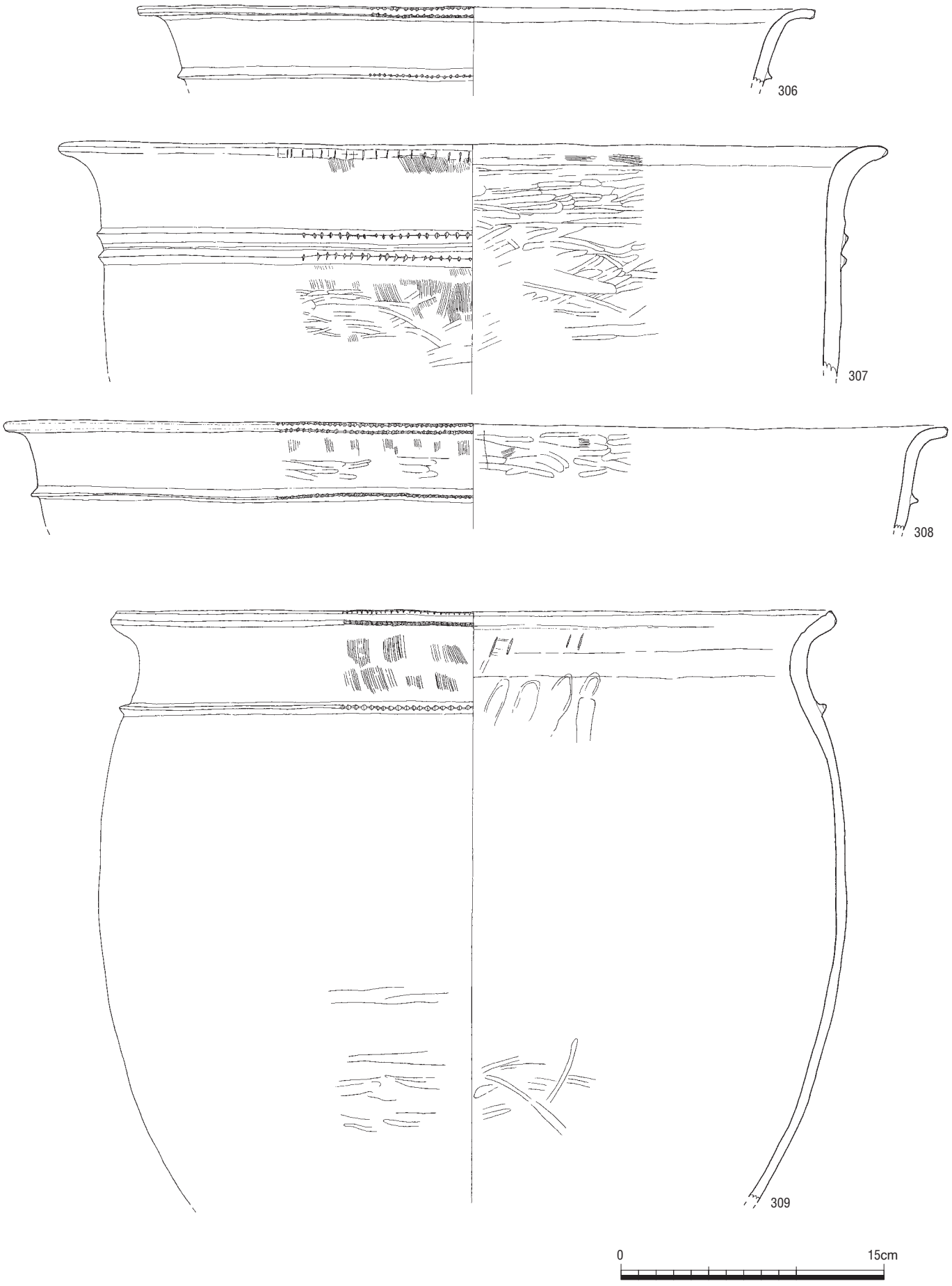


Fig. 68　SC502出土土器実測図5（甕　1/3）

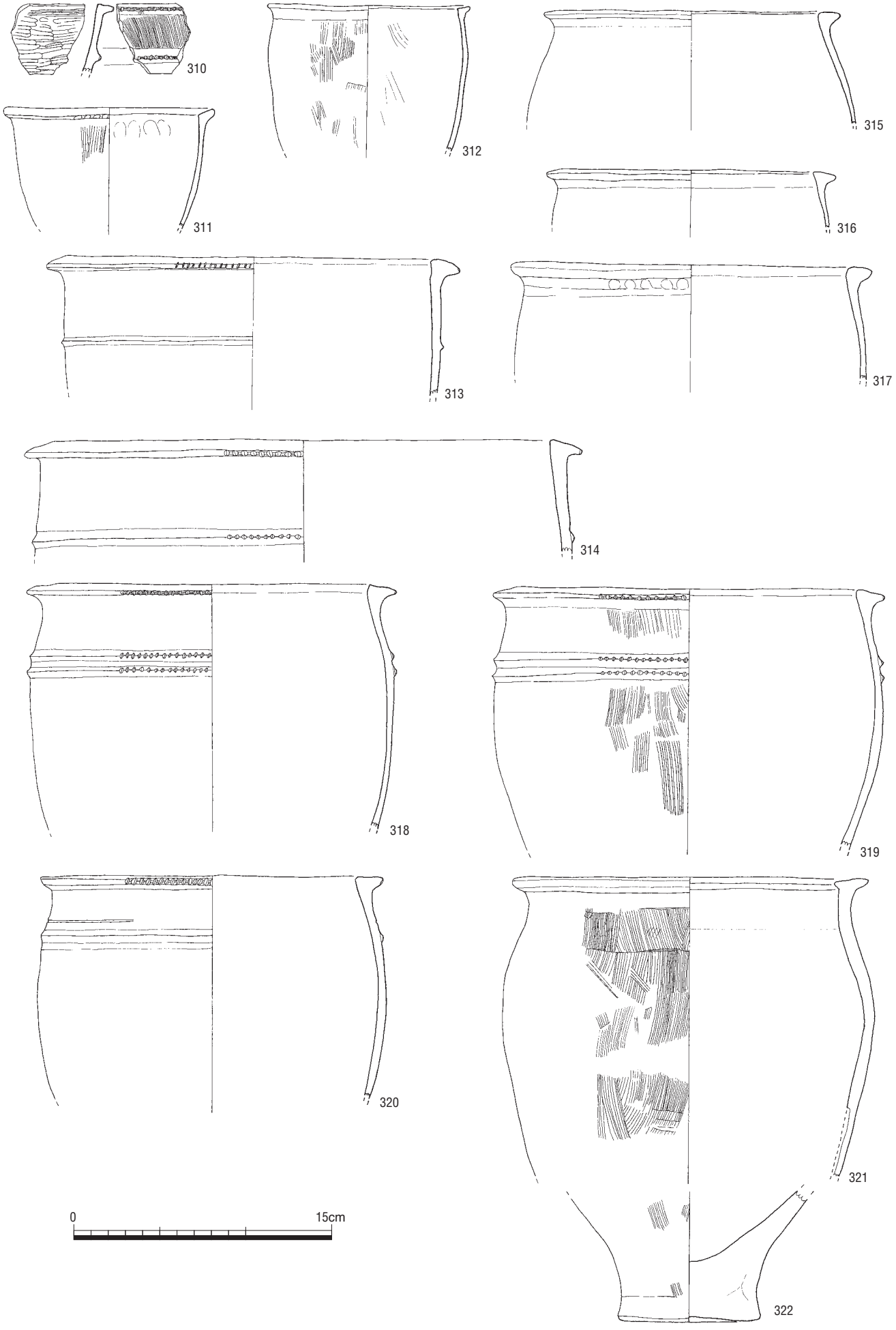


Fig. 69　SC502出土土器実測図6（甕　1/3）

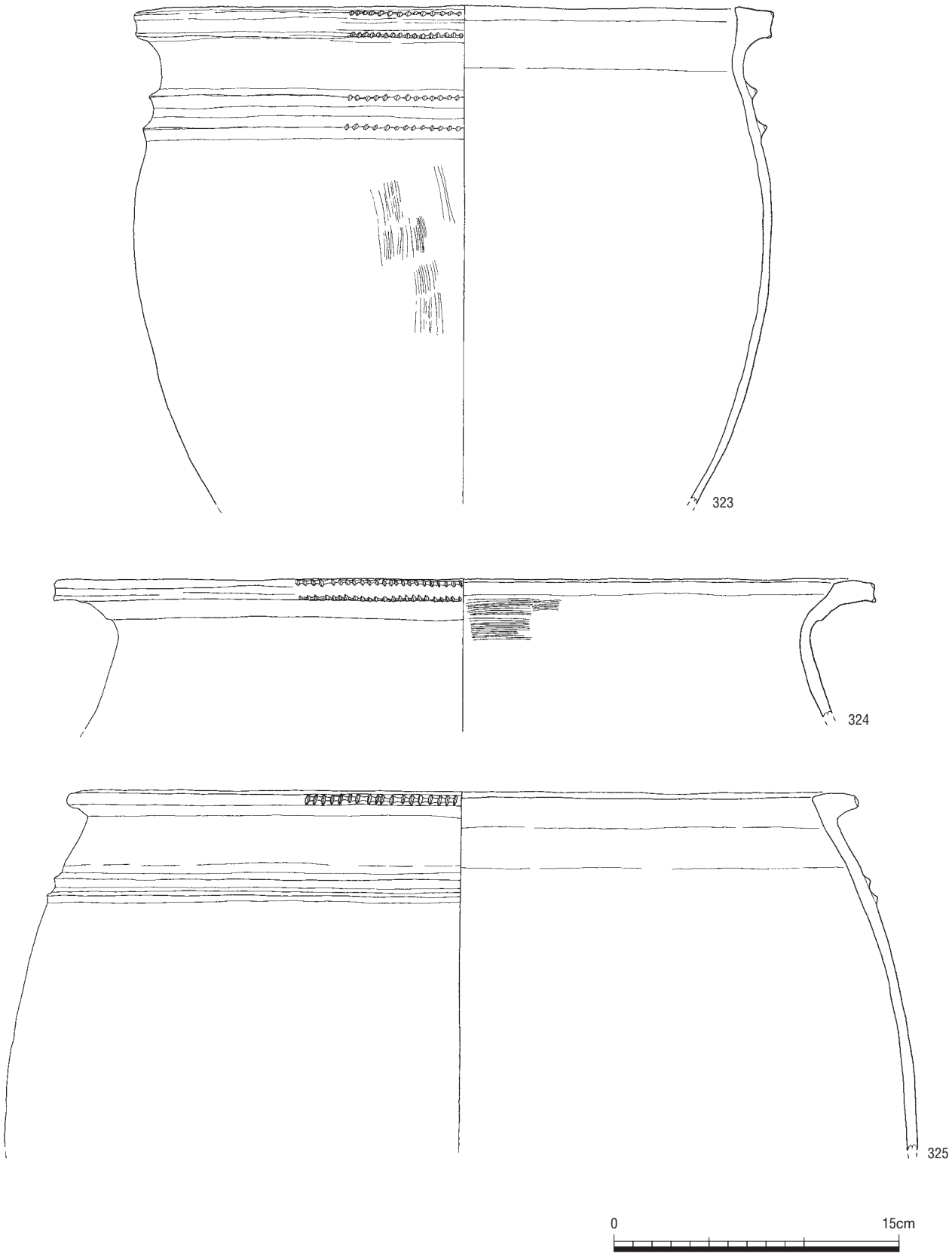


Fig. 70　SC502出土土器実測図7（甕　1/3）

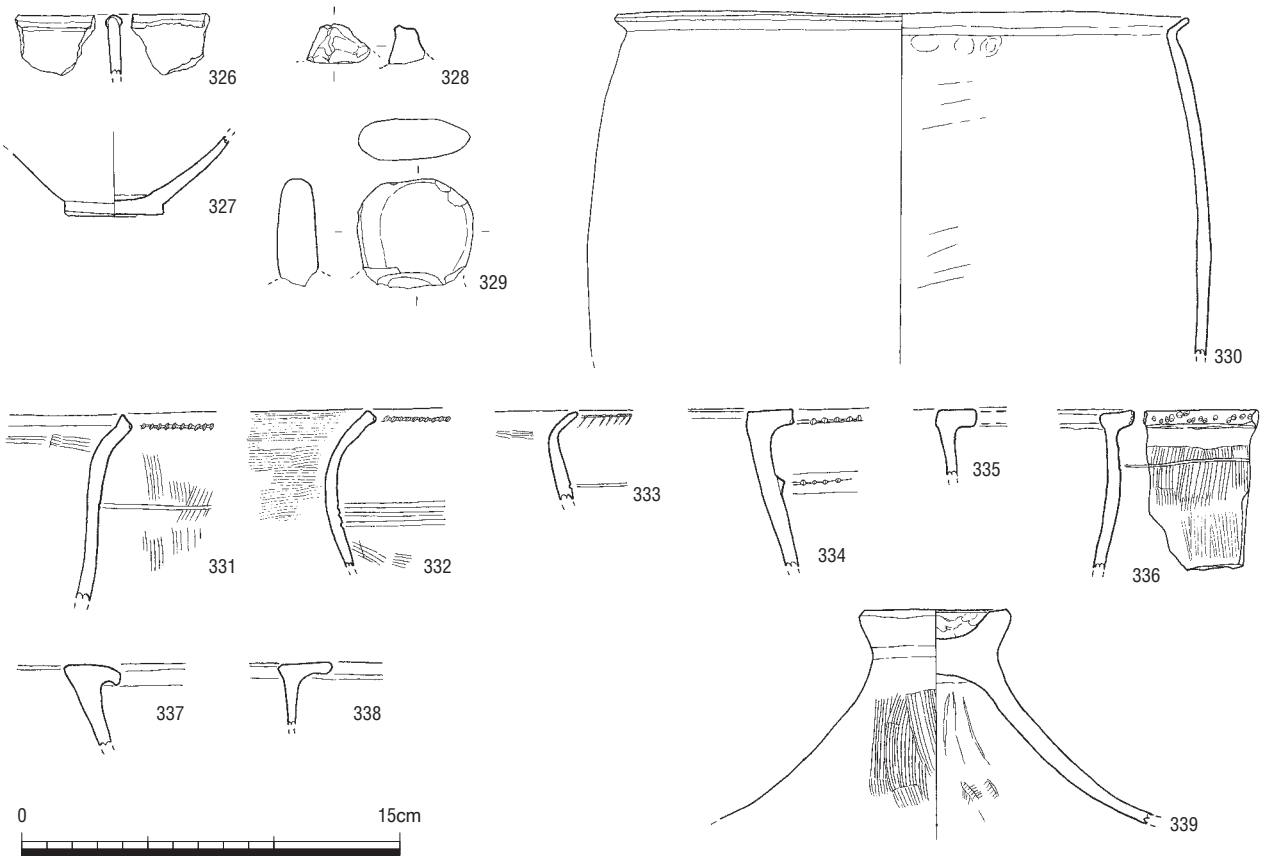


Fig. 71　SC502出土土器実測図8（甕、甕蓋　1/3）

みが施されていないなど後出的である。

甕８類（321）

この型式は321のみである。甕２類に近い外弯した口縁部の内側を嘴状に張り出させている。器壁が一様に厚い。同一個体と思われる厚底はわずかに上げ底となっている。

その他（326～338）

326の口縁端部は粘土を全面に巻き付けた玉縁状とした擬無文土器と思われる。灰白色を呈す。327も無文土器系の底部と思われる。赤褐色を呈し、胎土は緻密である。328、329は取手の可能性がある。328は歪な台形状を呈し、粗いナデ押さえによって成形されている。329は扁平な方形を呈す。黄白色を呈す。330は「く」の字口縁の甕４類に近いが、口縁部が極端に小さく細い。外面はナデ調整を施し、ハケ目はみられない。331、332は外弯が弱い甕３類。332の外面には３条の沈線が施されている。333は「く」の字状に屈曲した甕４類に近い。330と近似し、胴部に１条の沈線を有す。334～338の中期まで降る形態は図示した小片が少量出土したもので、SC502の廃棄後に混入したものとみられる。336の口縁は内側へも張り出し、外面の端部にはランダムな刺突が施されている。337、338は混入とみられ、須玖Ⅰ式まで降る。

甕蓋（339）

器形がわかるのは339の１点のみである。裾が広がり、つまみ部は外側へ張り出す。

壷

甕に比べ、壷の数量は極端に少ない。また、小片が多く器形が不明な点も多い。

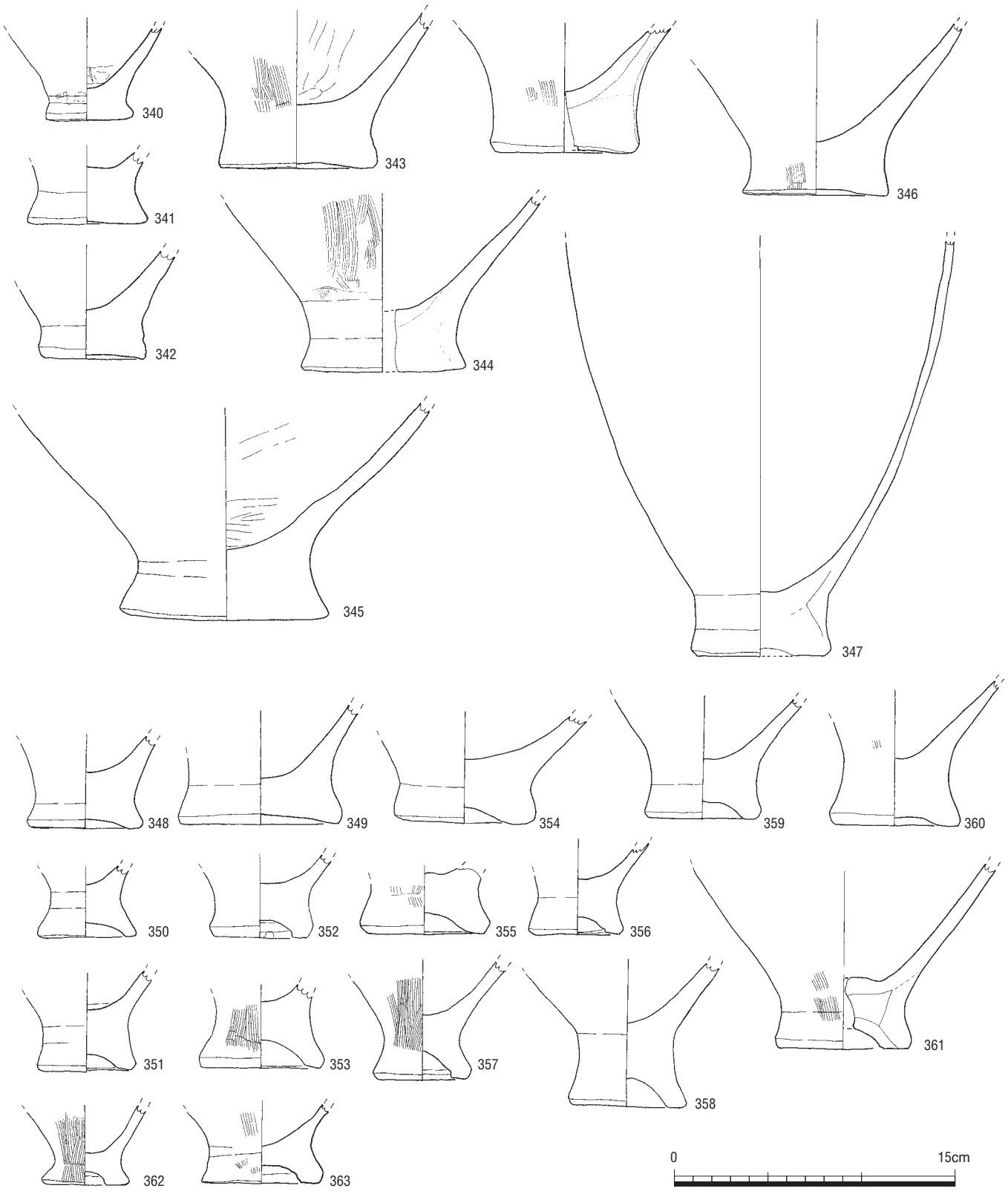


Fig. 72　SC502出土土器実測図9（甕底部　1/3）

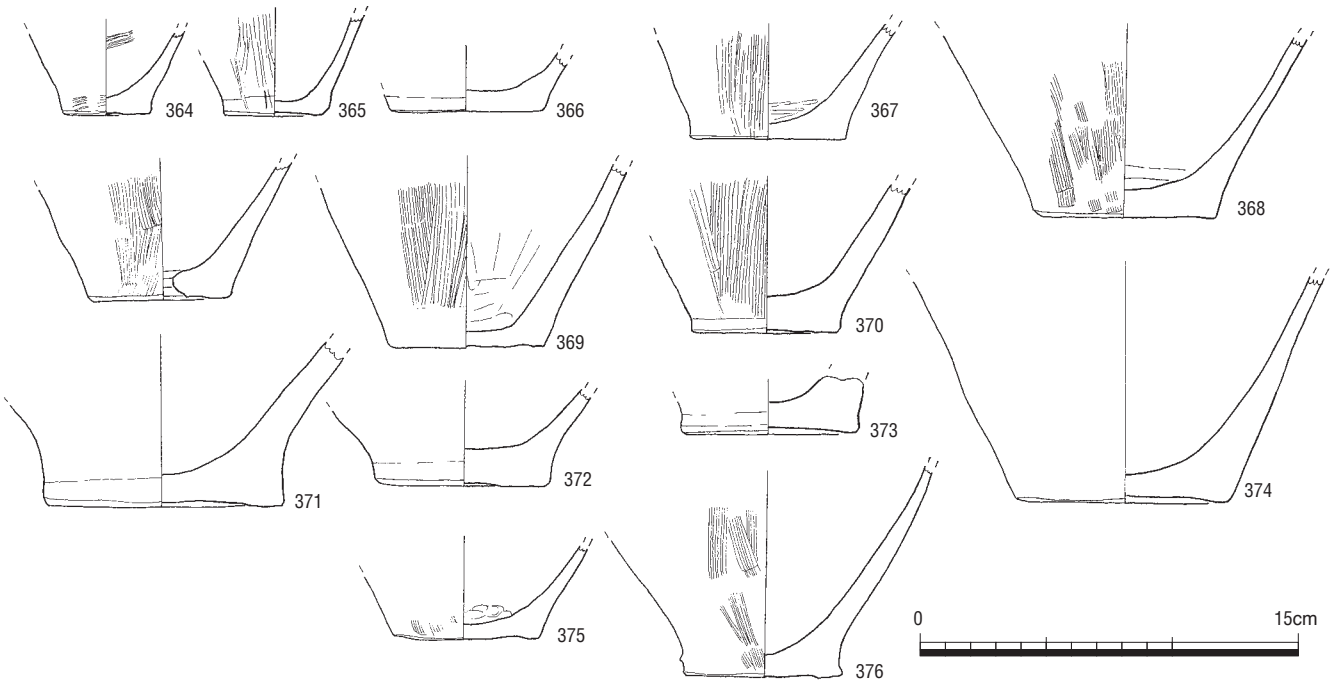


Fig. 73　SC502出土土器実測図10（甕底部　1/3）

壷１類（377）

頸部が内傾しながら直線的に延び、口縁部が大きく外反する。口縁部外面が肥厚し、頸部の境に段を有す。377は肥厚した口縁部の中位で折れて外側へ大く外反する。口縁端部は丸い。

壷２類（378）

頸部が内傾しながら直線的に延び、口縁部が大きく外反する。口縁部の肥厚はなくなる。378は口縁端部を丸く収める。

壷３類（379、380）

口縁部から頸部にかけて弯曲して移行する。379は胴部との境に断面三角形の突帯を巡らし、380は２条の沈線を施す。口縁端部はいずれも面取され380は下端に刻みが施されている。

壷４類（381）

頸部が直立に近く立ち上がり、口縁部を大きく外反させる。381は胴部との境に断面三角形の突帯を巡らす。

壷５類（387、388、323、324）

口縁端部の内面ないし上面に粘土帯を貼り付けて肥厚させている。頸部が内傾しながら直線的に立ち上がり、短く外反した口縁部の傾斜した内面に粘土を貼り付けたものを壷5a、頸部の直立ぎみに弯曲し、壷5a同様に傾斜した口縁部内面に粘土を貼り付けたものを壷5b類、頸部が短く弯曲し、大きく外弯した口縁部の上面に粘土を貼り付けたものを壷5c類とする。壷5a→壷5b→壷5c類に変化するが、壷5cは金海式甕棺に近似し甕形に変化している。387、388の口縁部上面には傾斜がみられ、5bに近く、大型の323、324は壷5cに類する。

壷６類（382～384）

直立ないし外傾しながら直線的に伸びた頸部から大きく口縁部が外反もしくは逆Ｌ字状に折れる。口縁端部は内側にも嘴状に張り出している。384は口縁から頸部にかけて弯曲が強く、口縁部上面が

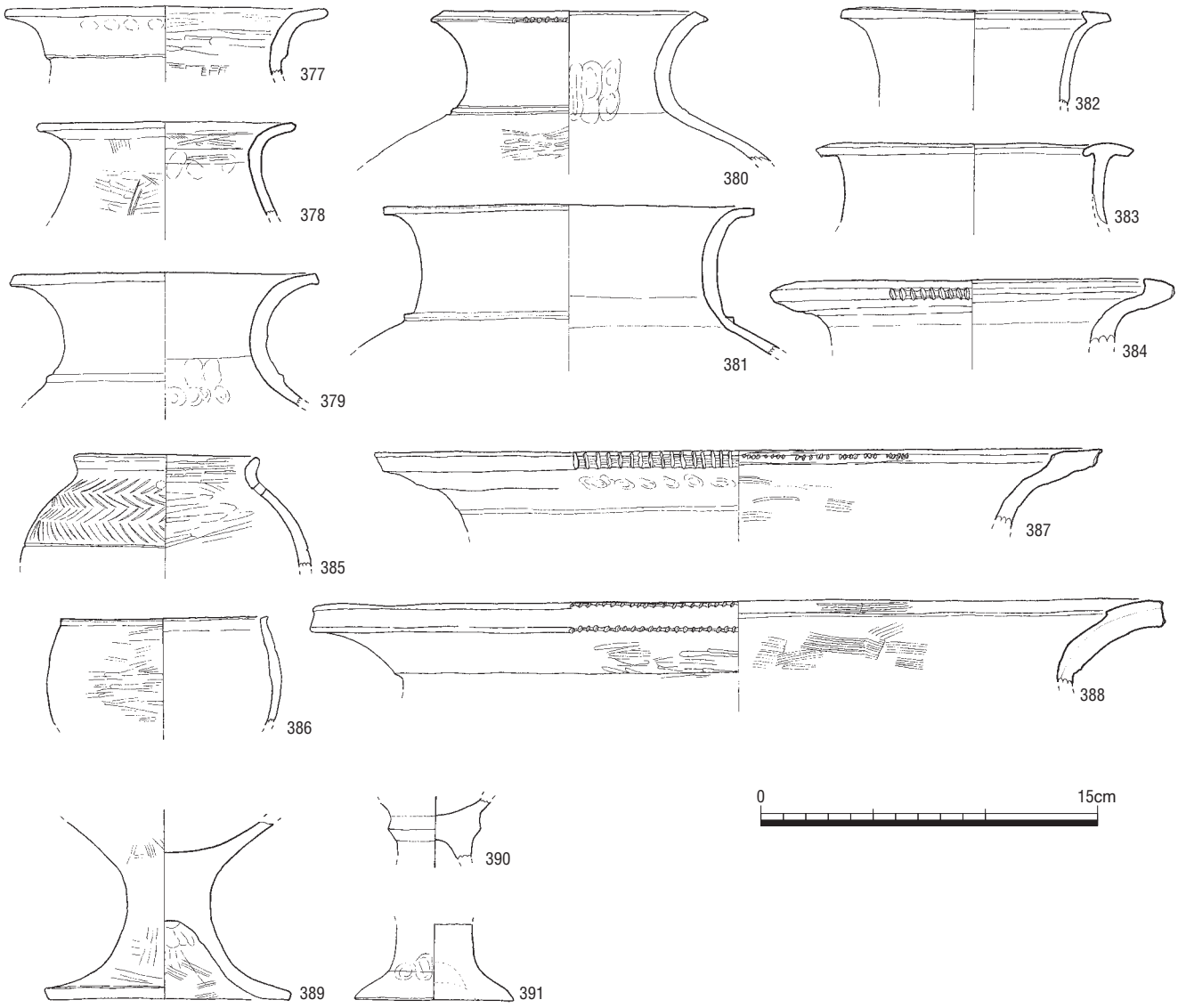


Fig. 74　SC502出土土器実測図11（壷、高坏　1/3）

傾斜して内側へ嘴状に張り出している。口縁端部には刻みを有し、城ノ越式まで降る。

壷７類（306～308）

大型にみられる。類似した器形は甕棺にみられ、欠損している胴部下半は膨らんだ壷形が推定される。出土した306～308は体部上位が直立ないし外傾し口縁部が如意状に外反する。口縁部と突帯に刻みが施され、内外面にミガキがみられる。壷５類同様に甕形に近い形状である。

壷８類（385）

385のみである。球形の胴部から短く「く」の字に口縁部が延びる。胴部上位に無軸綾杉文が線刻されている。

壷９類（386）

無頸壷386のみである。

高坏（389～391）

形状がわかるものは脚部のみの３個体である。389の脚部は低く、裾が大きく開く。390は坏部と脚部の境に巡る突帯である。391は中実の脚部である。

Fig. 75 SC502出土土器実測図12（鉢　1/3）

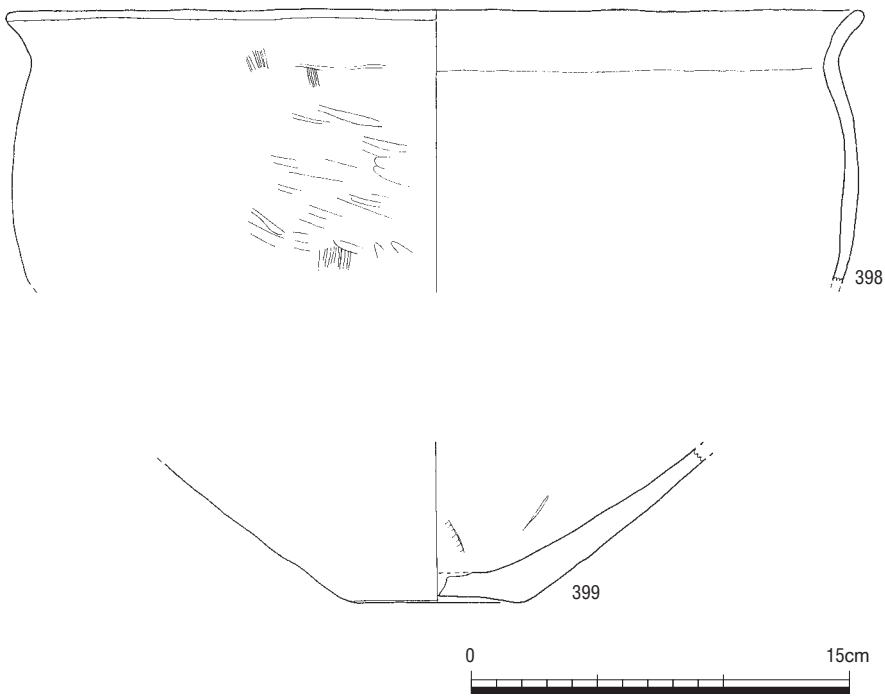


Fig. 76 SC502出土土器実測図13（鉢　1/3）

鉢１類（392）

体部が直線的に延び、口縁部は短く外反する深鉢形である。392が含まれる。

鉢２類（393、394）

口縁が如意状に短く外反し、胴部の弯曲は小さく、その体部最大径が口縁部との境（頸部）にある393、394が含まれる。

鉢３類

外側に断面三角形の突帯を貼り付けた口縁部である。SC502に出土例は無い。

鉢４類

直口の口縁端部の内側に粘土を貼り付けた口縁部である。SC502に出土例無し。

鉢５類

壷２類と同様に口縁部外側に粘土を貼り付けて段を有して肥厚させている。胴部は口縁部以下、緩やかに膨らむ。SC502に出土例無し。

鉢６類（396～398）

大型の396～398が含まれる。口縁部の外反が小さく、胴部上位が張り出す。397は胴部が最も張り球形に近い。口縁端部も面取りし、後出的である。

鉢７類（395）

395が含まれる。口縁部の上面を肥厚させて、端部に上下２列の刻みを施す。口縁部の上面は内傾している。弯曲した頸部に突帯が巡る。胴部は膨らみ中位近くが最大径部となる。口縁部上面には等間隔に１本の軸線と片側のみに３～４本の矢羽状の斜線を組み合わせた文様を線刻している。

SC501（425）

器形が分かるのは甕１類の425のみである。体部が張らずに底部へ窄まり、丸く収めた口縁端部の下端に刻みを施す。本調査で出土した甕１類の中では古相を呈していると思われる。

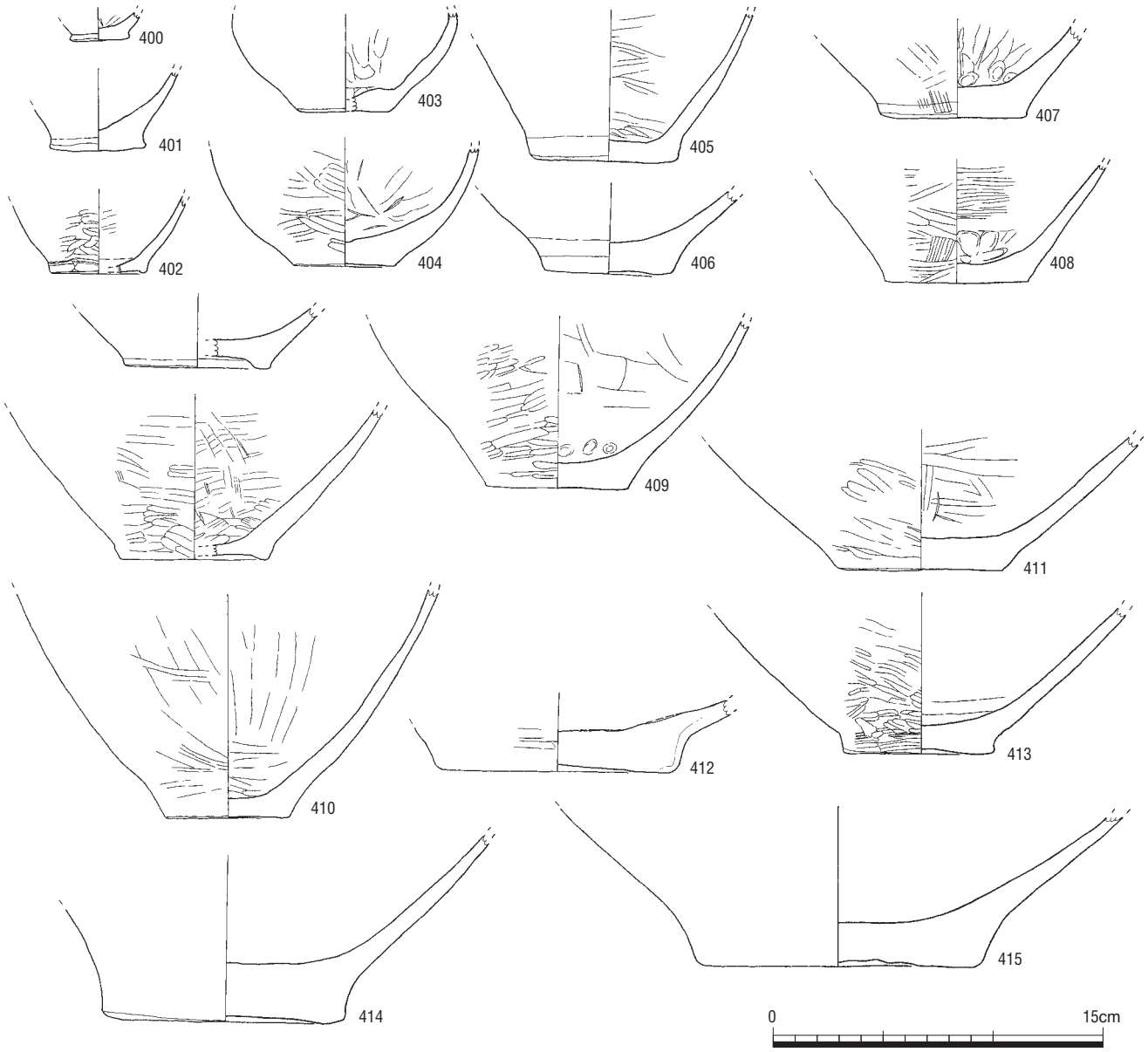


Fig. 77 SC502出土土器実測図14（壷、鉢等の底部）

SC503（416～423）

壷　頸部が弯曲した壷３類の416は窄まった頸部に沈線が巡る。口縁端部は面取りされている。417は口縁部内側に粘土を貼った壷5a類である。頸部が長く内傾し、口縁端部が傾斜している。

鉢　胴部最大径部が口縁部との境にある鉢２類の418は口縁部が短く外反し、その端部が面取りされいる。器厚でこの類の新相を呈する。

甕　直口に近い甕３類の419は口縁端部を面取りし、刻みは無い。甕１類の420は器壁が厚く、面取りされた口縁端部に刻みは無い。甕７類の422は口縁端部の頂部が尖らず、平坦に近く、その上面は水平となっている。423の口縁端部も張り出しが長くなり、その頂部を丸い。甕２類の424はSC502出土の284と同一個体とみられ、混入したものである。

以上、板付Ⅱc式新相～城ノ越式までの遺物を含む。

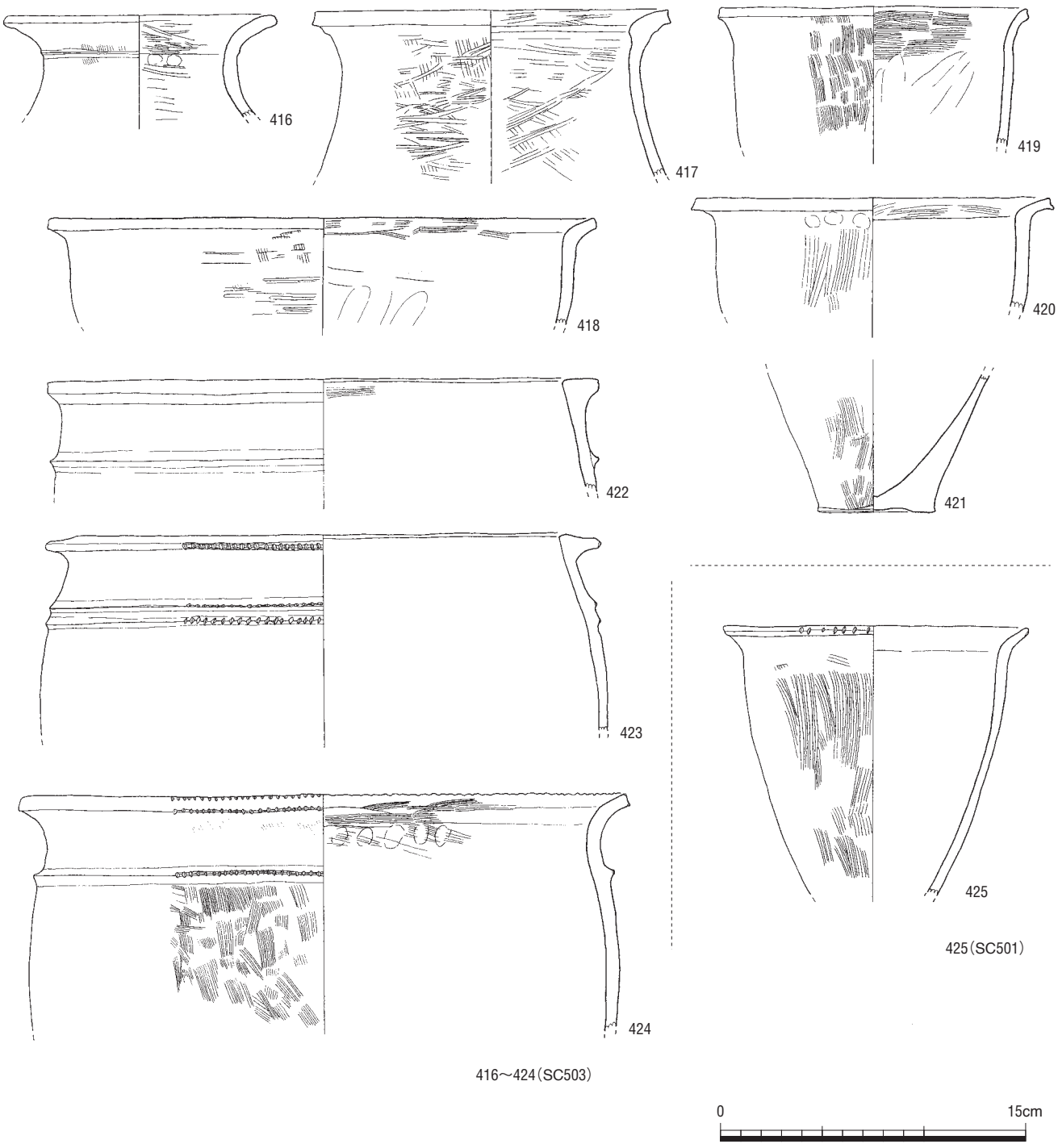


Fig. 78　SC503、501出土土器実測図（1/3）

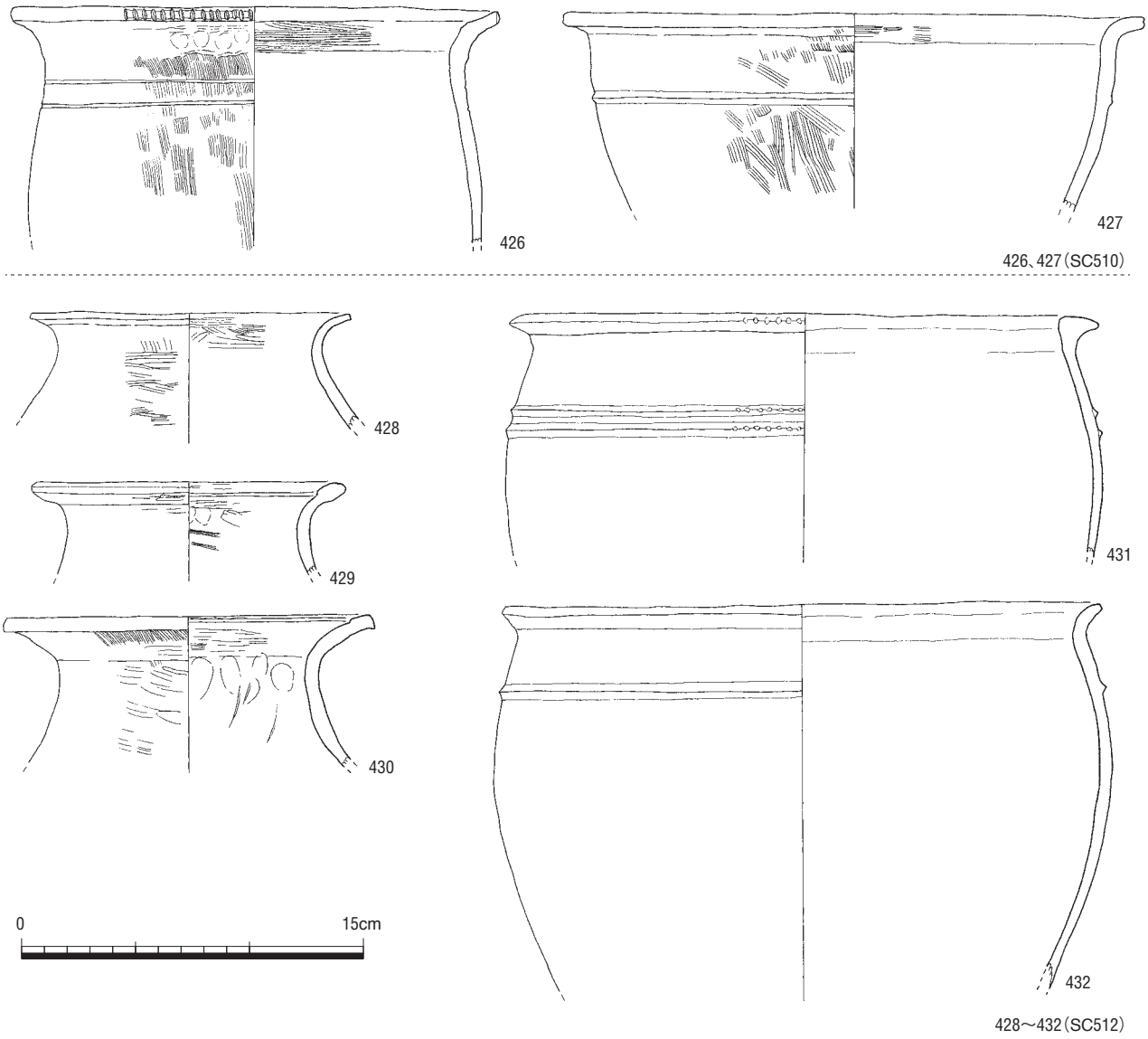


Fig. 79　SC510、512出土土器実測図（1/3）

SC510（426、427）

甕　甕２類の426は口縁部の弯曲が小さく、口縁端部全面に刻みが施されている。胴部の張りは緩やかで、外面に２条の沈線を有する。浅鉢形の甕１b類もしくは鉢２類の427は胴部が張らず、突帯１条を有す。図示した２点は板付Ⅱc式に収まるであろう。

SC512（428～432）

壷　壷２類の428は内傾した頸部が長く口縁端部は平坦である。口縁部を肥厚した壷5b類の429、430は内傾した頸部から口縁部が大きく外弯する。

甕　甕７類の431の口縁端部は断面三角形を呈し、頂部が尖る。甕４類の432は口縁部が短く外弯し、胴部は球形に張り、その最大径は口径を上回る。

以上、板付Ⅱc式に収まるであろう。

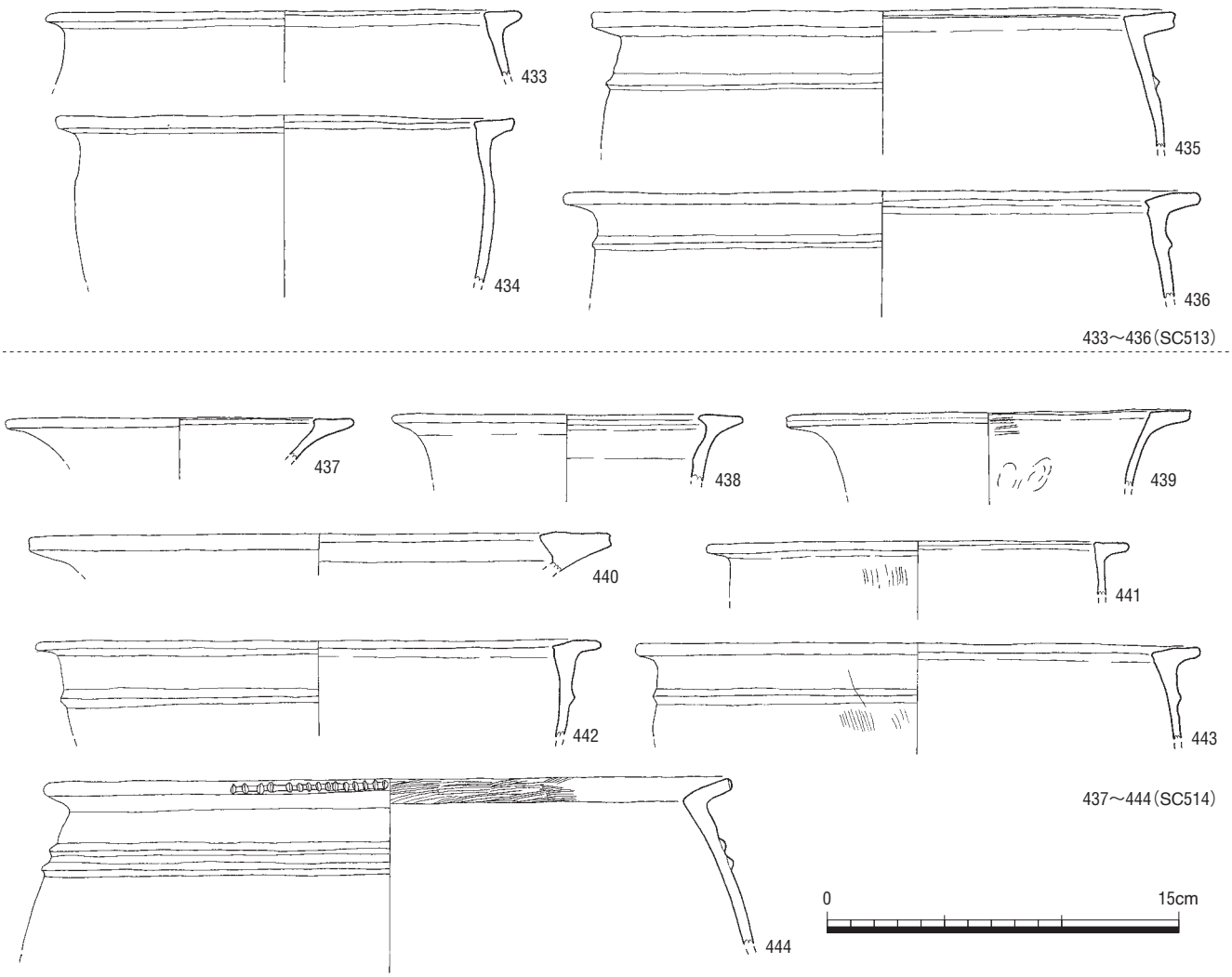


Fig. 80　SC513、514出土土器実測図（1/3）

SC513（433～436）

甕９類　如意口縁の甕１類や甕２類から発達変化している。口縁部は外側へ水平に近く伸びる。433の口縁部は比較的短く、端部は丸いのに対し、435、436は長くなり、端部も面取りされている。

図示した甕は436が新相を示すが城ノ越式期であろう。

SC514（437～444）

壷　437～440は逆Ｌ字の口縁や口縁端部の内側に張り出しを付けた壷６類に含まれる。頸部の形状は不明であるが、開きは小さいと思われる。

甕　甕９類の441～443の口縁端部は丸みを帯びる。

甕10類

「く」の字口縁の甕４類から発達変化している。口縁部上面が内側に傾斜し、胴部が球形に膨らむ。444は口縁部が長く直線的に延びる。

以上、城ノ越式新相～須玖Ⅰ式に含まれる。

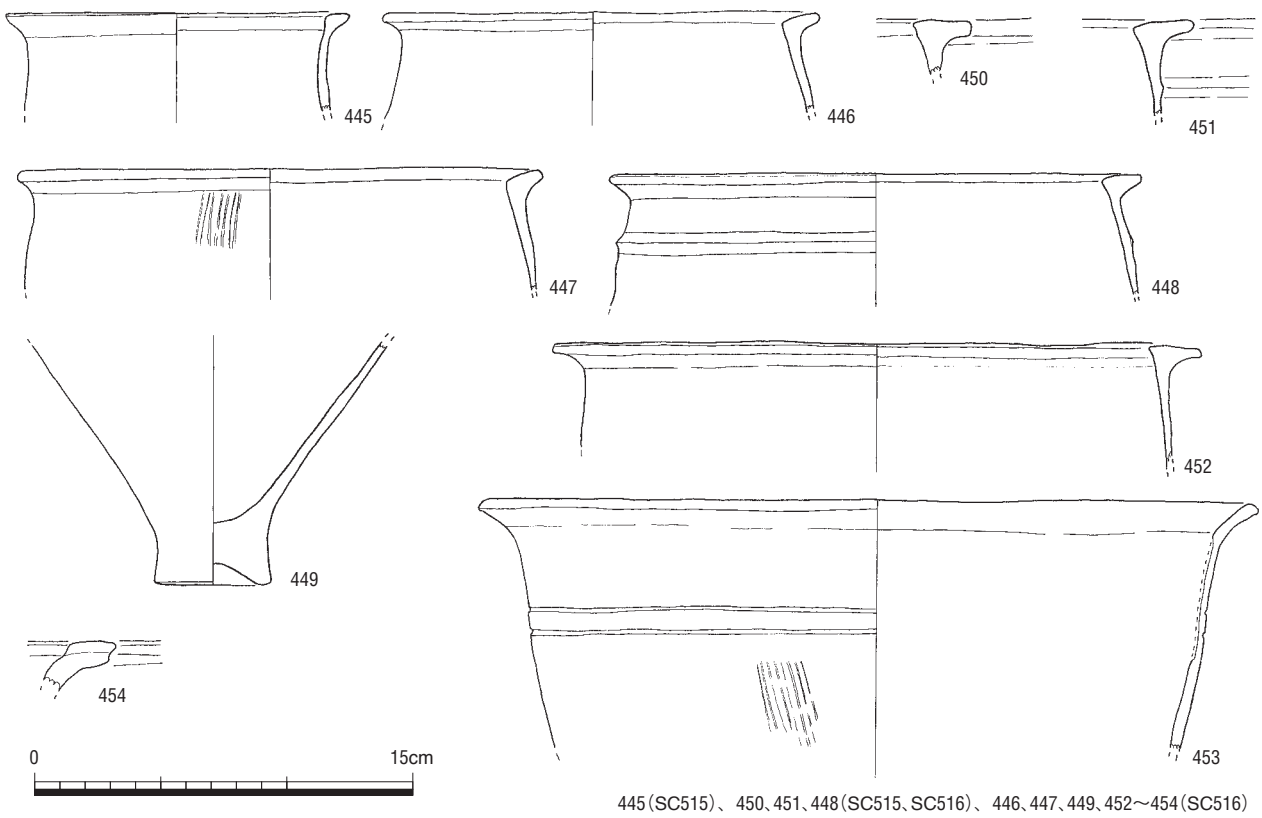


Fig. 81　SC515、516出土土器実測図（1/3）

SC515・516（445～453）

壷　445は頸部が直立し、口縁部が断面三角形を為し内側へわずかに張り出した壷６類に近い形態である。壷5c類の454には刻みが無い。

甕　甕９類の450、451、452は口縁端部が丸みを帯びた面となり、刻みは施されていない。胴部の膨らみは小さい。甕４類、甕７類から発達変化した446、447は甕７類の448と比較し、口縁部上面の内側への傾斜が大きく、口縁端部が尖らない。

453は下半部が不明であるが、直口に近い甕３類からの変化もしくは壷７類に近いと思われる。体部に２条の沈線が施されている。

以上、城ノ越式～須玖Ⅰ式までに収まるであろう。

SC522（455～475）

壷　口縁部を肥厚させた壺１類の456、457と口縁端部に粘土を貼って肥厚させた壷5c類の458、古相の壺5a類の459が出土した。

鉢　463は甕1b類もしくは鉢２類である。462は口縁内側に粘土を貼った鉢４類である。直口に断面三角形の粘土を貼った形状である。鉢２類の464の口縁端部は厚く、少し窪みがある面取りがみられ、後出的である。

甕　如意口縁で胴部の張りが小さい甕１類に含まれる465、467、469は口縁部下端に刻みが施されている。口縁部の弯曲が大きい甕２類の466は胴部が張らず古相を示す。弯曲が小さく直口に近い甕３類は小片であるが、472、473にみられる。472は口縁端部全面に、473は下端に刻みが施されている。

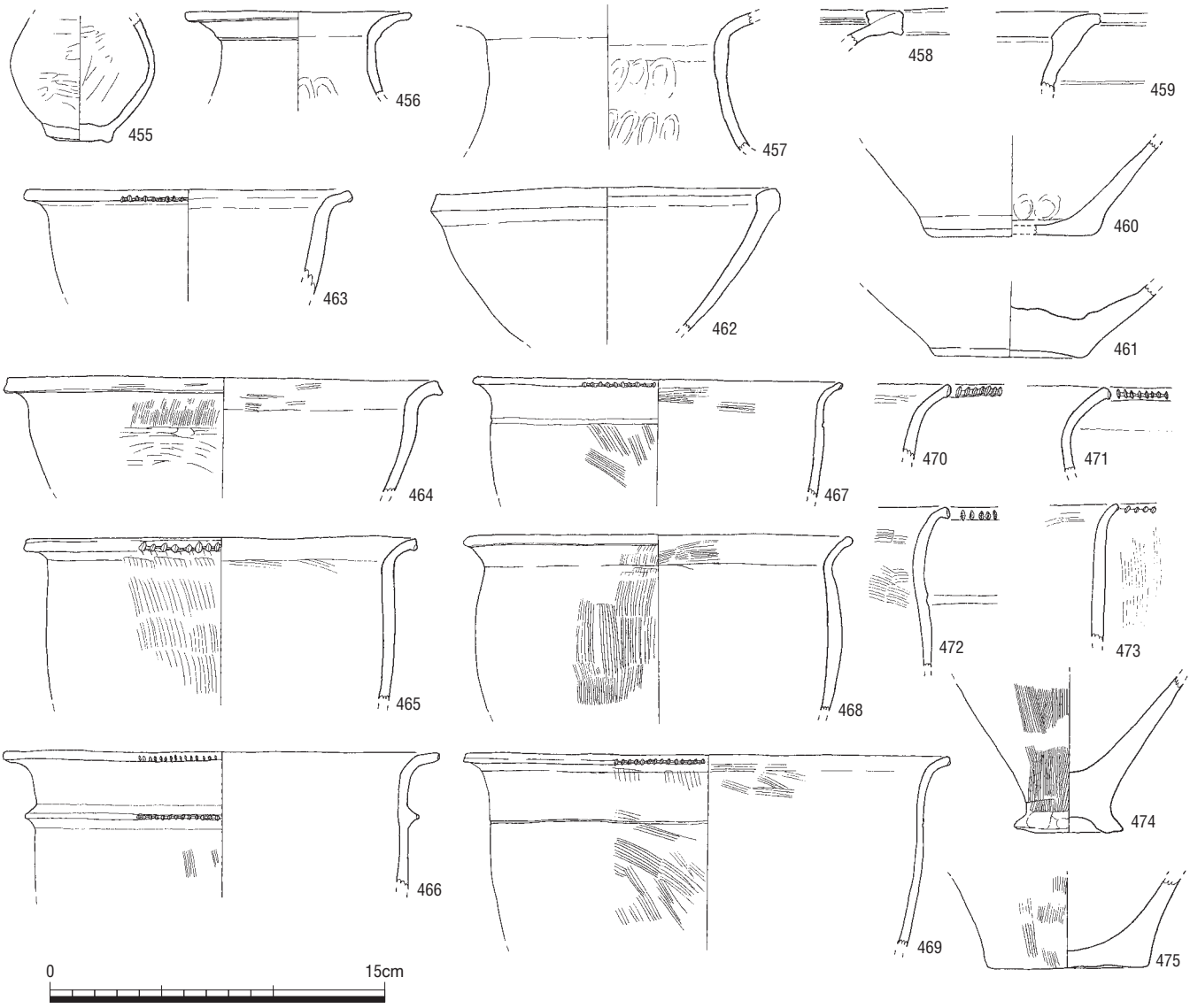


Fig. 82　SC522出土土器実測図（1/3）

胴部が球形に膨らみ、「く」の字に折れた口縁部の甕４類に含まれる468は頸部の折れが緩やかで、口縁部が長く、胴部の張りが小さいなど古相を示す。

以上、時期が降る458は小片であることから混入の可能性があり他は板付Ⅱc式に収まると考える。

SC524（476～489）

壷　476は頸部が直に近い立ち上がりの壺４類である。胴部との境に沈線を巡らす。477、480は直口の広口壷か。478、481、482は壷６類に含まれる。479は壷5c類、483は「く」の字口縁甕４類から変化したものとみられる。

甕　484～487は甕９類に含まれ､胴部が球形に張り出す488は甕４類に含まれる。489は「亀ノ甲式」甕７類から変化したものと考えられる。

以上、出土遺物の時期は須玖Ⅰ式までに収まる。

SC529（490～495）

甕　甕９類に含まれる490～493の口縁部は短く、端部も細くなり丸く収められていることから古相

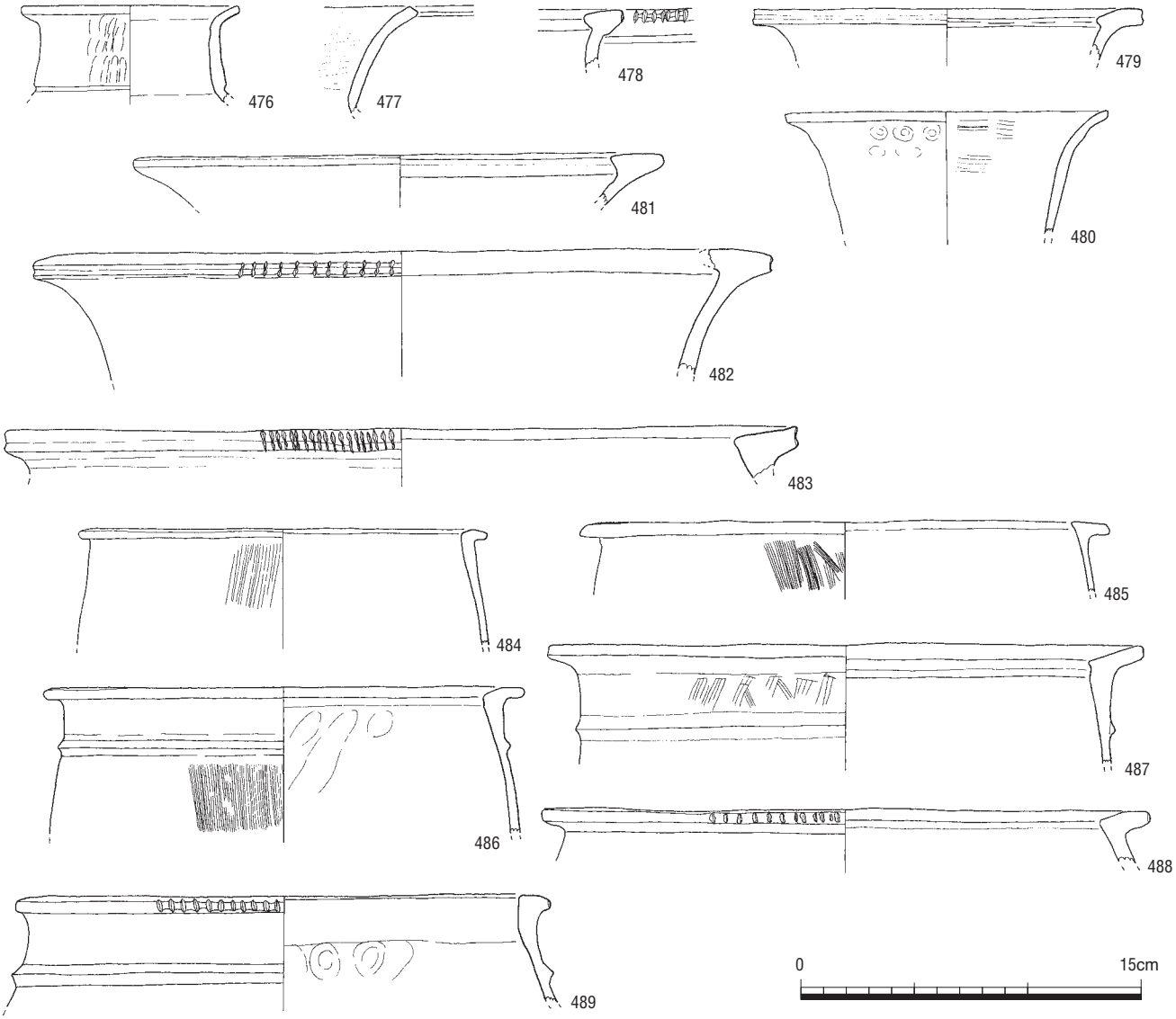


Fig. 83　SC524出土土器実測図（1/3）

を示している。495は口縁部上面が傾斜し、その断面三角形の頂部が尖ることから甕７類の古相と考えられる。494は「く」の字口縁の甕４類、10類から変化したものであろう。

以上、出土土器は城ノ越式に収まると考える。

SC539（476）

476は口縁部に断面三角形の突帯を貼り付けた鉢３類に含まれる。

SC564（497～499）

甕９類の497は口縁部が長く延び、壷5c類から変化した498は頸部の弯曲が無くなり、甕形となった新相を示す。いずれも須玖Ⅰ式であろう。

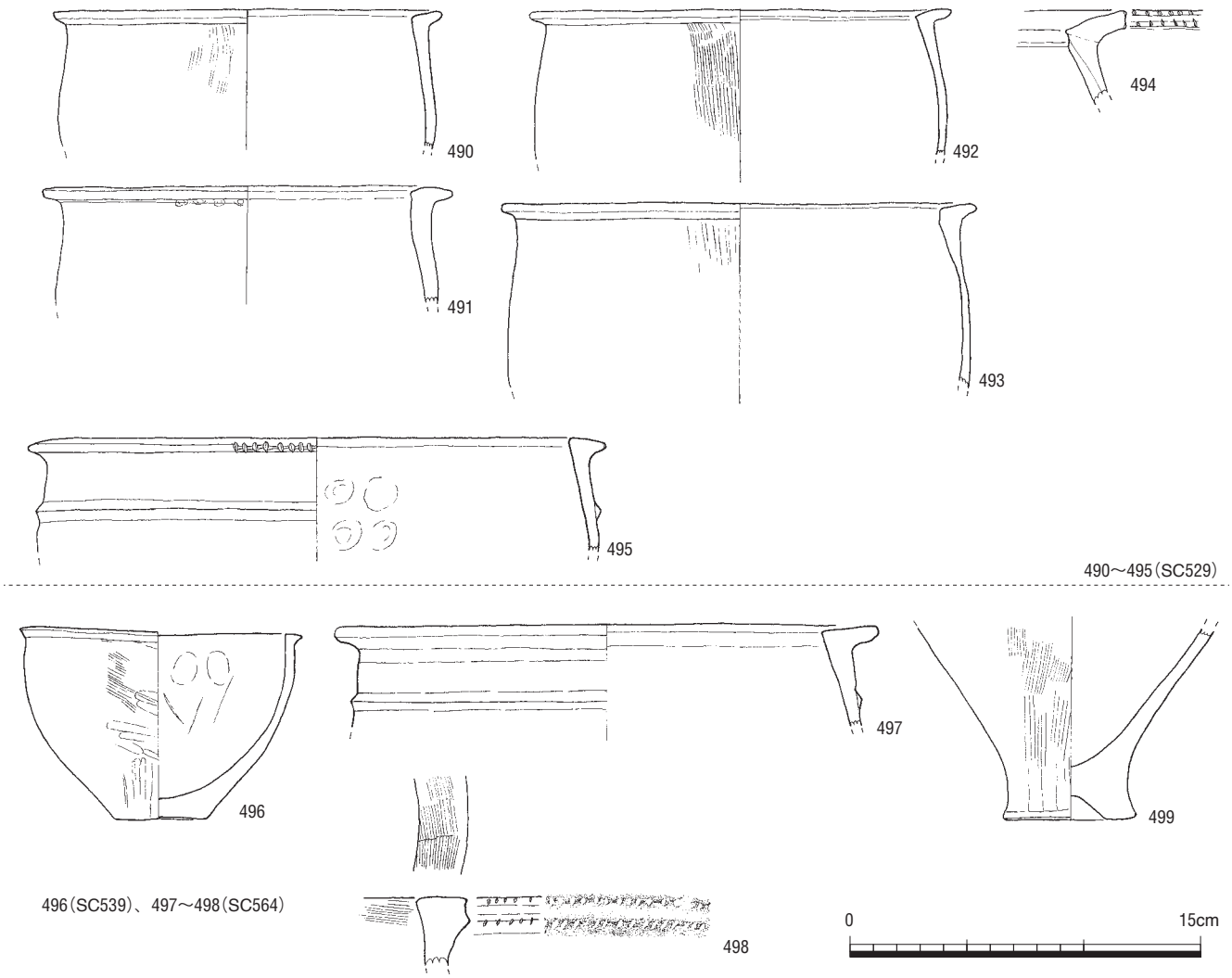


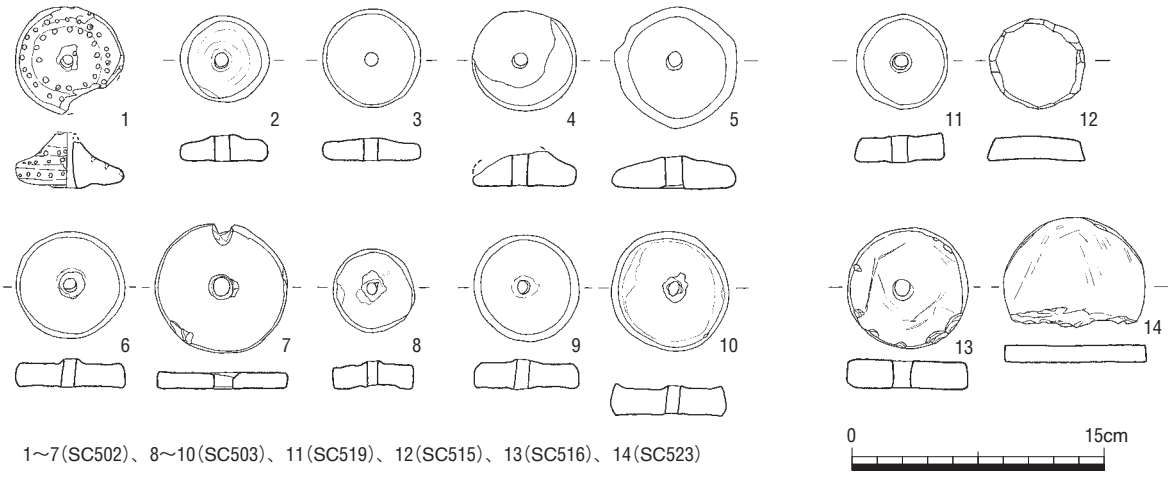
Fig. 84　SC529、539、564出土土器実測図（1/3）

第３区出土紡錘車（Fig,85）

１は周縁含めた３列に刺突文を巡らす。12は土製で周縁を打ち欠いている。７、13、14は滑石に近い変成岩の石材である。

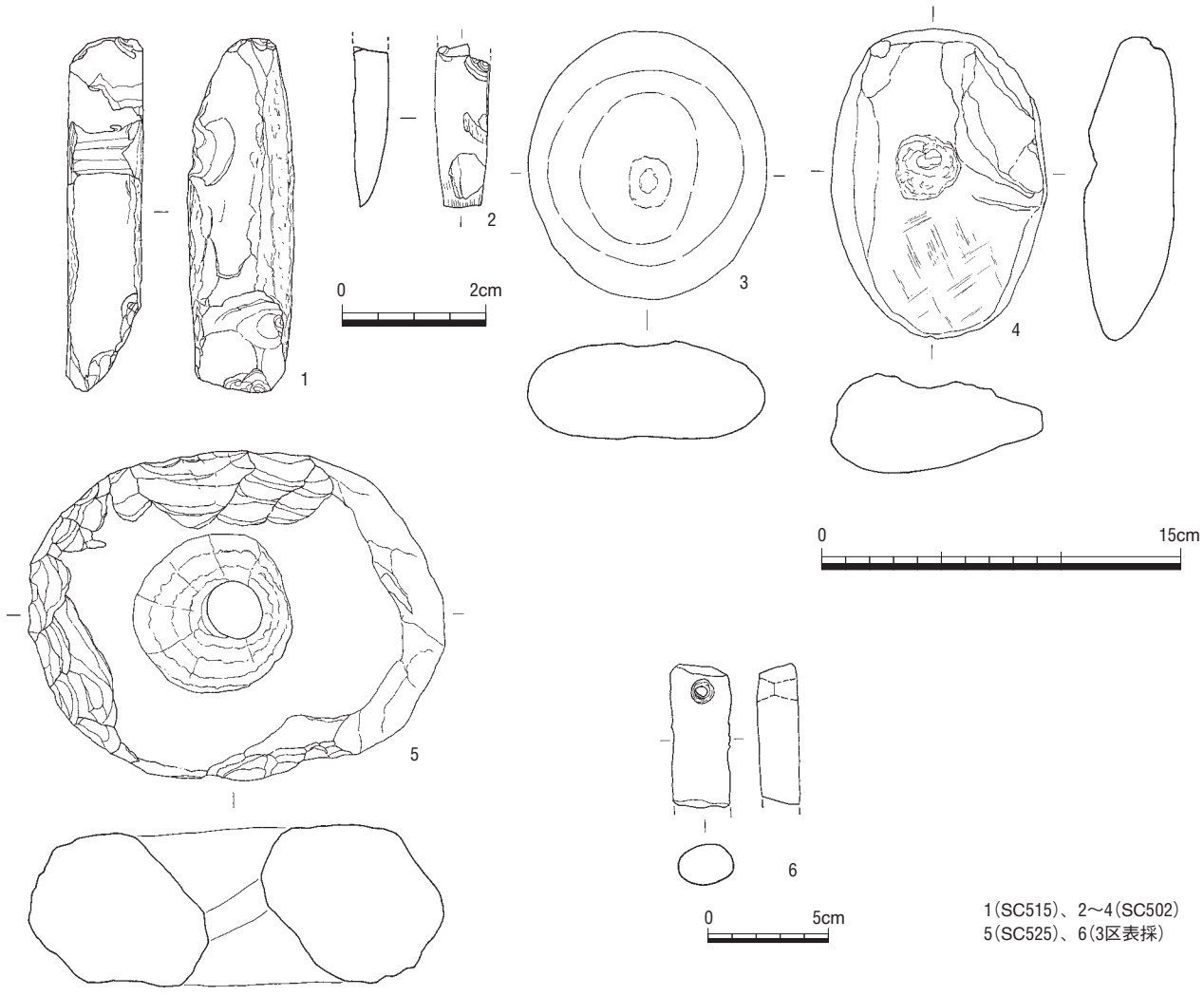
第３区出土石器、土錘（Fig.86）

１は抉入片刃石斧の未成品である。１面に敲打痕を残す。粘板岩製。２は片刃石斧の刃部である。粘板岩製。３は花崗岩製の磨石である。両面の中央に少し凹みがある。４は周縁に敲打痕を残し、図示した上面に窪みがみられる。滑石製の未成品か。５は滑石製の石錘である。６は北側の低地から表採した土錘である。



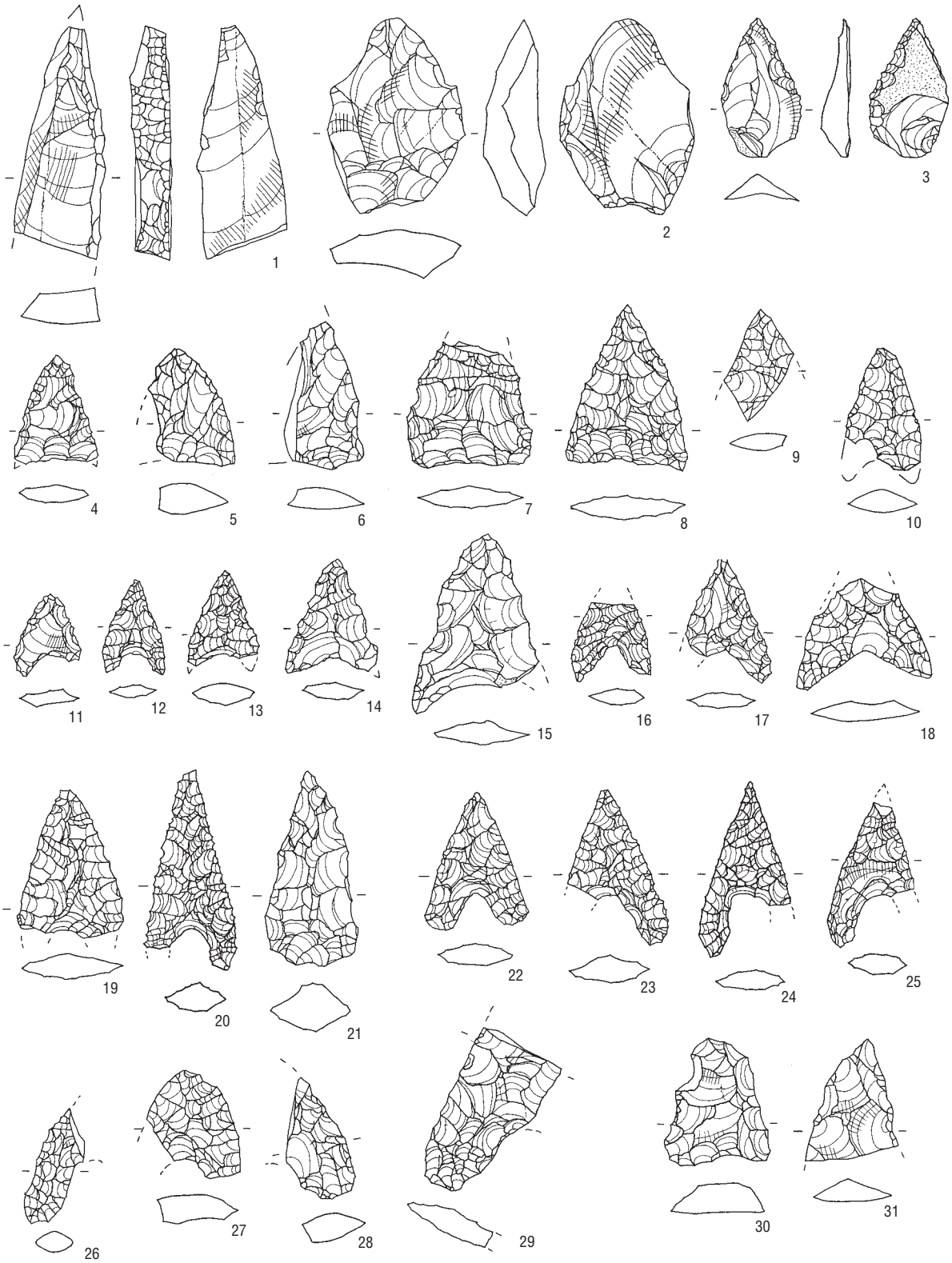
1～7(SC502)、8～10(SC503)、11(SC519)、12(SC515)、13(SC516)、14(SC523)

Fig. 85　第3区出土紡錘車（7、13、14は石製、他は土製　1/3）



1(SC515)、2～4(SC502)
5(SC525)、6(3区表採)

Fig. 86　第3区出土石器、土錘実測図（1、2は1/2、3～6は1/3）

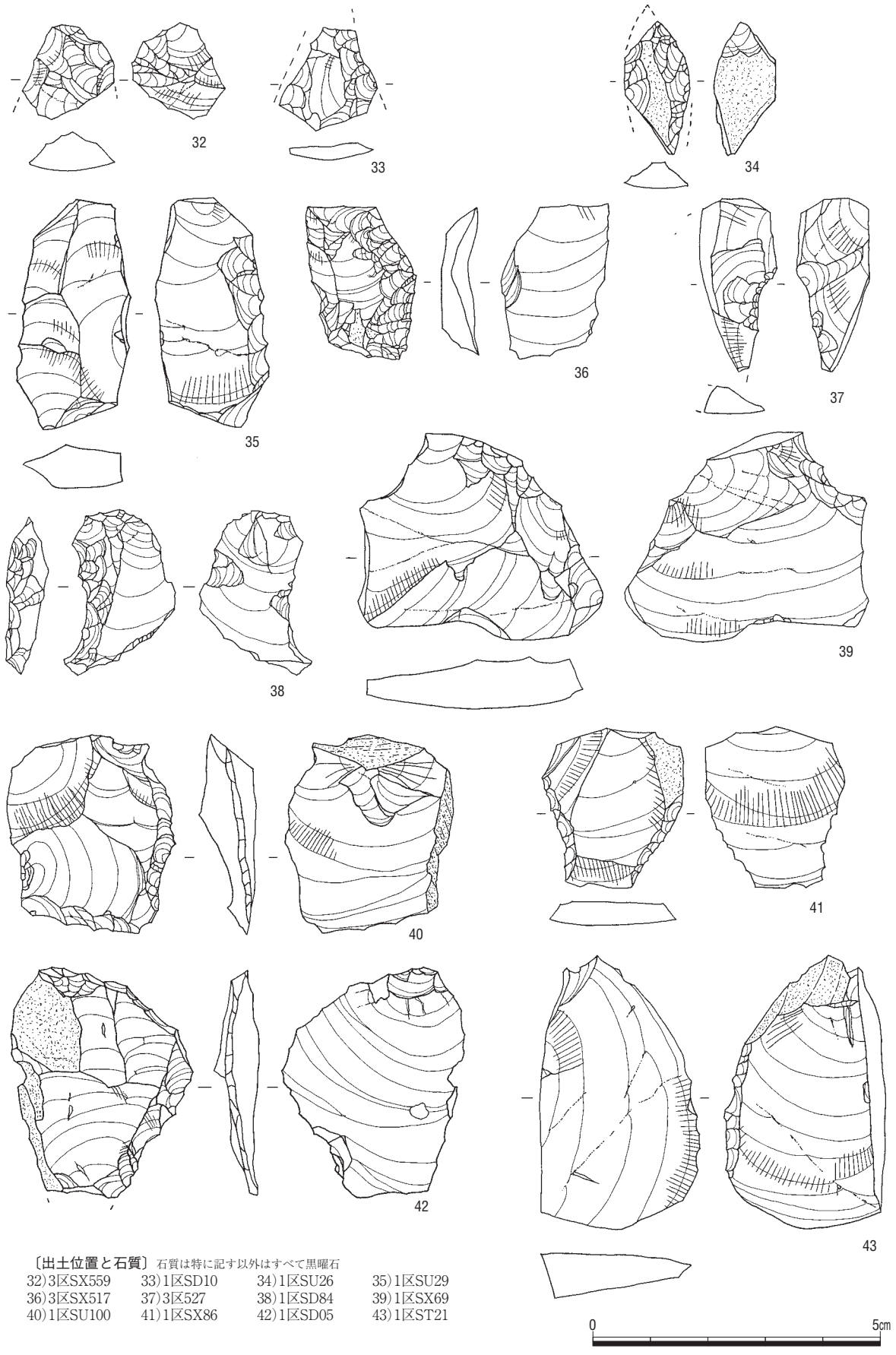


〔出土位置と石質〕 石質は特に記す以外はすべて黒曜石

1)3区SC514　2)3区SC502　3)3区SX518　4)3区SP546　5)2区SP316　6)2区SC301　7)3区SC502
8)1区SX14(安山岩)　9)3区SX521　10)2区SC310　11)3区SX517　12)3区SX557　13)3区SC502
14)3区SC515　15)1区SU67　16)3区SC519　17)3区SC502(安山岩)　18)1区SD74　19)1区SU18
20)3区　21)1区SD84　22)3区SC535　23)3区SC502　24)3区　25)3区SX559　26)3区SX521
27)1区SU44　28)3区SC519　29)3区SC516　30)3区SC502　31)3区SX508

0　5cm

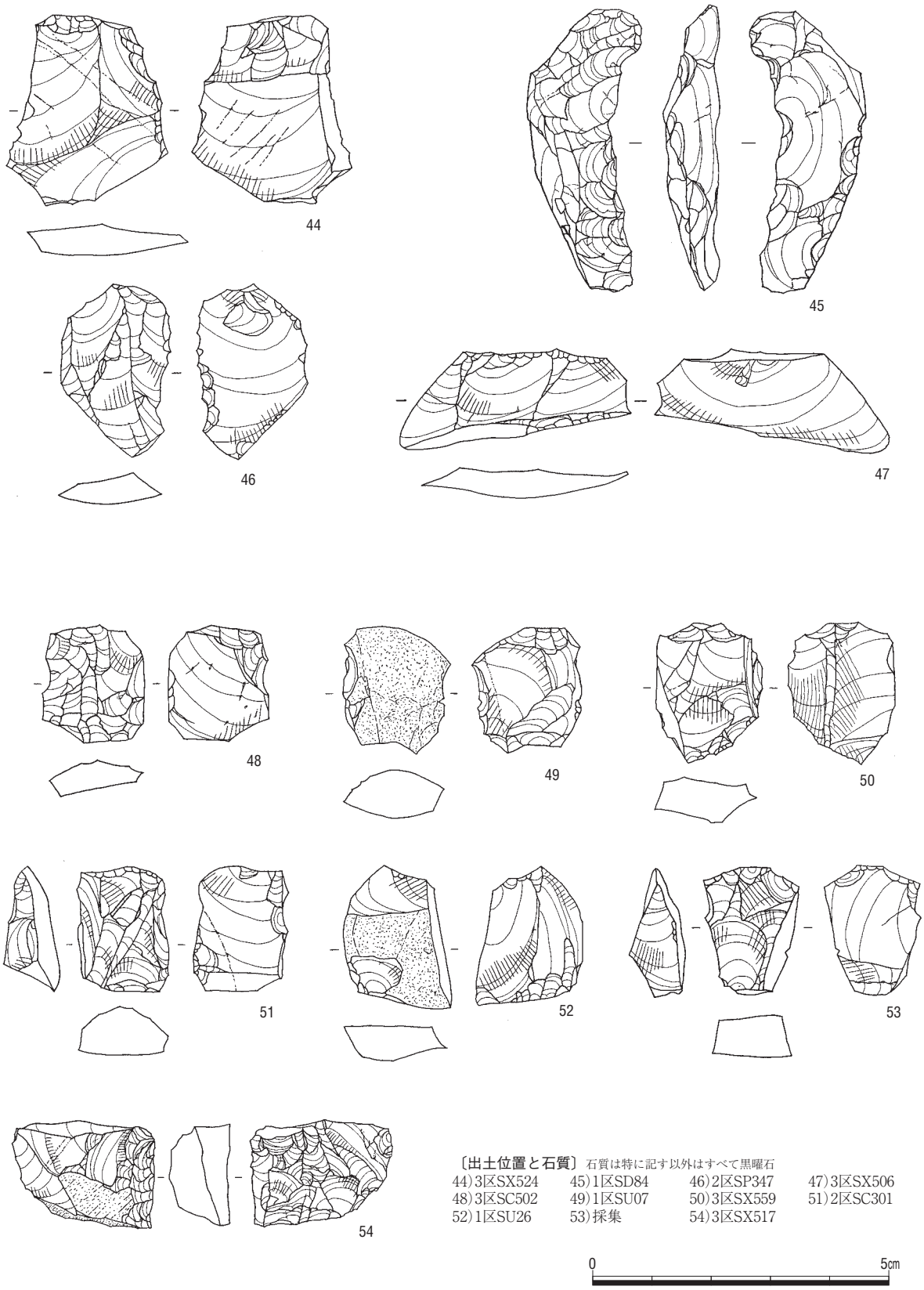
Fig. 87　出土石器実測図1



〔出土位置と石質〕石質は特に記す以外はすべて黒曜石

32)3区SX559	33)1区SD10	34)1区SU26	35)1区SU29
36)3区SX517	37)3区527	38)1区SD84	39)1区SX69
40)1区SU100	41)1区SX86	42)1区SD05	43)1区ST21

Fig. 88　出土石器実測図2

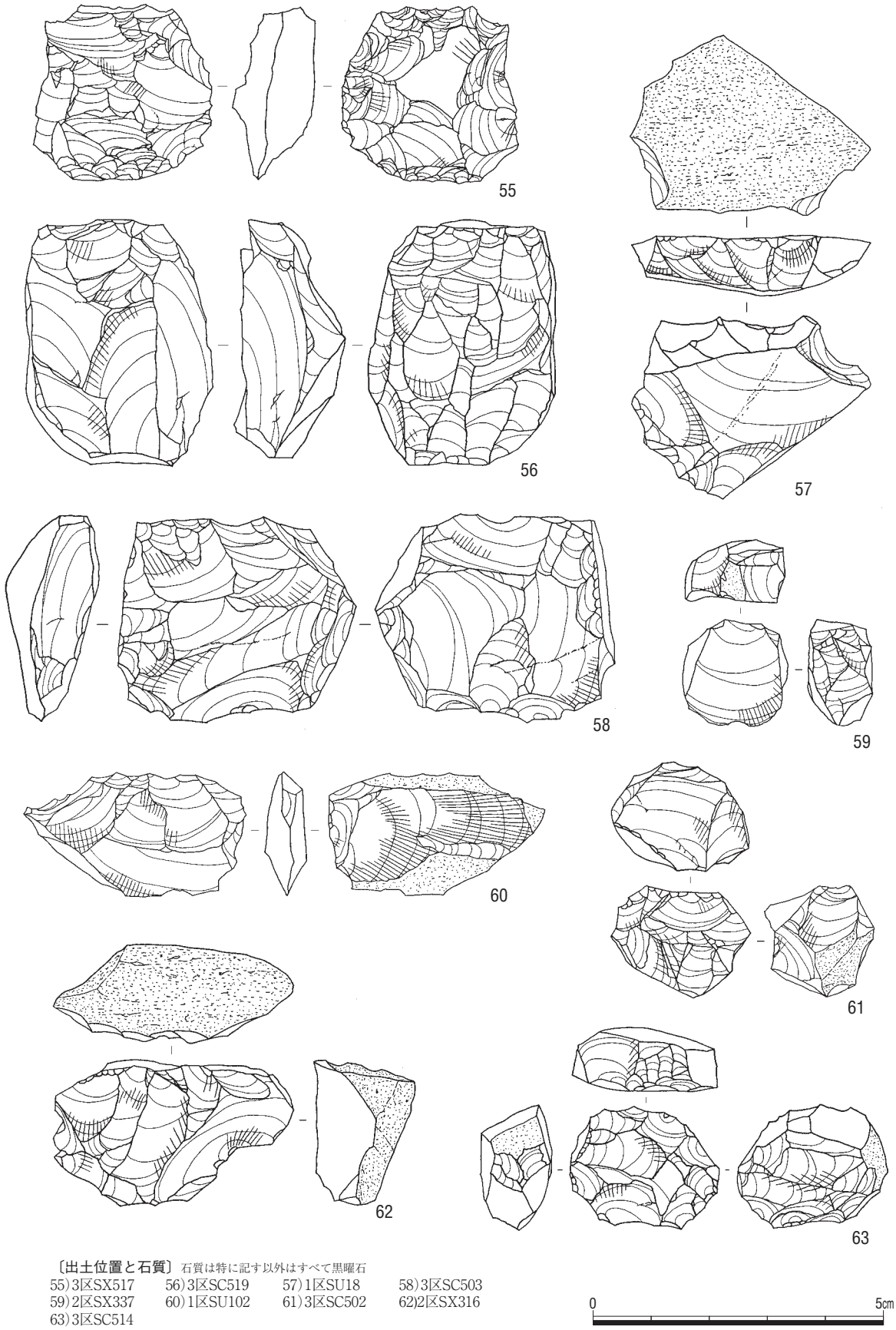


〔出土位置と石質〕 石質は特に記す以外はすべて黒曜石

44）3区SX524	45）1区SD84	46）2区SP347	47）3区SX506
48）3区SC502	49）1区SU07	50）3区SX559	51）2区SC301
52）1区SU26	53）採集	54）3区SX517	

0　5cm

Fig. 89　出土石器実測図3



〔出土位置と石質〕 石質は特に記す以外はすべて黒曜石

55）3区SX517　56）3区SC519　57）1区SU18　58）3区SC503
59）2区SX337　60）1区SU102　61）3区SC502　62）2区SX316
63）3区SC514

Fig. 90　出土石器実測図4

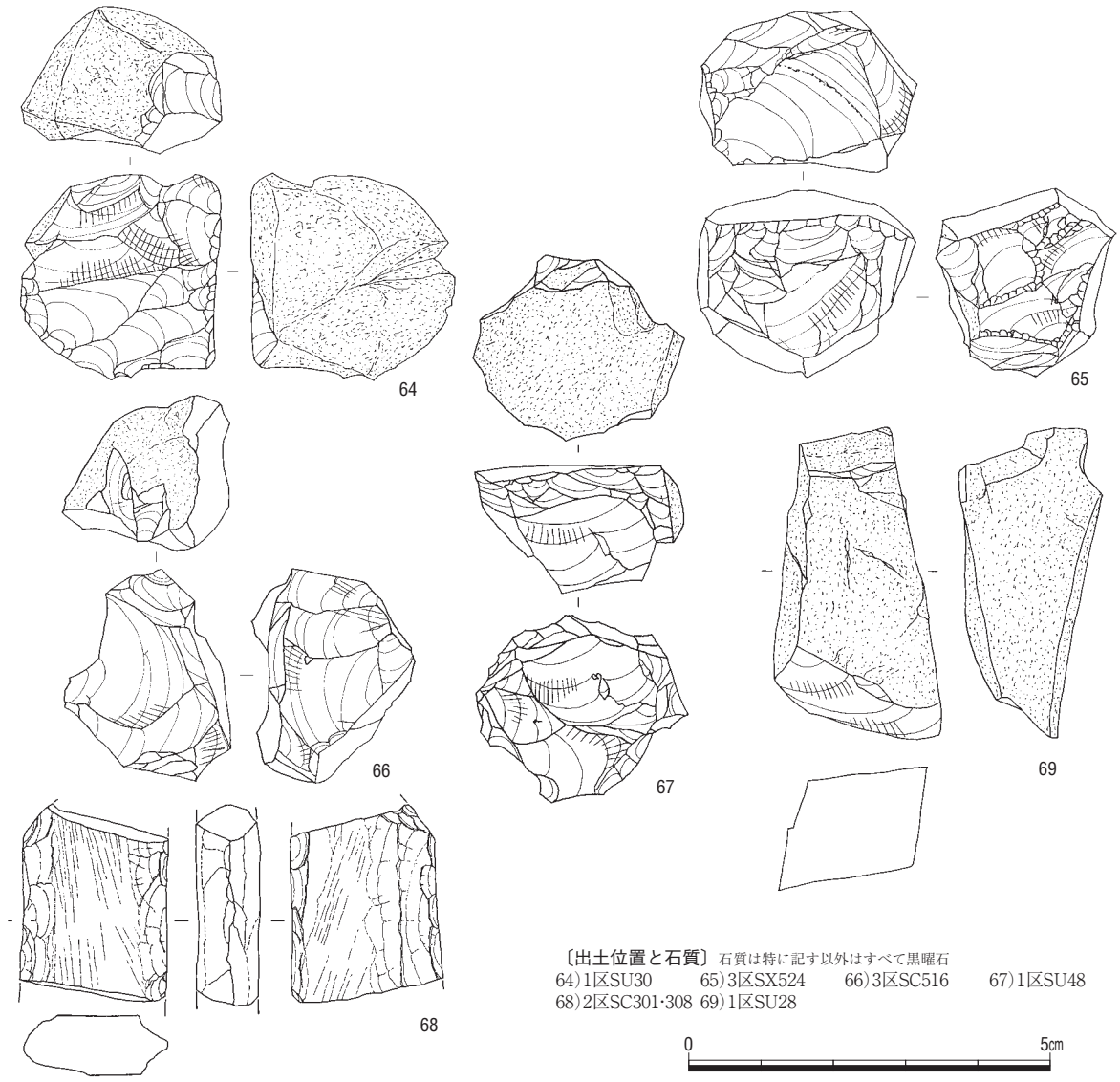


Fig. 91　出土石器実測図5

（6）第1次調査出土打製石器及び関連資料

今回調査により出土した石器類のうち打製石器及び関連資料は、剥片・砕片・原礫を含め約2,000点となる。調査区別では丘陵頂部から斜面にかかる1区出土数約700点、一方谷底平野部近くの裾部の2区・3区からはそれぞれ約200点・約1,100点を数え、出土数の2/3を占めて多い。その内訳は、剥片・砕片が93％を占め、残りが石器（65点）、石核（70点）、原礫（8点）となる。石材の99％は黒曜石である。原礫が角礫、断口ガラス光沢を呈し、漆黒または一部透明で腰岳産とされる石材が大半を占める。黒曜石には他に、やや樹脂状光沢を呈するもの、灰味の黒色を呈するもの、器表が顕著に風化して灰色を呈するもの、細粒を顕著に含み灰色の姫島産とするものが極少数出土する。その他の石材には安山岩、チャート、頁岩、瑪瑙があるが、いずれも極少数で、数点かそれ以下の数に留まる。以下、器種毎に記述する。

ナイフ形石器（Fig.87- 1）上半部資料で先端部を欠く。素材剥片打点が石器上位にあり、厚い。形状から下半部は二側辺加工となるものと考えられる。やや風化した黒曜石製。

尖頭部を整形する石器（Fig.87- 2･3）3は両側への細かな連続剝離により形成された尖端部をもつ。2は両面加工製品の様に見える、側方からの加撃により剥落した剥片となっている。

石鏃（Fig.87・88- 4～33）出土した30点のうち2/3強が丘陵裾の２・３区からの出土である。すべて無茎凹基の石鏃である。基部の調整などからいくつかの群に分類できる。**石鏃a**（４～９）わずかに凹基となる。基部辺は平行する剝離により整形される。基部両端が尖るものがある。**石鏃b**（10～15）基部をより大きく抉り込む。このとき中軸線上に加えた大きな剝離痕を残置し、撓み込んだような形状となる。端部近くは細部調整を加え、基部両端が角状を呈するように見える。**石鏃c**（16～18）基部抉り部に加えられる細部調整が中軸線付近まで及び、抉り込み部形状が三角形状を呈す。**石鏃d**（19～21）幅に対して身が長く、今回調査資料の中では最も長幅比が大きい。最大幅部が最後部になく、抉り部の前方にある。**石鏃e**（22～26）基部の抉り込みがさらに深くなり、両側は長い脚部を形成し、いわゆる鍬形鏃となる。抉り込み部が三角形状を呈して外側辺が先端部から直線的に続き、脚部端に最大幅部がある22・23と、抉り込みが広がり「U」字形となり、脚部端よりやや前方に最大幅部がある24・25がある。上述以外に尖端部を整形せず、基部の形状が不揃いの27・39がある。製作途上の資料かどうか判断できない。28・29・31～32は破片で全体形状不詳。

周縁加工の石器（Fig.88・89- 34～47）縁辺の一部に連続する剝離痕が残る資料で、特定の形状を示さないもの。剝離痕が残る部位、状態も多様である。素材剝片の１側辺の一部に剝離痕の連続する例が多いが、40では隣接する２辺のほぼ全幅にわたり、41では向かい合う２辺の一部に剝離が行われている。37・38では彎入する縁部を形成している。35・37・46では素材剝片の主剝離面対して、浅いが長く入る剝離痕が連続したものとなっている。

楔形石器（Fig.89- 48～54）上下あるいは左右方向からの加撃により向かい合う辺に剝離を生じているもので、交差する辺上にも剝離痕が残るものがある（48・54）。縁部は重複したり、打ち潰したような状態に至る部分がある。端部では大きく剝離が生じている資料もあり、それから生じたと思われる剝片・砕片が出土資料中にある。また、打瘤を生じず、軸と直交する方向の捩れを生じた薄い剝片も、この種の石器から生じたものと考えられる。

石核（Fig.90・91- 45・55～68）最終剝離作業面を正面にみると、奥行きが小さな（薄い）盤状の石核（55～63）と、大きな（厚い）塊状の石核（64～67）とがある。作業の進行に伴い後者から前者へ移行した可能性もあるが、60のように素材自体が剝片で薄いものもある。盤状のものでは中心に向かう剝離を行い、全体として亀甲状となるものがある（55・58・63）。礫面を残す石核では礫面を打面とし（62・64・66・67）、さらに対向する位置に打面転移する例がある（62・66）。以上とは異なり、45は両面調整の製品であり、縁部に加えた連続剝離の稜部を打点として横長の剝片が剝離される。55はチャートとみられる石材で、背面の剝離は両端への加撃によるような状態を示し、正面上部の狭い部分のみに最終的な剝離が行わる。同一石材とみえる資料は、部分磨製石器68のみが出土した。

部分磨製石器（Fig.91- 68）石核55との関係から本項で報告する。石器68は上下両端部を欠く破片で形状、規模を復元できない。中央部を平坦に研磨して薄い。

原礫（Fig.91- 69）角礫状の黒曜石である。一端を打ち欠いている。

今回調査で出土した石器類のうち、先土器時代資料としてナイフ形石器がある。また、調査では縄文土器の出土は確認できなかったが、石鏃eを始めとする石鏃の組み合わせから早期押型文土器の時期を考えることができる。楔形石器も当該時期資料を含むものと思われる。周縁加工の石器42、石核45は石質、風化の進行状況からしてこの時期、あるいは先土器時代を考えることができる。それ以外の資料について、礫面が残る資料からするとほとんどが角礫を原礫とすること、強いガラス状光沢を残すものが多いように見受けられることなどから、より新しい時期の資料も含む可能性がある。

Ⅳ　おわりに

１．遺構の時期的変遷

弥生時代

最も古いものは旧石器時代のナイフ型石器（Fig.87-1）縄文早期の石鏃出土。土器、遺構は検出されていない。

弥生前期後半になると丘陵に進出し、この時期の最も古い土器は突帯文系甕のFig.69-310である。貯蔵穴は弥生前期後半の板付Ⅱｂ期が大半を占め、前期末のⅡｃ期まで継続するが、中期初頭以後の土器は少量であり、混入の可能性も含め、その多くは廃絶されたものと考えられる。甕棺墓は貯蔵穴より遅れて中期前半（橋口分類ＫⅡｂ～ＫⅡｃ　汲田式）に群が構築され、貯蔵穴を切っている。

２区、３区の斜面からも前期後半の遺物が出土するが少量であり、多量の前期末から中期初頭の土器片が出土したのは１区下の３区斜面に築造された竪穴住居跡群からである。

３区では斜面下位にかけて時期が新しくなる傾向がみられ、中期前半以降になると、２区も含め低地に円形竪穴住居跡が検出され、集落が拡大していくことが判る。

Tab.2　弥生時代各区遺構の消長

	前期後半	前期末	中期初頭	中期前半	中期後半
１区貯蔵穴					
１区甕棺					
２区竪穴式住居跡					
３区竪穴式住居跡					

古墳時代

弥生時代後期から顕孝寺１号墳が築造されるまでの間、遺構、遺物はほとんどみられない。前方後円墳であることが判明した顕孝寺１号墳はSX33出土土器により築造時期を知ることができる。出土須恵器から陶邑編年のMT-15、Ⅱ型式１段階に含まれ、６世紀前半代と考えられる。また、この時期出土例が少ない新羅土器の台付長頸壷222～224が周溝内から破損した状態で出土した。1. 築造時期が磐井の乱に近いと考えられること、2. 糟屋の河口に位置した首長墓であること、3. 新羅との結びつきが想定されることなどから磐井の乱や糟屋屯倉との関連が特に注目される。

中世

遺跡名となった顕孝寺の前身は鎌倉末期に豊後守護の大友貞宗によって建立された臨済宗寺院である。以後、対外拠点となり繁栄を極めていたという。本調査において瓦片の出土やSK11、SK16の13世紀代の木棺墓は関連する可能性がある。さらに１区で検出された柱穴の多くや、３区の小石と瓦片が敷かれた道路状遺構SX500もこの時期とみられる。

2．甕棺墓群について

丘陵頂部からやや降った位置で6基の甕棺墓が検出された。すべての甕棺から朱が検出され、4基の甕棺には総数6本の青銅製利器が副葬されていた。丘陵頂部に位置した顕孝寺1号墳の後円部下や他の甕棺の分布状況が知られていない状況で限りがあるが、調査で判明した成果をまとめておきたい。

a．甕棺墓の時期的変遷と配置

甕棺の型式的特徴と墓坑の切り合い関係から（古）ST107→ST106→ST59→ST60→ST21→ST19（新）の構築順が考えられる。その配置をみると（A）ST106、107、（B）ST21、59、60、（C）ST19の3グループを想定することができる。この配置と構築順を合わせ見ると急斜面となって下降する東端から西側へ順次墓群を形成していることが判る。さらに甕棺の頭位に注目するとST106とST19は他と異にし、さらに青銅製利器を副葬していないことから女性の可能性が高い。Fig.92で示す方形に近い区画を想定した場合、外側へ頭位を向けた埋葬が考えられる。

b．甕棺の被葬者について

墓群の開始時期に近いと考えられるST107は墓坑、甕棺の大きさともに他より突出し、棺内に2本の青銅製利器を副葬するなど部族のリーダー的性格がみられる。さらに隣接してシャーマン的な女性と男女ペアによる埋葬が想定される。B群は明らかに戦士としての性格がみられ、21号、60号の上部に頭部を納棺していたとみられる壷棺が埋置されていたことは戦闘による死亡が示唆される。21号はその中でも墓坑が大きく、2本の青銅製利器が副葬されているなど戦士のリーダー的性格が想定される。C群のST19は既述のように女性とみられ、西側に離れて位置することや、墓坑が大きい特徴がみられる。

c．青銅製利器とその配置

副葬された青銅器に関連した特徴を列挙してみると1. 墓制はすべて甕棺墓である。2. 銅

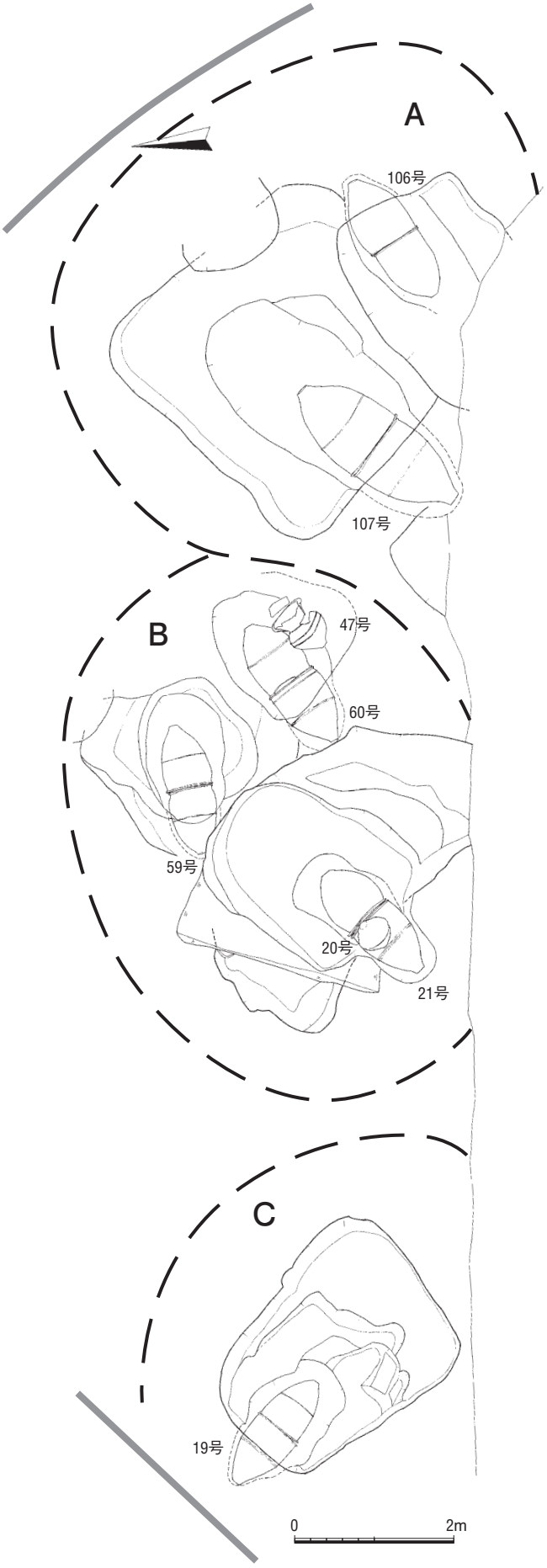


Fig. 92　甕棺墓群分類配置図（1/80）

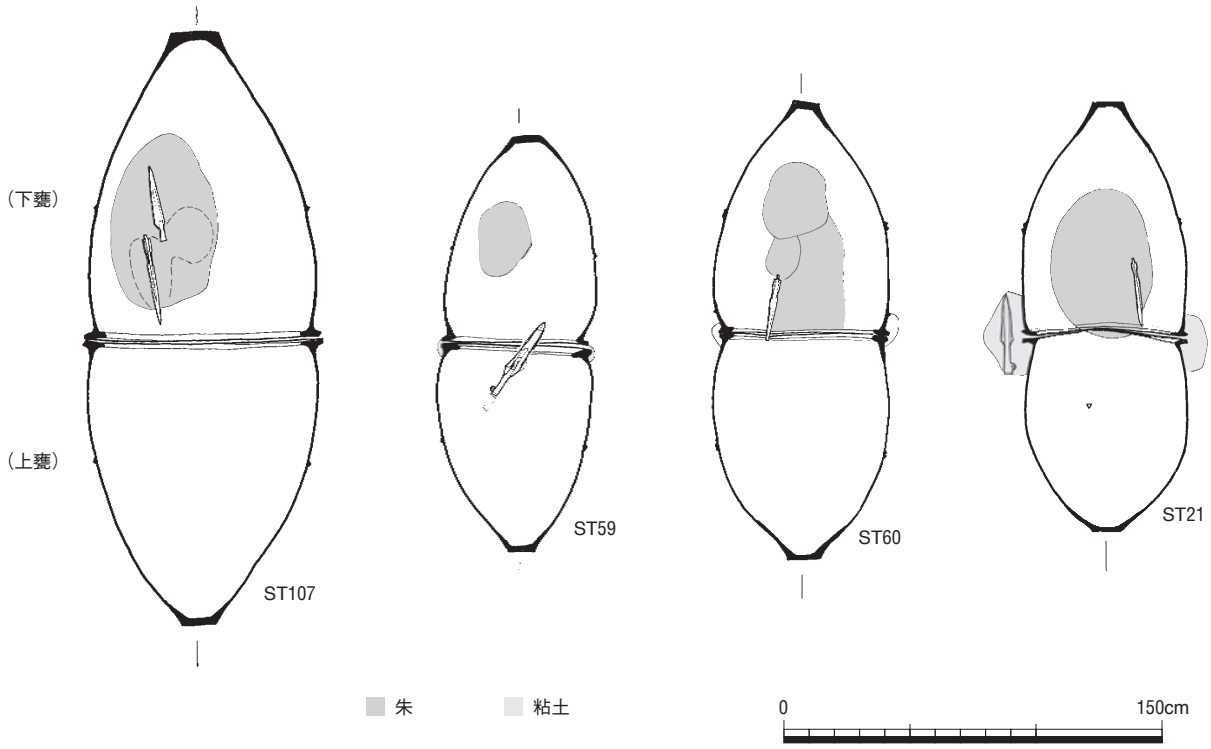


Fig. 93　朱と青銅製利器配置図（1/30）

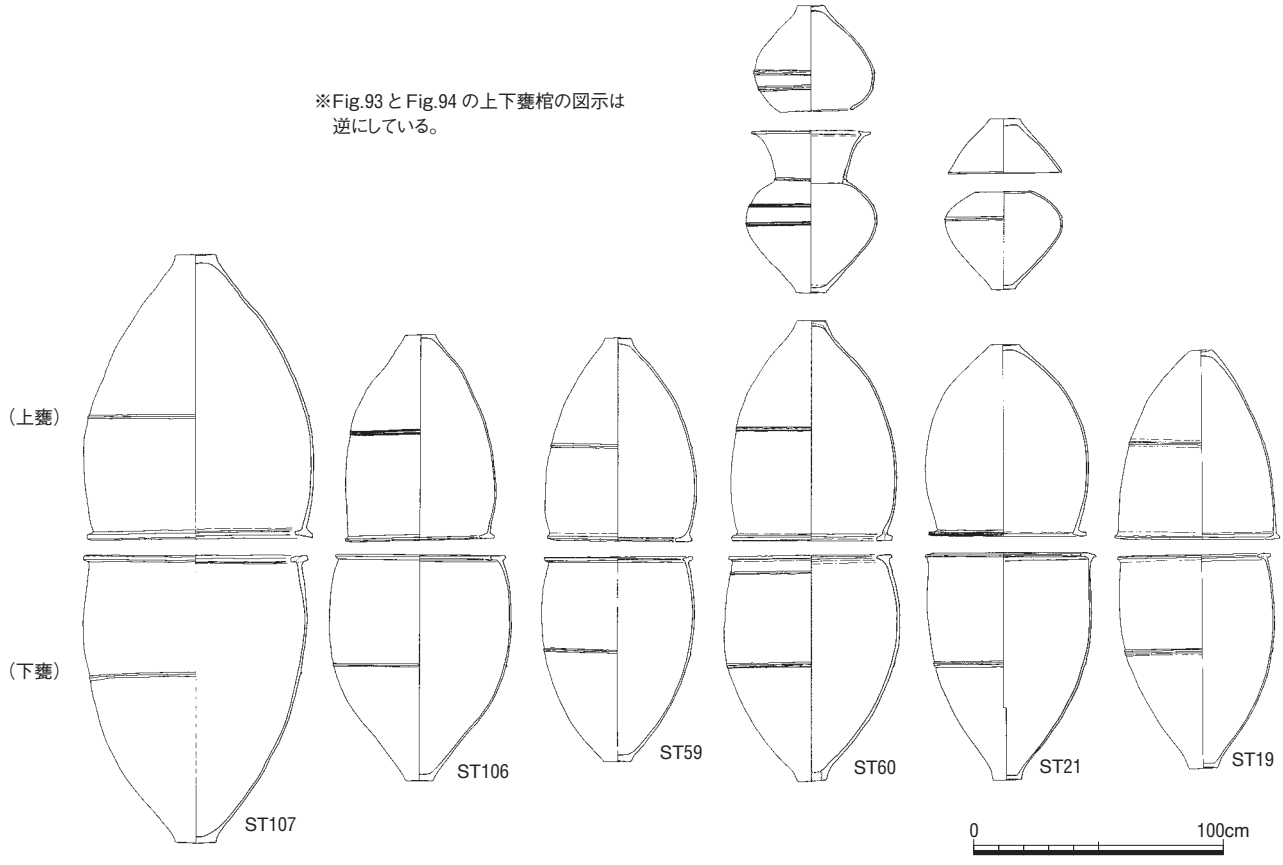


Fig. 94　甕棺一覧図（1/30）

剣は足元側を向いた切先が甕棺合口付近に位置した下甕内に置かれている。その位置は胸の側辺に位置し、ほぼ一定している。これに対し、銅矛は切先を上部（頭部側）へ向ける原則はみられるが、置かれた位置は107号では頭部横付近、59号は腹部上、21号は棺外の合口目張り粘土内と多様である。3. 銅戈は出土していない。4. 装身具は出土していない。5. すべての棺内において頭部から胸付近に朱が散布されるている。１、２に関しては福岡平野における文化圏の特徴と共通する。

ｄ．埋葬方法について

上部を古墳周溝で壊されたST59、60号を除き、墓坑が方形を呈している。遺存が良好であった21号では階段状に深く掘削し、最終の甕棺周辺を掘削する面は方形のテラスを成形している。そこから甕棺が収まる深さまで掘削している。従って、甕棺が完全に埋置された時点で方形の平場ができ、一連の行為において区切りとなった可能性がある。これはST19号以外の甕棺にほぼ共通する。ST19号の場合、最終掘削の深さが甕棺を覆ってしまう深さまで達していなかったが、縦断面の土層や平面から、覆ってしまうまでの土層とその上層では明らかに異なり、埋め戻しの中断が想定される。従って甕棺を完全に埋め戻した時点で祭祀行為が行われた可能性は高いと思われる。

３．弥生前期末～中期前半の土器について

貯蔵穴出土と３区竪穴式住居跡から弥生前期後半（板付Ⅱｂ式）から弥生中期前半（須玖Ⅰ式）までの土器が多く出土した。同じ集落内での変化が辿れることからまとめておきたい。分類に際しては弥生時代早期から前期末までの編年を提示した吉留氏の論文〔吉留1994〕を参考にした。

Tab.2で示したように貯蔵穴は弥生前期後半の板付Ⅱｂ式を中心に少量の中期前半（須玖Ⅰ式）までの遺物を含む。これに対し３区竪穴住居跡からは降る前期末（板付Ⅱ式）から中期前半（須玖Ⅰ式）までの土器片が出土した。器種が甕、壷、鉢を主にある程度まとまり変化が辿れることから以下の遺構を基準として４式に分類した。今までの編年との対応は概ね１式が板付Ⅱｂ式、２式が板付Ⅱｃ式、３式が城ノ越式、４式が城ノ越新相～須玖Ⅰ式となる。

（1式）	（2式）	（3式）	（4式）
SU06　SU07	SC502(2～3式)	SC503	SC513　SC514　SC515・516
SU08　SU09	SC510　SC512	SC529	SC524　SC564
SU27 SU100	SC522		

甕（Fig.95）

１式の甕１類～４類は変化が小さく２式のSC502出土甕に継がれていく。しかし、他の型式も含め、SC502出土土器では器厚となり口縁端部を面取りする特徴がみられる。２式になると１式ではSU07出土の74、１点のみであった甕７類の「亀の甲式」が増えて、４式まで続く。この甕７類はSC502出土のなかで形態差がみられ、胴部が張らないものから張り出すタイプに、口縁部の上面が傾斜するものから水平となり断面三角形の頂部が尖ったものから丸く、短くなったものに変化する。３式で口縁部が短いものと長く伸長したものの２種に分かれる。SC502出土の320は３式まで降る可能性がある。４式になると伸長したものは４類と影響し合い、くの字に長く伸びた甕10類に変化していく。甕１類は４式で口縁部が横に伸長していく甕９類に変化していく。甕２類は２式まで、甕３類は３式まで系譜を追えるが、以後消失している。甕４類は４式まで続き、口縁部が断面方形を呈し、長く伸長した甕10類の444に変化する。口縁部が伸長した487、444、452は須玖Ⅰ式まで降ると思われる。

壷（Fig.96）

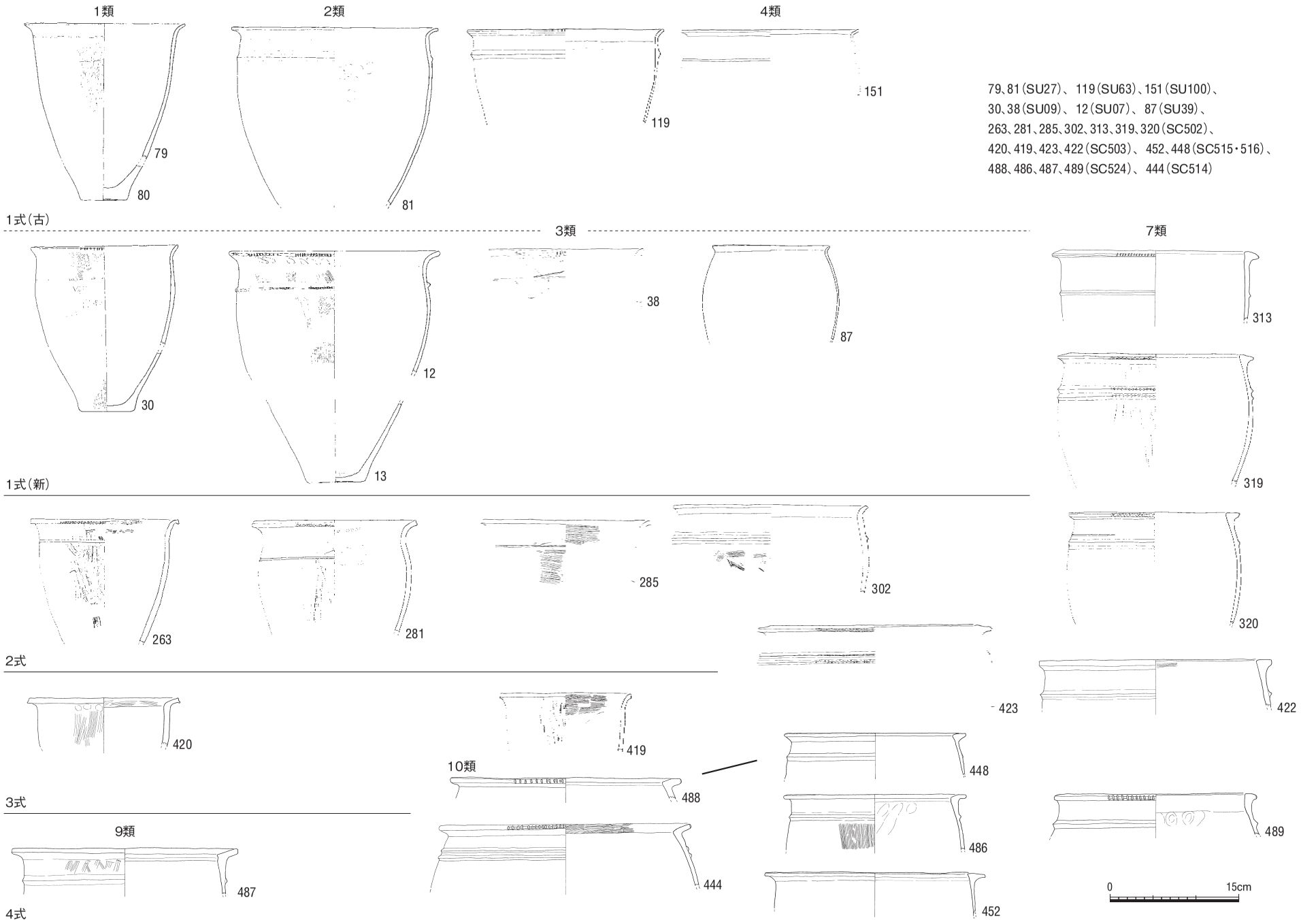
１式は１類、２類、５a類、６類が含まれる。SU06の１は粘土を上面に貼り付けた5bに近いが内面に嘴状の張り出しがある６類とする。３式の基準としたSC503から出土した5a類の417はSU66出土の128と近似し、１式であろう。２式になると１類は消失し、２類、３類、5b類、５c類が含まれる。頸部の内傾が小さくなり立ち上がった３類の381、5b類の430が出現する。同様に内傾した5a類も口縁が大きく外反し、口縁端部が水平に近くなった5b類が現れ、小型では430、中型では388、387がみられる。さらに口縁端部の上面に貼り付けた粘土が水平ないし、外傾した甕形に近い5c類の324、323は次の３式まで降る可能性がある。３式になると３類の頸部は直立し、44、381が含まれる。381は２式を多く含むSC502出土であるが、上述の5c類の324、323とともに３式まで降る。44はSU17から出土したことから貯蔵穴は３式まで存続していることが判る。４式になると頸部が直立した４類の476、445が現れる。６類も内側へ伸長した438や外側へ水平に延びた439が現れる。この439は須玖Ⅰ式まで降ると思われる。

鉢（Fig.97）

小型の鉢の口縁部は壷や甕の影響を受けた多様な形態がみられるが、概ね如意状に外反するものが主である。如意口縁の甕１類に含めていた269以下は鉢の形状に近く、器厚となり、口縁端部を面取りした３式の418まで継続している。大型の５、６類も外反が大きい口縁部で球形に近い胴部の１式から器厚となり口縁部の外反が弱くなり胴部下半が窄まる３式に近いと思われるSC502出土の397に変化していく。

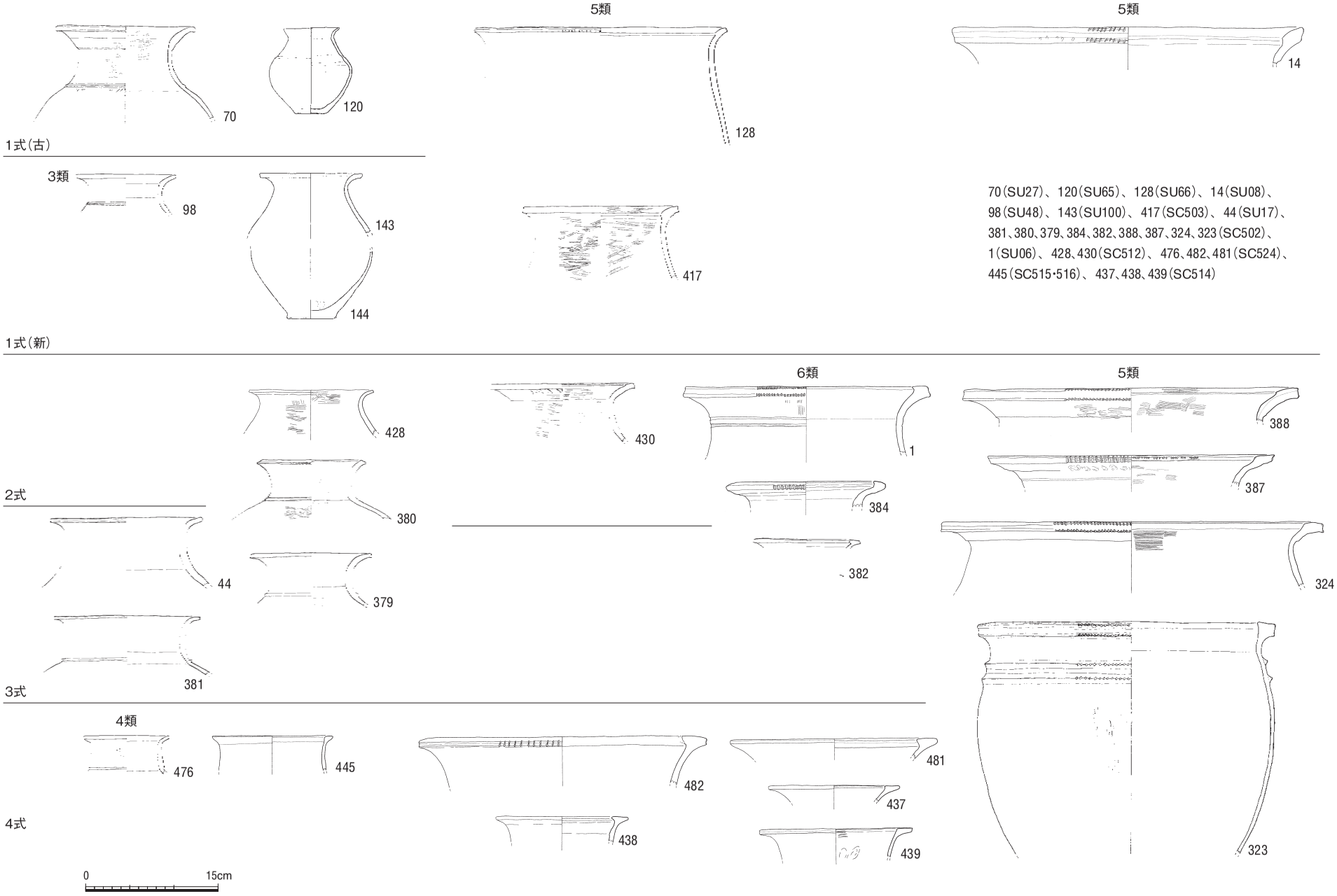
参考文献

溝口孝司1998「カメ棺墓地の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
田中良之2001「墓地から見た親族・家族」『古代史の論点』２　女と男、家と村　p-142
寺沢智子2001「権力と女性」『古代史の論点』２　女と男、家と村　p-251
吉留秀敏1994「板付式土器成立期の土器編年」古文化談叢　第32集



79、81(SU27)、119(SU63)、151(SU100)、
30、38(SU09)、12(SU07)、87(SU39)、
263、281、285、302、313、319、320(SC502)、
420、419、423、422(SC503)、452、448(SC515・516)、
488、486、487、489(SC524)、444(SC514)

Fig. 95 出土土器分類図1(甕 1/6)



70(SU27)、120(SU65)、128(SU66)、14(SU08)、
98(SU48)、143(SU100)、417(SC503)、44(SU17)、
381、380、379、384、382、388、387、324、323(SC502)、
1(SU06)、428、430(SC512)、476、482、481(SC524)、
445(SC515･516)、437、438、439(SC514)

Fig. 96　出土土器分類図2（壷　1/6）

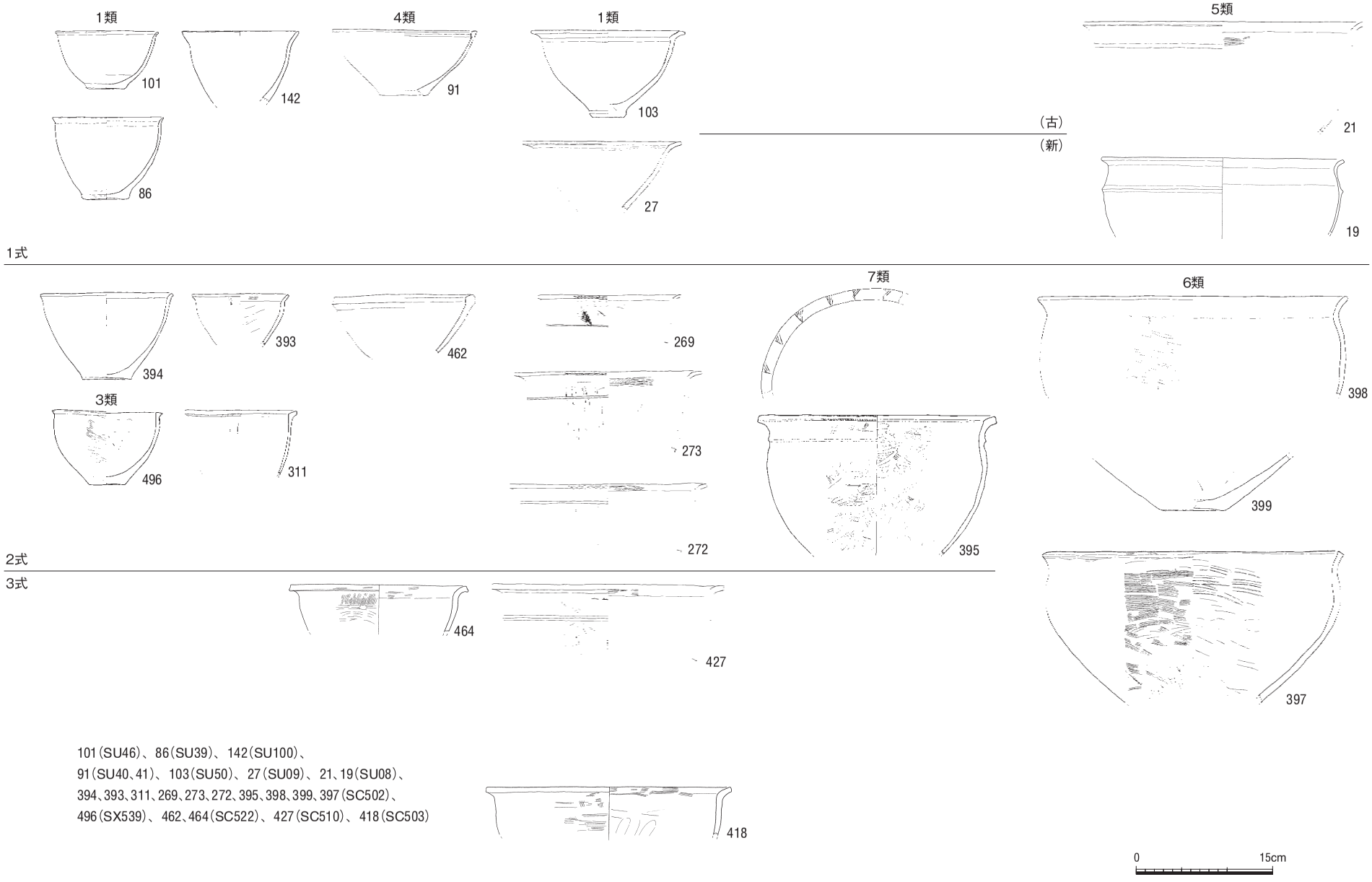


Fig. 97　出土土器分類図3（鉢　1/6）

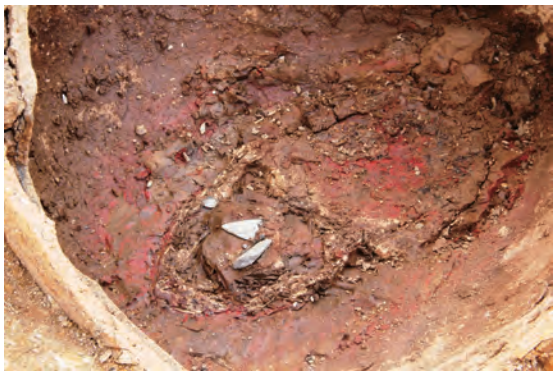
101(SU46)、86(SU39)、142(SU100)、
91(SU40、41)、103(SU50)、27(SU09)、21、19(SU08)、
394、393、311、269、273、272、395、398、399、397(SC502)、
496(SX539)、462、464(SC522)、427(SC510)、418(SC503)

ph. 1　顕孝寺1次調査全景

ph. 2　甕棺出土青銅製利器（左からST21出土銅矛、銅剣、ST59出土銅矛、ST60出土銅剣、ST107出土銅矛、銅剣）

ph. 3　ST19甕棺埋置状況（縦断面土層）

ph. 4　ST20、21甕棺埋置状況



ph. 5　ST20内下顎骨と石剣切先出土状況

ph. 6　ST21銅矛出土状況（棺外目張り粘土内）

ph. 7　ST21銅矛、銅剣出土状況

ph. 8　ST59人骨、銅矛出土状況

ph. 9　ST60銅剣出土状況

ph. 10　ST107銅矛、銅剣出土状況
（前側に銅剣、奥に銅矛の袋部）

ph. 11　ST107銅剣茎付着絹糸痕有機物（拡大）

ph. 12　ST59銅矛袋部内木柄と巻かれた紐状繊維

ph. 13　3区SC502遺物出土状況

ph. 14　3区SC502検出状況

ph. 15　1区SU23遺物出土状況

ph. 16　1区SU17土層

ph. 17　3区SC502埋土内貝層SX580検出状況

ph. 18　2区全景

ph. 19　顕孝寺1号墳後円部墳丘最下の焼土、炭層（SX52）

ph. 20　周溝SD05内SX33祭祀遺物出土状況

ph. 21　周溝SD10内出土新羅土器224

報 告 書 抄 録

ふ り が な	けんこうじいせき１
書　　名	顕孝寺遺跡１
副 書 名	顕孝寺遺跡第１次調査の報告
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1409集
編 著 者 名	荒牧宏行
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神1-8-1　TEL　092－711-4667
発 行 年 月 日	2021年３月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
顕孝寺遺跡（けんこうじいせき）	福岡県福岡市東区多々良（ふくおかけんふくおかしひがしくたたら）１丁目661-3 ほか	40131	0076	33°37′56″	130°27′9″	20160125 ～ 20160721	1,500	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
顕孝寺遺跡第１次	集落跡・古墳・社寺跡	弥生・古墳・中世	貯蔵穴・甕棺・古墳・柱穴	弥生土器・青銅製利器	青銅製利器を副葬した甕棺墓6基、新羅土器が出土した前方後円墳１基

要　　約	糟屋平野を流下する多々良川の河口に位置する。丘陵頂部付近には弥生前期後半から中期初頭にかけて構築された貯蔵穴群48基が検出された。遅れて弥生中期初頭から前半にかけては甕棺墓が6基検出され、4基からは青銅製利器が出土した。6世紀前半に築造された前方後円墳が検出された。周溝から破損した新羅土器が出土した。磐井の乱や糟屋屯倉との関連が注目される。中世では石や瓦を敷いた道路状遺構や木棺墓が検出された。瓦片が出土するとから顕孝寺の前身に関連している可能性がある。

顕孝寺遺跡（けんこうじ）1

―顕孝寺遺跡第１次調査の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1409集

2021年（令和３年）３月25日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目１番８号

印　刷　株式会社インテックス福岡

福岡市博多区東那珂１丁目15番１号